

第294図 第40号住居跡出土遺物

壁溝は検出されなかった。柱穴は6基検出されたが、支柱穴と思われるものはP1～4の4基である。支柱穴の深さは、P1=70cm、P2=70cm、P3=60cm、P4=66cmである。

炉跡は住居跡中央で検出された。埋甕炉であるが、北側半分を欠損する。炉は50cm×30cm程の範囲に浅い掘り込みを有するが、土器を埋設するための掘り込みは小さく、土器の周囲は被熱による焼土化が著しい。炉の南側に現存していた炉体土器は入り口部に向いた部分のみが残っていたものである。意図的に入り口部に向いた部分を残したのであろうか。本遺跡においても、こうした事例が多い。

埋甕は検出されなかった。

住居跡は炉体土器から、勝坂式中段階の藤内式期の所産と思われる。

第42号住居跡

北東側半分が調査区外のため明瞭でないが、平面形は北西方向に細長い楕円形か隅丸長方形を呈するものと思われる。

壁溝は3本が検出された。一番外側の壁溝1が壁直下を全周すると思われ、内側で検出された壁溝2は途中で途切れており、明瞭でない。壁溝3は部分的に検出されており、壁溝2との関係も不明瞭である。

柱穴は3軒合計で、31基検出された。うち第41号住居跡の6基を除くと、25基が第42号住居跡と第50号住居跡の柱穴となる。重複する住居跡に所属する支柱の選定は難しいが、第42号住居跡の支柱穴は深さ及び配置からはP8周辺、P12周辺、P16周辺、P19周辺の4本が明らかであるが、未調査区からの検出状況では、5～6本支柱の可能性がある。壁溝が3本で、組み合わせの難しい柱穴が多数存在することから、少なくとも3回以上の建て替えが行われたものと判断される。

支柱穴の深さは、P8=56cm、P12=60cm、P16=32cm、P19=55cmである。

住居跡の中央部やや北寄りに石囲埋甕炉が検出された。炉の入り口側に向いた南東側に大きな横長の礫が配置され、それを基準にやや小さい礫を方形状に囲ったものと思われる。また、炉体土器の西側には、古い炉である埋設土器の痕跡が残っていた。

炉体土器の外側の土は、被熱による焼土化が著しい。

埋甕は検出されなかった。

住居跡は炉体土器から勝坂式終末期の所産と思われる。

第50号住居跡

第41号住居跡、第42号住居跡と重複し、一番古い住居跡と想定されたが、南北の壁の一部が現存するのみで、平面形などは不明である。大半は第42号住居跡に壊されている。

支柱穴はP30、17、10の3基が想定されるが、4本目が不明である。

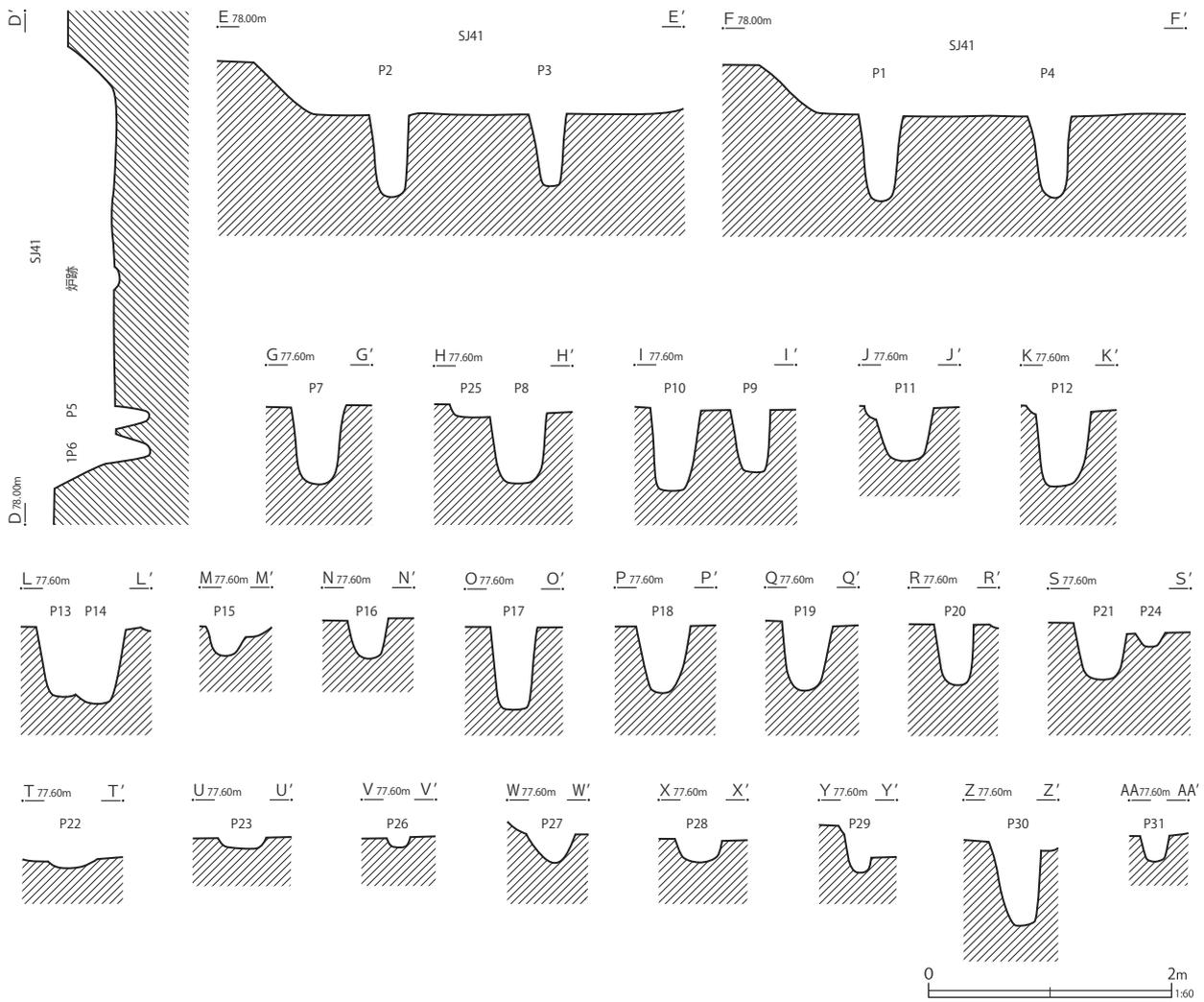
炉は炉床の残骸がP10とP11の間で、壁溝3に切られて存在する。この炉を中心に支柱が巡ると思われるが、第41号住居跡側で不明である。

住居跡の時期は切り合い関係から、藤内式かそれ以前の時期の所産と推定される。

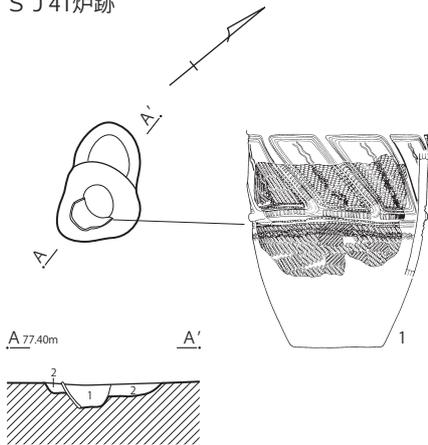
第41号住居跡出土遺物（第299図1～第301図34）

土器類は1～26である。1は炉体土器である。キャリパー形深鉢の胴部破片である。地文は単節RL縄文を横位施文や縦位施文し、羽状を呈す部分がある。胴部は刻みを施す隆帯で菱形状区画文を施文し、隆帯脇には2条の押引結節沈線文を沿わせている。菱形区画内には2本の結節沈線の小鋸歯状文を施文し、胴部区画文下にもやや間隔を空けて同種の沈線文を施文する。藤内式段階と思われるが、全面に地文縄文を施文する例は珍しいであろう。

2は床面から出土した土器で、口縁の一部と底部を欠損する。4単位の山形把手を有する波状口縁で、波頂部から隆帯を垂下して口縁部を4単位

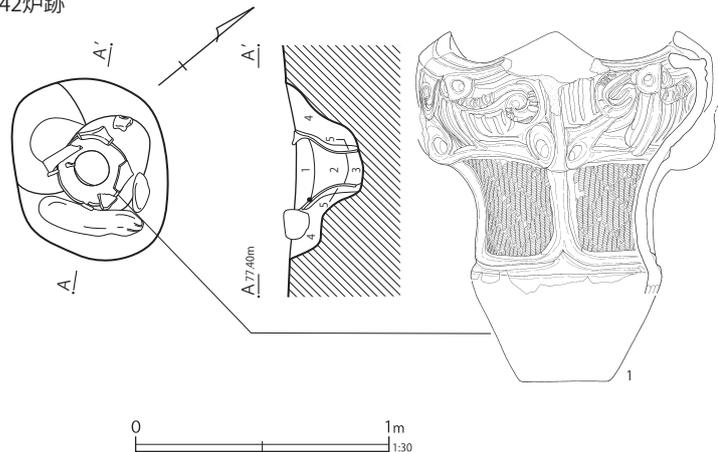


S J 41 炉跡



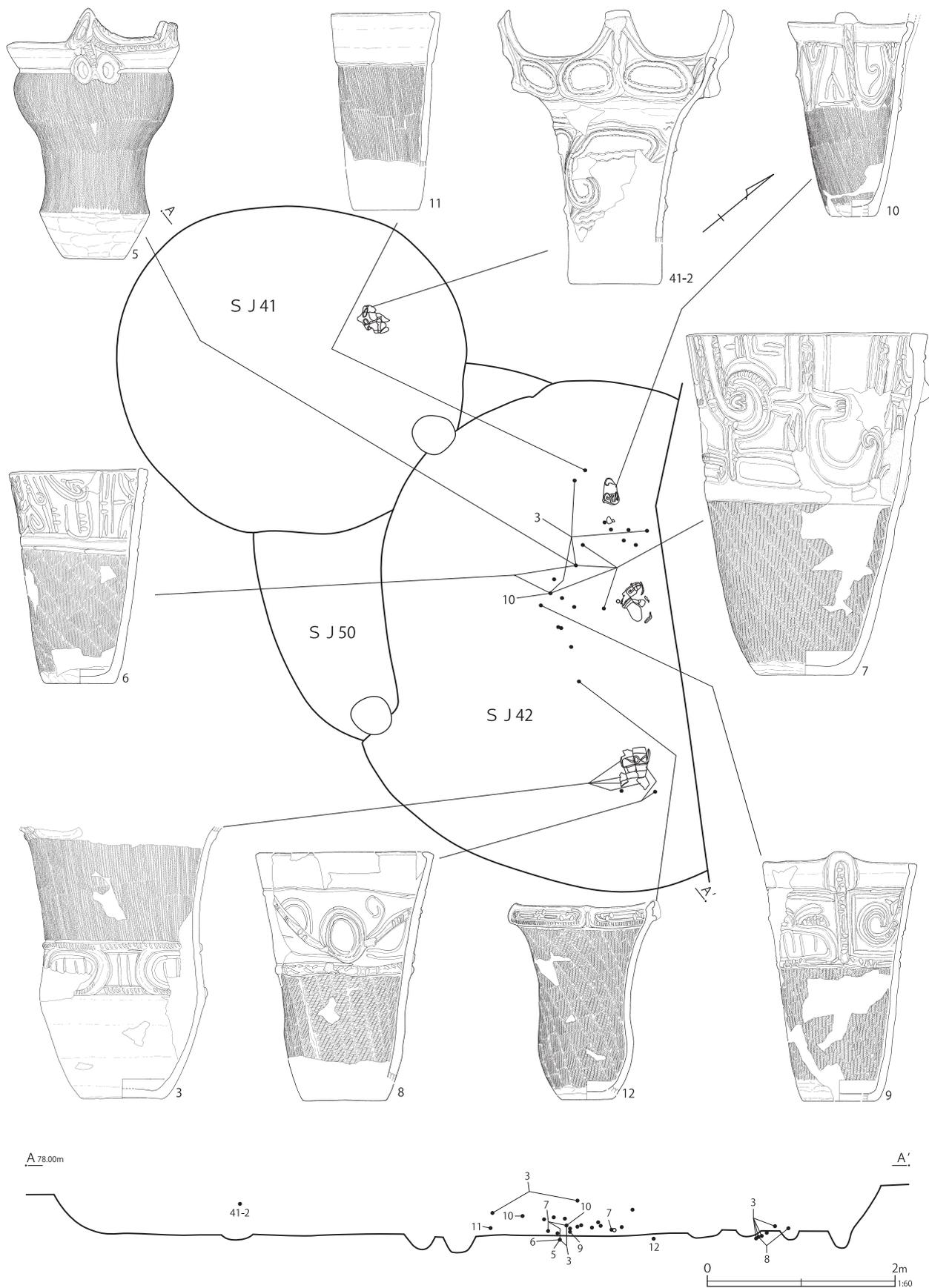
- S J 41 炉跡
- 1 暗褐色土
 - ローム粒子多量
 - ロームブロック・焼土粒子少量
 - 焼土ブロック (径 0.5cm) 微量
 - 2 暗褐色土
 - ローム粒子・焼土粒子多量
 - ローム小ブロック微量

S J 42 炉跡

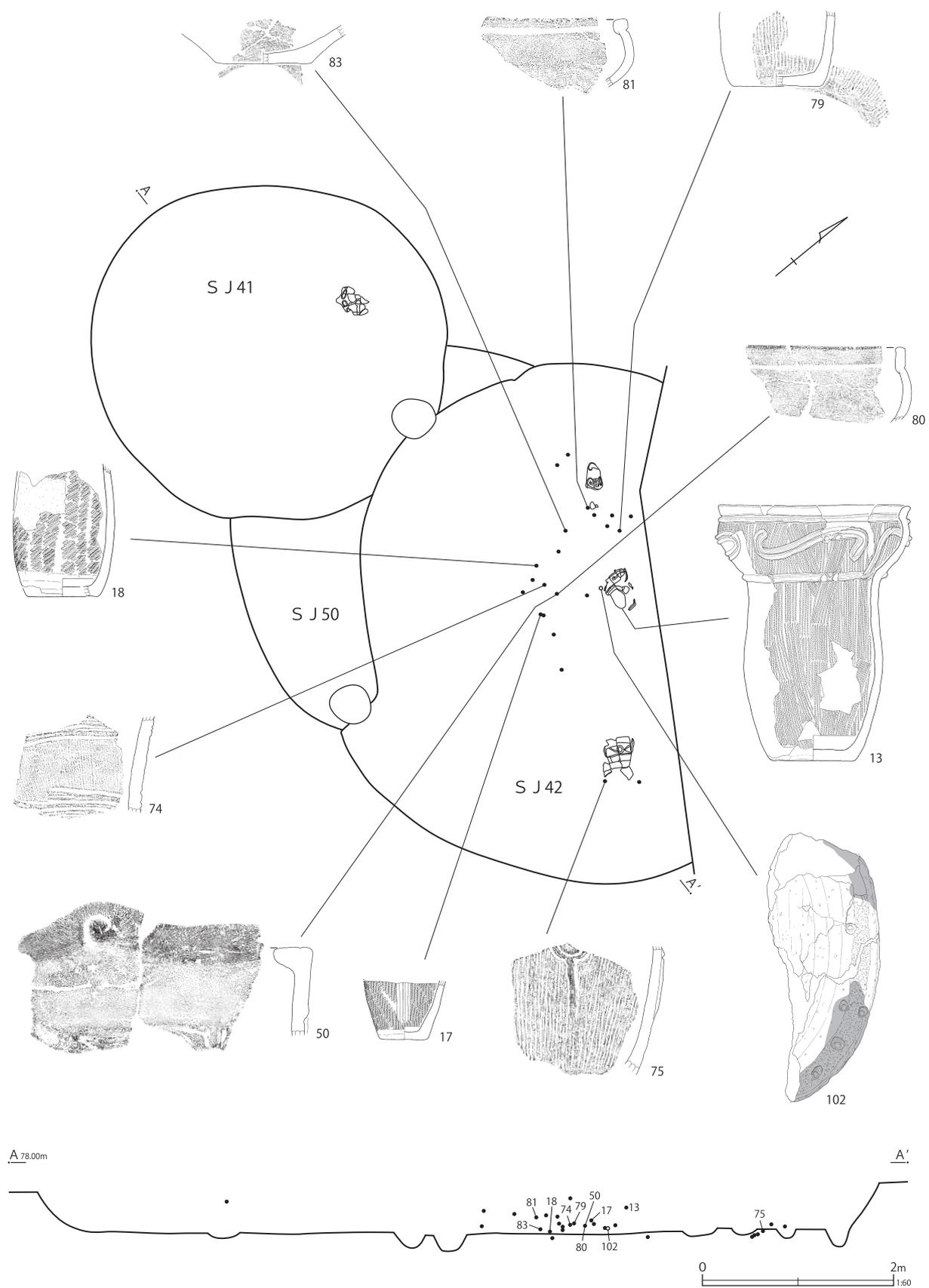


- S J 42 炉跡
- 1 暗褐色土
 - ローム粒子・炭化物粒子少量
 - 2 暗褐色土
 - ローム粒子多量
 - ローム小ブロック・炭化物粒子少量
 - 焼土粒子微量
 - 3 褐色土
 - ローム粒子・ソフトローム多量
 - 4 暗褐色土
 - ローム粒子・焼土粒子多量
 - ロームブロックを若干含む
 - しまり良い
 - 5 暗赤褐色土
 - 4層が被熱して赤褐色化した層
 - 4層よりしまり良い

第296図 第41・42・50号住居跡 (2)



第297図 第41・42・50号住居跡遺物出土状況(1)



第298図 第41・42・50号住居跡遺物出土状況（2）

第122表 第41・42・50号住居跡柱穴計測表（第295・296図）

ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)												
P 1	38.0	70.0	P 2	35.0	70.0	P 3	35.0	60.0	P 4	45.0	66.0	P 5	25.0	40.0
P 6	27.0	40.0	P 7	(50.0)	65.0	P 8	50.0	56.0	P 9	35.0	50.0	P 10	45.0	65.0
P 11	48.0	45.0	P 12	45.0	60.0	P 13	55.0	55.0	P 14	55.0	65.0	P 15	34.0	23.0
P 16	35.0	32.0	P 17	40.0	68.0	P 18	47.0	55.0	P 19	45.0	55.0	P 20	45.0	50.0
P 21	42.0	45.0	P 22	45.0	10.0	P 23	40.0	10.0	P 24	30.0	12.0	P 25	45.0	10.0
P 26	20.0	10.0	P 27	40.0	25.0	P 28	40.0	20.0	P 29	22.0	15.0	P 30	45.0	65.0
P 31	21.0	20.0												

に分割して、それぞれに楕円区画文を配し、8単位の楕円区画文を構成するものと思われる。胴部は区画隆帯から渦巻文を何単位かで垂下させる構成をとり、渦巻文からさらに隆帯を垂下する。口縁部の区画に沿って2本の結節沈線を施文し、胴部の隆帯には同様に2本の結節沈線や、やや間延びした結節沈線、波状文化した平行沈線等を施文している。阿玉台Ⅱ式比定されよう。

3は扇状把手で隆帯や区画内に角押文を施文する。猪沢式に比定されよう。

4は口縁部破片であり、隆帯に沿って押引結節沈線に沿わせている。阿玉台Ⅱ式に比定される。

破片では5、7、9は半截竹管状工具による平行結節沈線を施文するもので、阿玉台Ⅱ式並行期となろう。

6、8は隆帯の楕円区画に沿って1列もしくは2列の角押文を施文するもので、猪沢式系土器と思われる。

10～12は隆帯脇にキャタピラ文状の爪形文や三角押文の鋸歯状文を施文するもので、新道式から藤内式にかけての土器群であろう。14、16は蓮華文や、爪形文脇に沈線化した波状文を施文するもので、藤内式の新しい段階のものであろう。24は胴部の張る器形であるが、パネル文を施文しており、藤内式段階であろう。

13、15、17～23、25、26は勝坂式新段階から終末段階の土器群である。15は波状口縁部に蛇頭状のモチーフを施文している。他は、刻み隆帯か、縁に刻みを施した隆帯で区画やモチーフを描いている。

石器は27～34が出土した。

27は粗粒の石材を用いたスクレイパーである。

28～34は打製石斧である。28は楕円形を、29、30が短冊形を、31～34が撥形を呈する。刃部は28が片刃、31、33が両刃である。

第42号住居跡出土遺物（第302図1～第311図102）

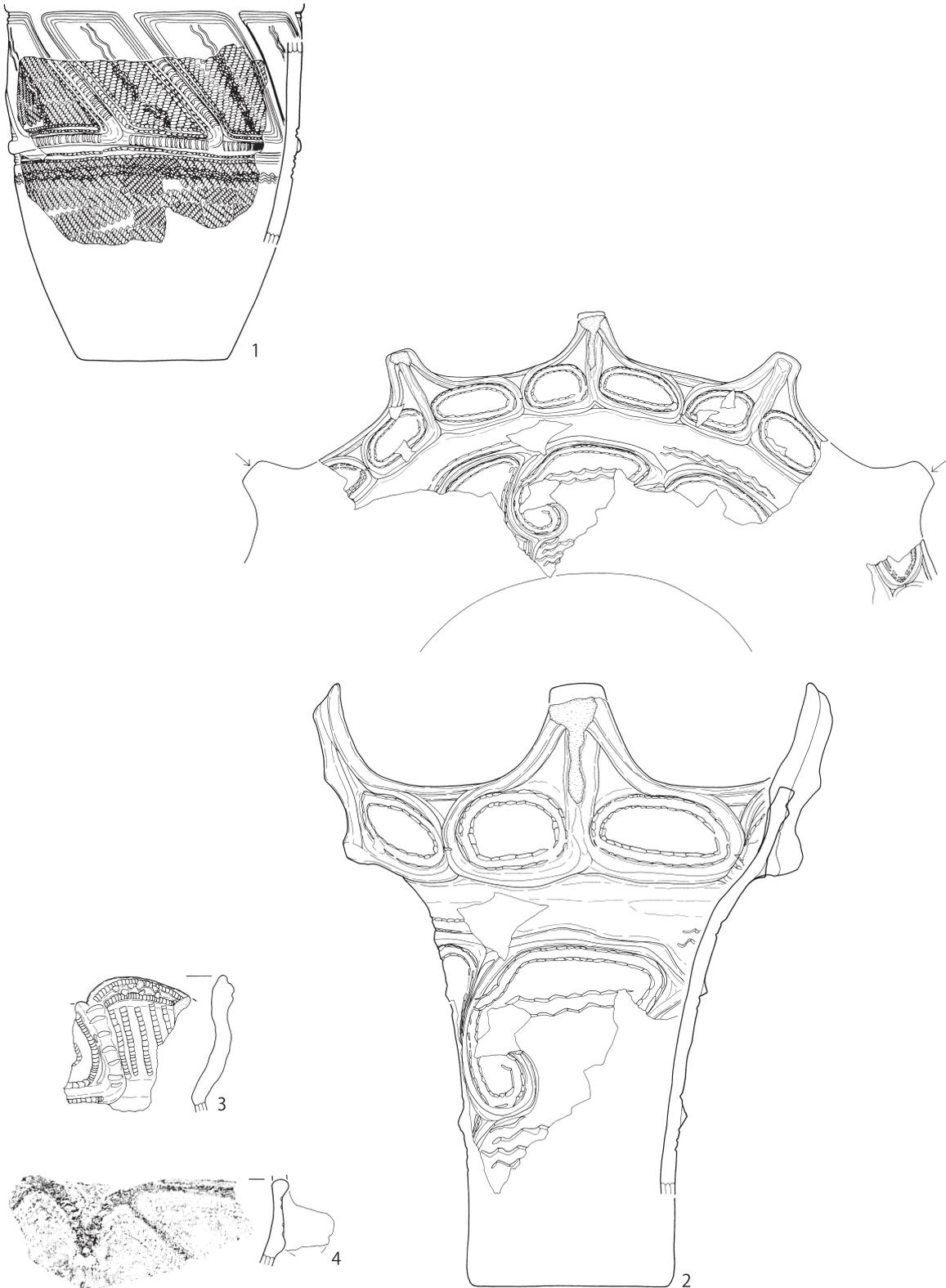
20、21はP 7、22、23はP 9、24はP 12、25はP 20からの出土である。

1は炉体土器である。4単位の波状口縁で、内湾する口縁部が開き、胴部で括れ、腰高の底部が張り出す器形を呈する。口縁部では波頂部から隆帯を垂下させ、頸部の眼鏡状把手と連結する。口縁の波底部にも眼鏡状把手を有し、隆帯を垂下して口縁部を8単位の区画している。口縁部の眼鏡状把手からは左右に隆帯の渦巻文が派生し、波頂部からの垂下隆帯と融合したモチーフを構成する。モチーフの余白には集合沈線、上下差し切り沈線、三叉文等を施文する。胴部には波頂部から垂下する隆帯で4単位の区画を施し、地文に0段多条RLの縦走縄文を施文する。

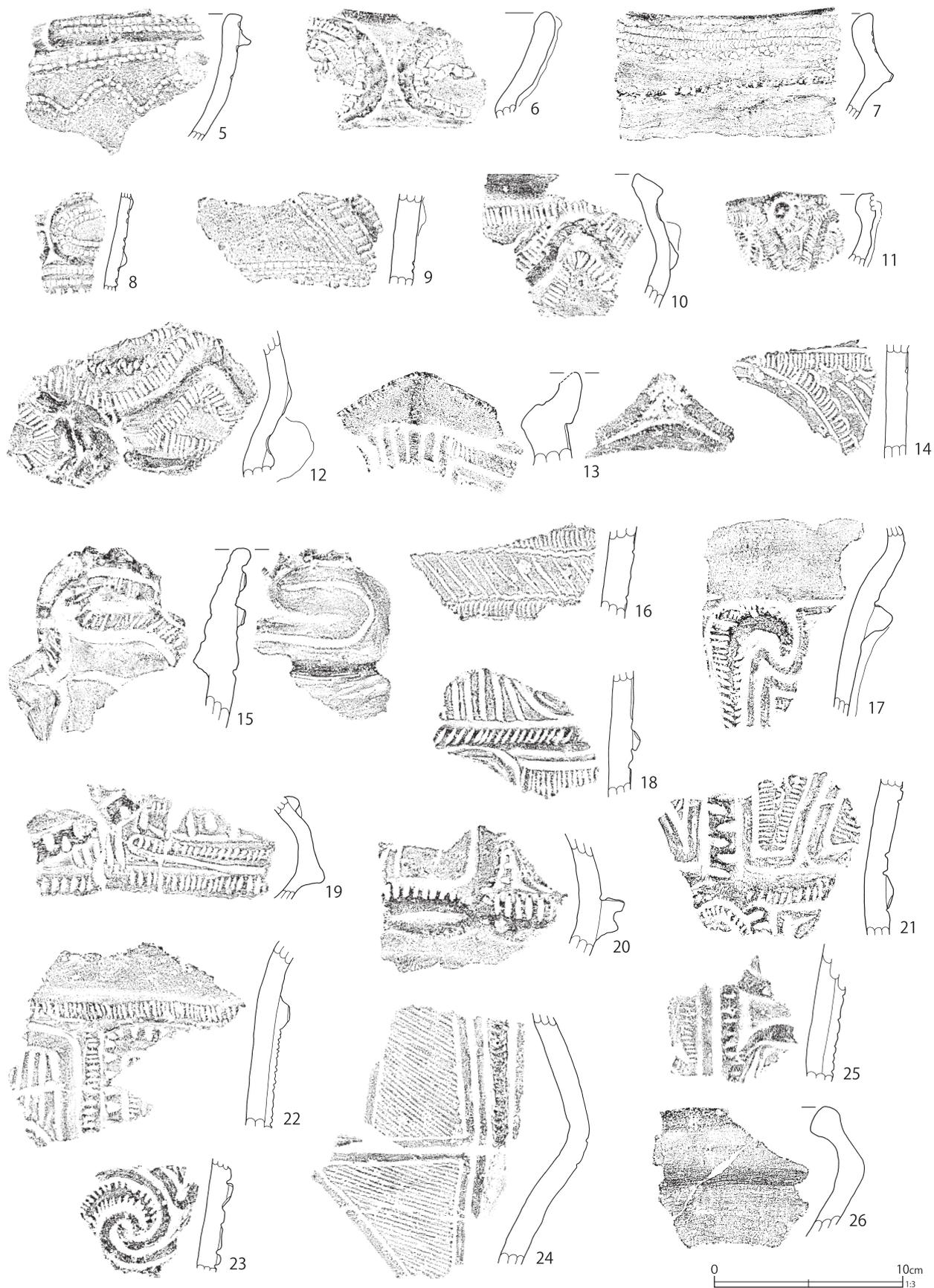
2は1と同様の器形で、地文0段多条RLの縦走縄文上に幅広の低隆帯で渦巻文を連結するモチーフを描いている。

3は口縁部を欠損するが、キャリパー形深鉢形土器で、底部文様帯に楕円区画文を配している。区画内には上下差し切り沈線文を施文する。胴部の地文は撚糸文Lである。

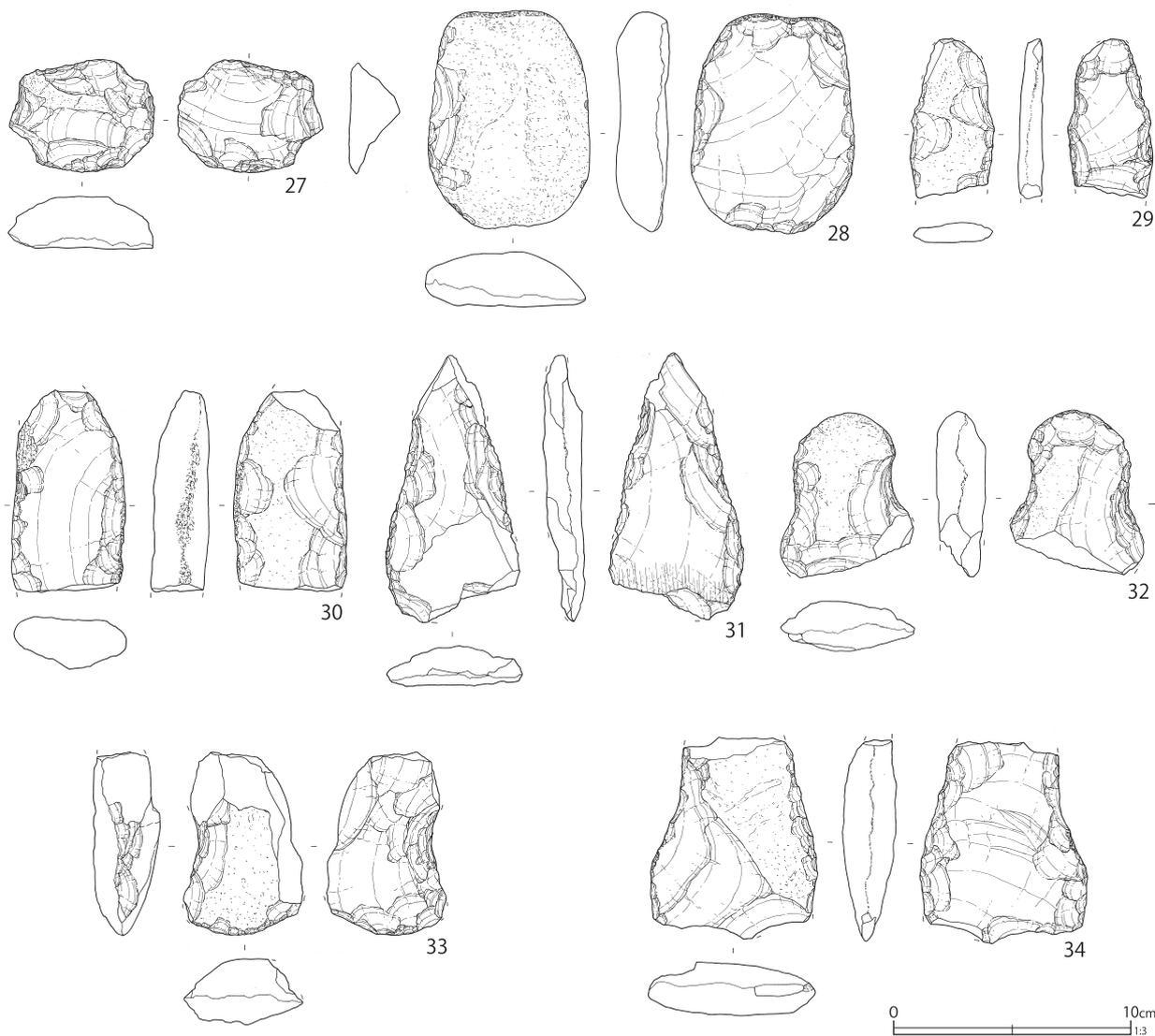
4は内湾する無文の口縁部に、円窓を有する大形の山形把手を付け、向かって左側に蛇行して垂



第299图 第41号住居跡出土遺物(1)



第300図 第41号住居跡出土遺物(2)



第301図 第41号住居跡出土遺物（3）

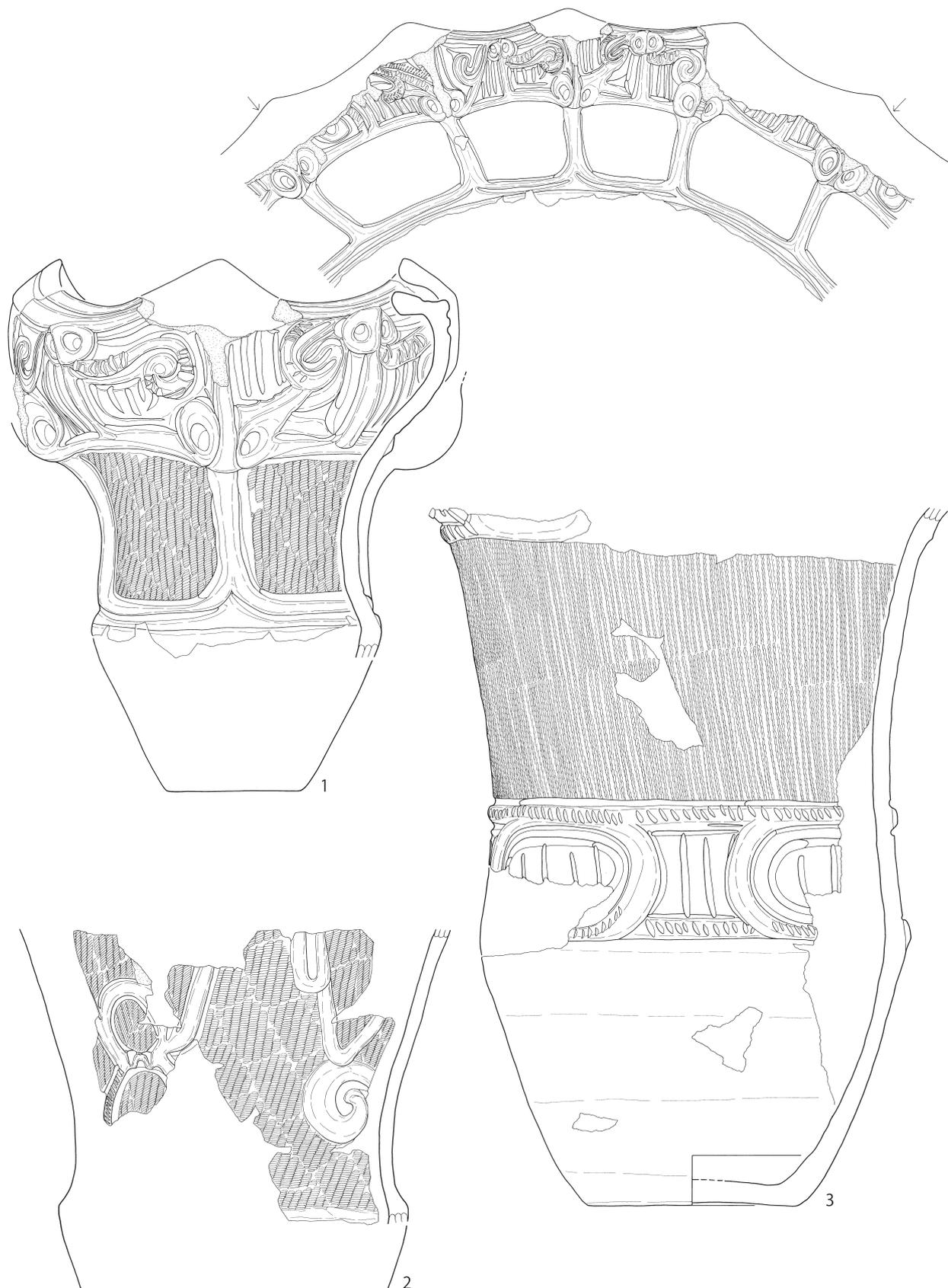
第123表 第41号住居跡出土復元土器観察表（第299図）

番号	器高(cm)	口径(cm)	最大径(cm)	底径(cm)	備考
299-1	[13.0]	-	(19.0)	-	20%
2	[33.1]	30.7	-	-	50%

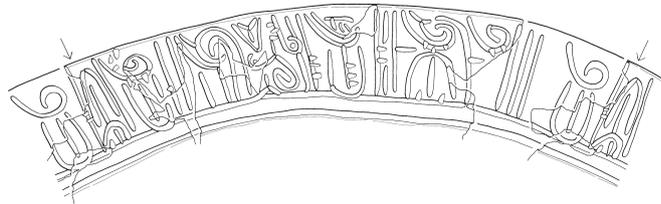
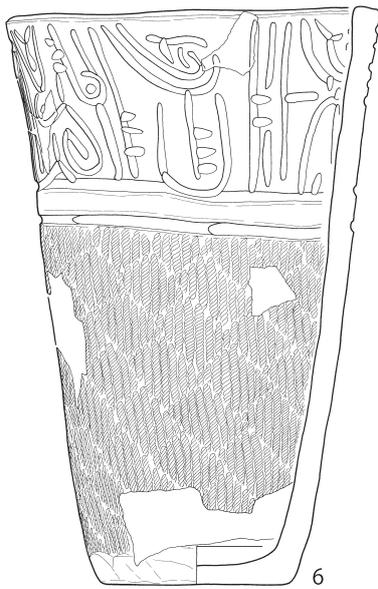
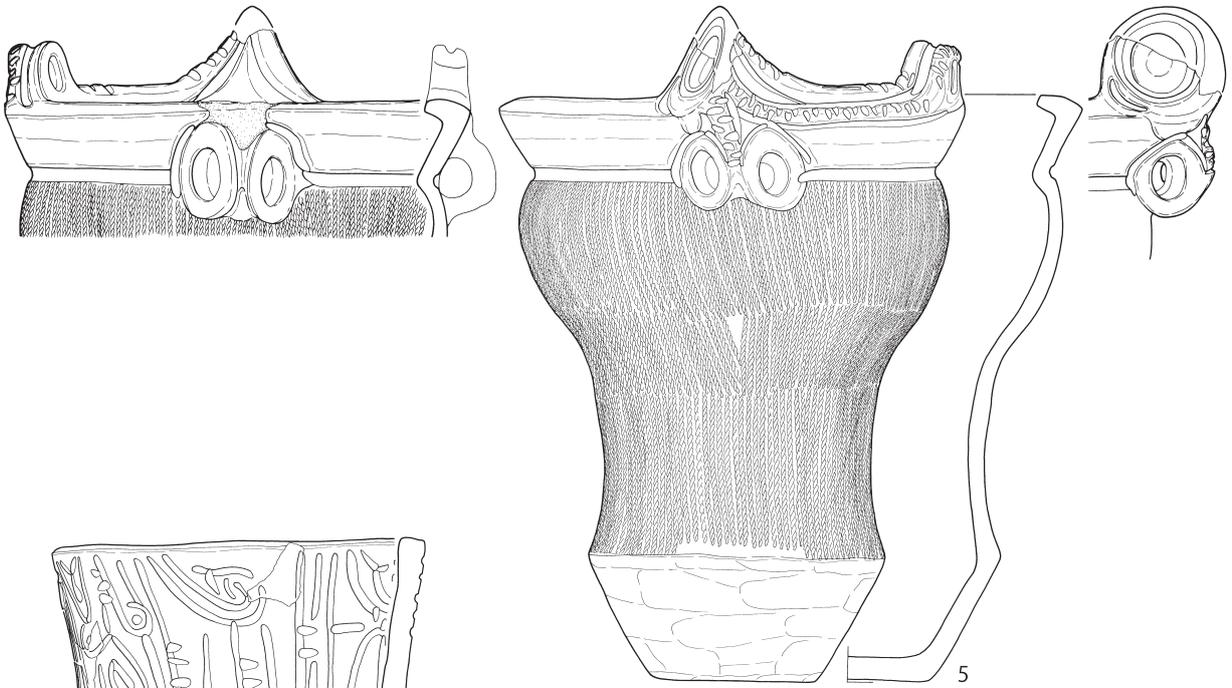
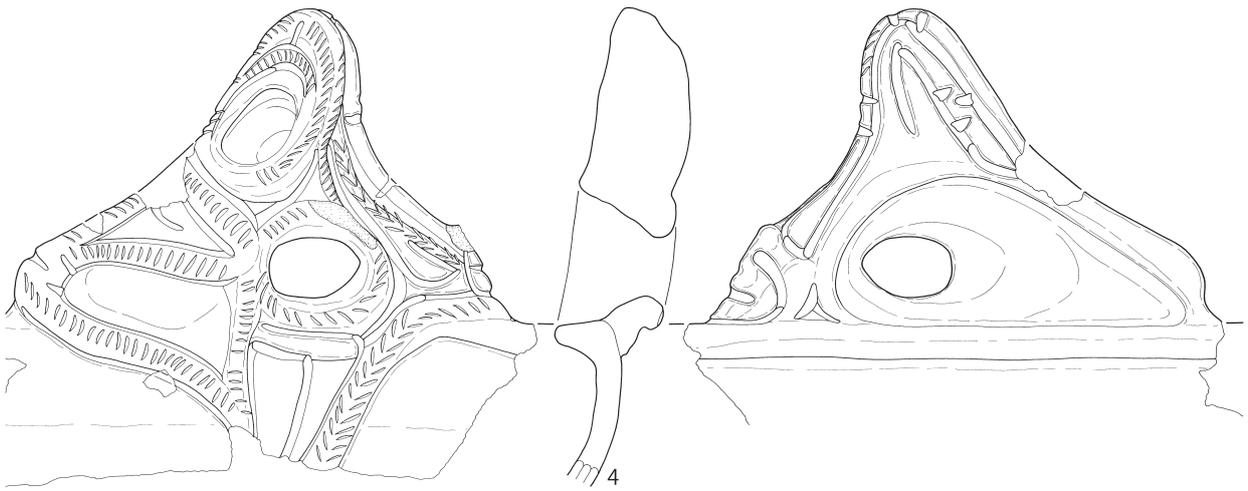
番号	器高(cm)	口径(cm)	最大径(cm)	底径(cm)	備考
299-3	[8.7]	-	-	-	10%
4	[5.6]	-	-	-	10%

第124表 第41号住居跡出土石器観察表（第301図）

番号	器種	分類	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
301 - 27	スクレイパー	II1①ア	頁岩	4.8	6.1	2.3	67.8	
28	打製石斧	II2①イ	ホルンフェルス	9.3	6.9	2.3	197.2	
29	打製石斧	II2②イ	ホルンフェルス	[6.8]	3.6	1.1	34.9	
30	打製石斧	II2②ア	砂岩	[8.6]	4.8	2.5	145.6	
31	打製石斧	III2②イ	頁岩	[11.4]	5.7	1.7	100.5	
32	打製石斧	III1②イ	頁岩	[7.0]	[5.6]	2.1	87.2	
33	打製石斧	V②ア	ホルンフェルス	[7.8]	[5.1]	2.8	120.5	
34	打製石斧	III2②ア	ホルンフェルス	[8.6]	7.0	2.3	161.1	



第302図 第42号住居跡出土遺物（1）



0 10cm
1:4

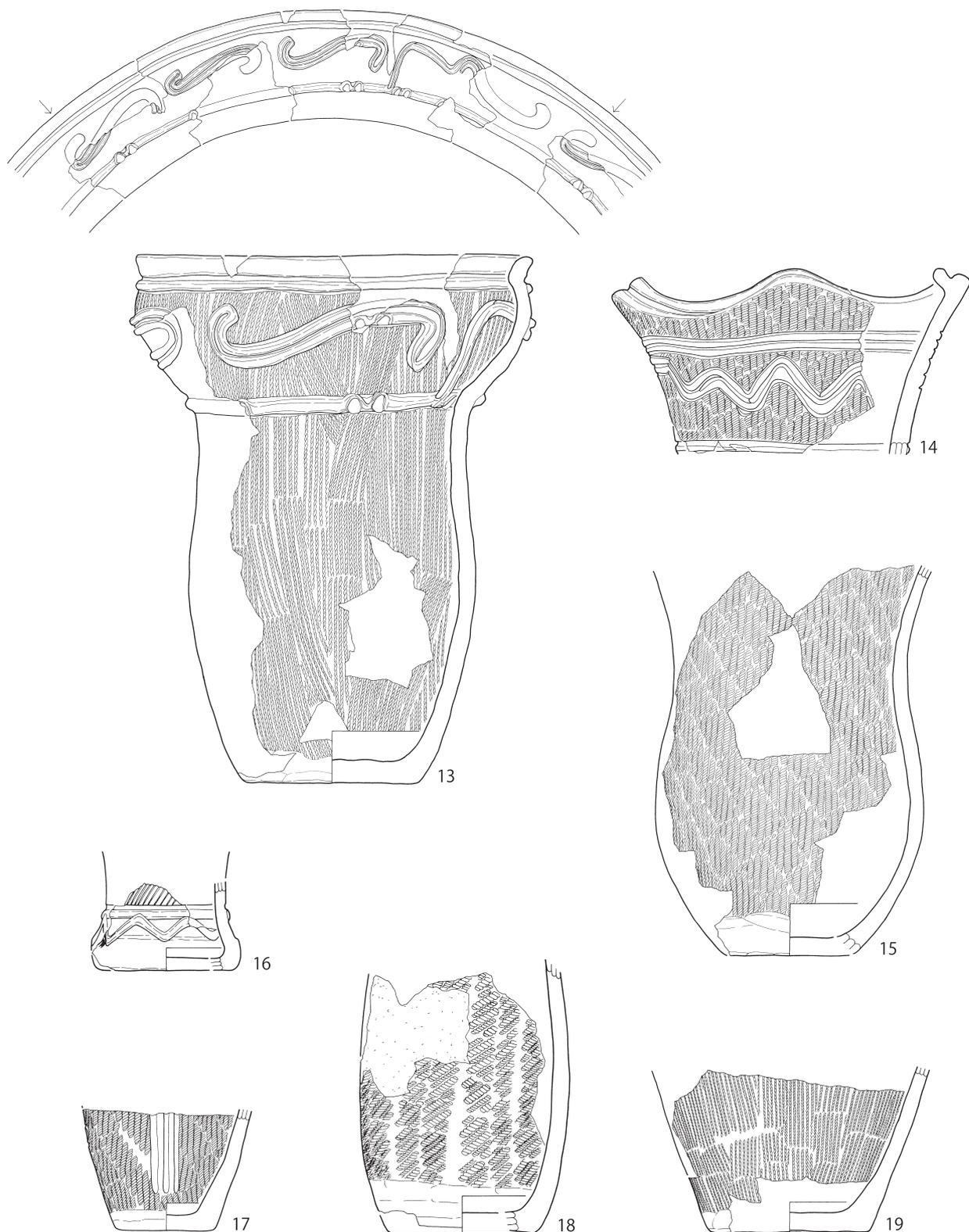
第303图 第42号住居跡出土遺物(2)



第304図 第42号住居跡出土遺物（3）



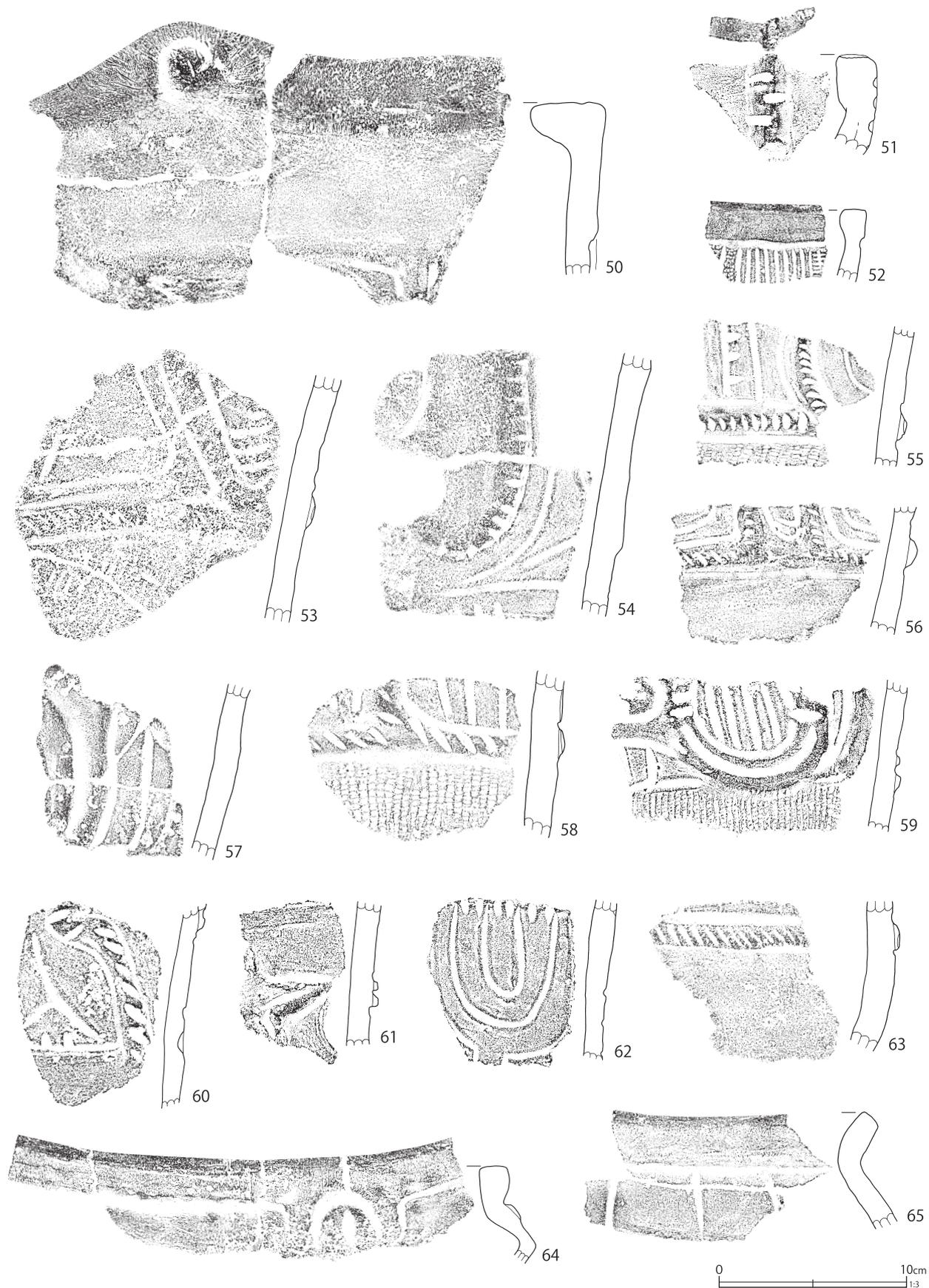
第305图 第42号住居跡出土遺物（4）



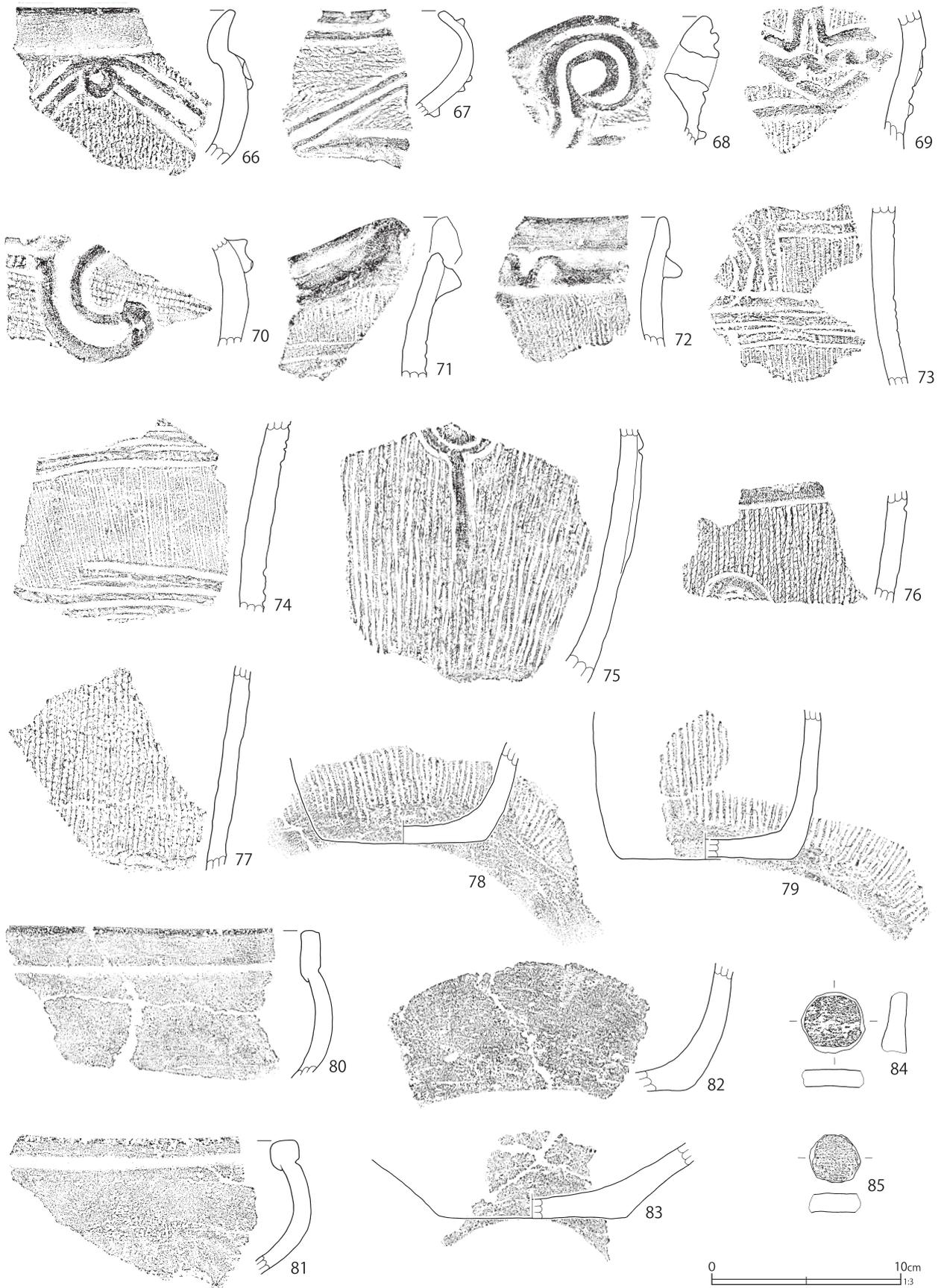
第306図 第42号住居跡出土遺物（5）



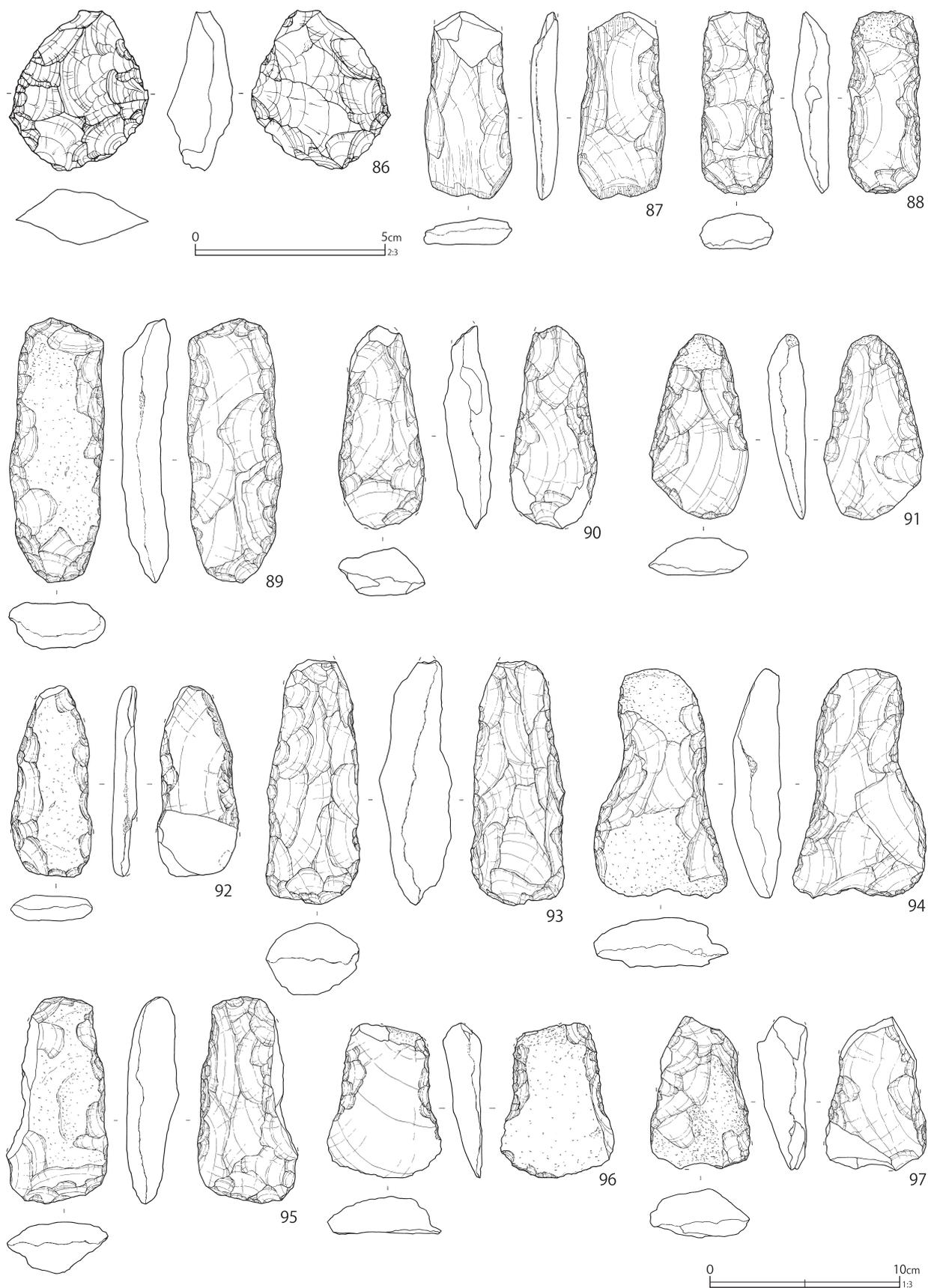
第307图 第42号住居跡出土遺物(6)



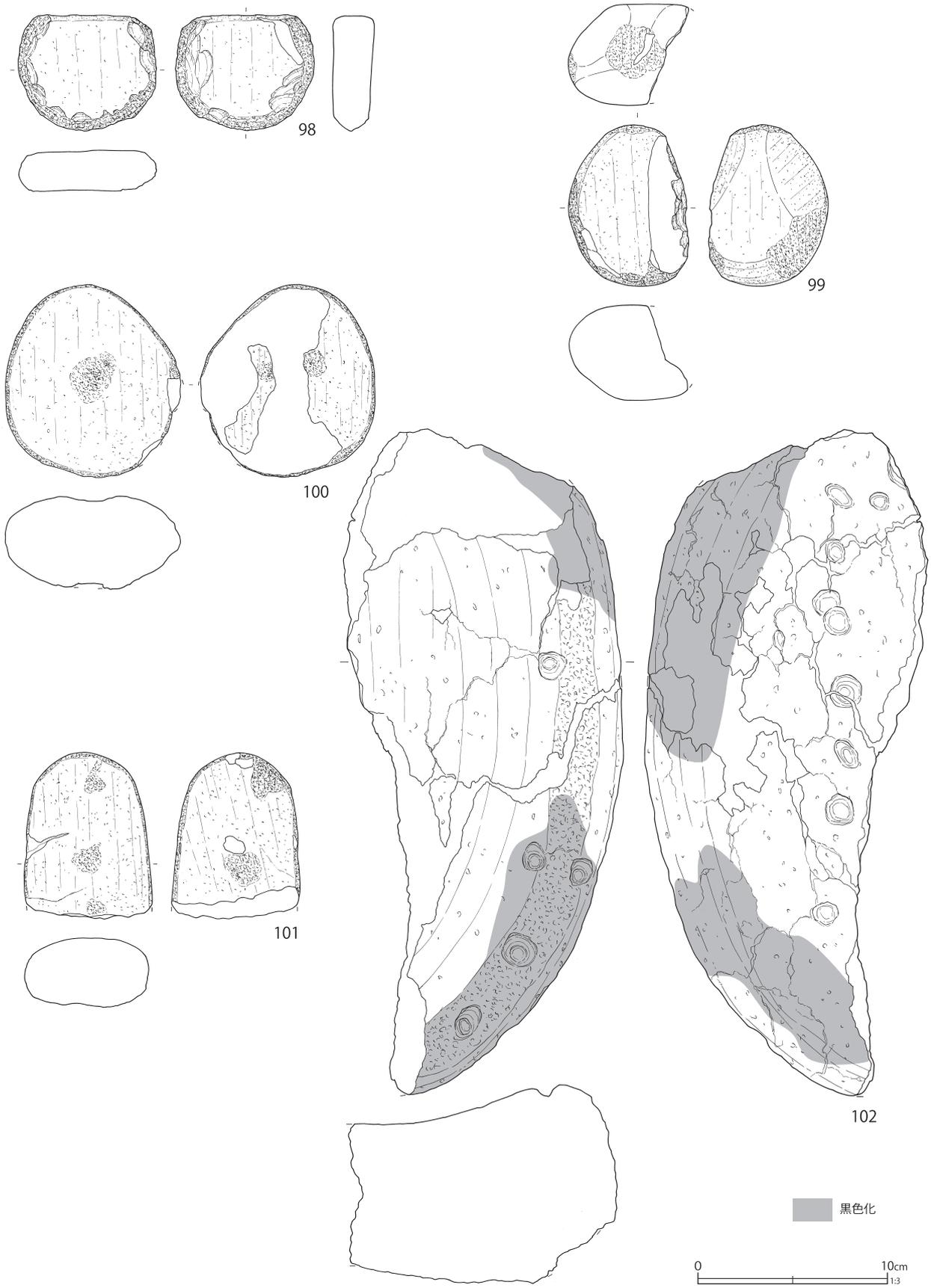
第308図 第42号住居跡出土遺物（7）



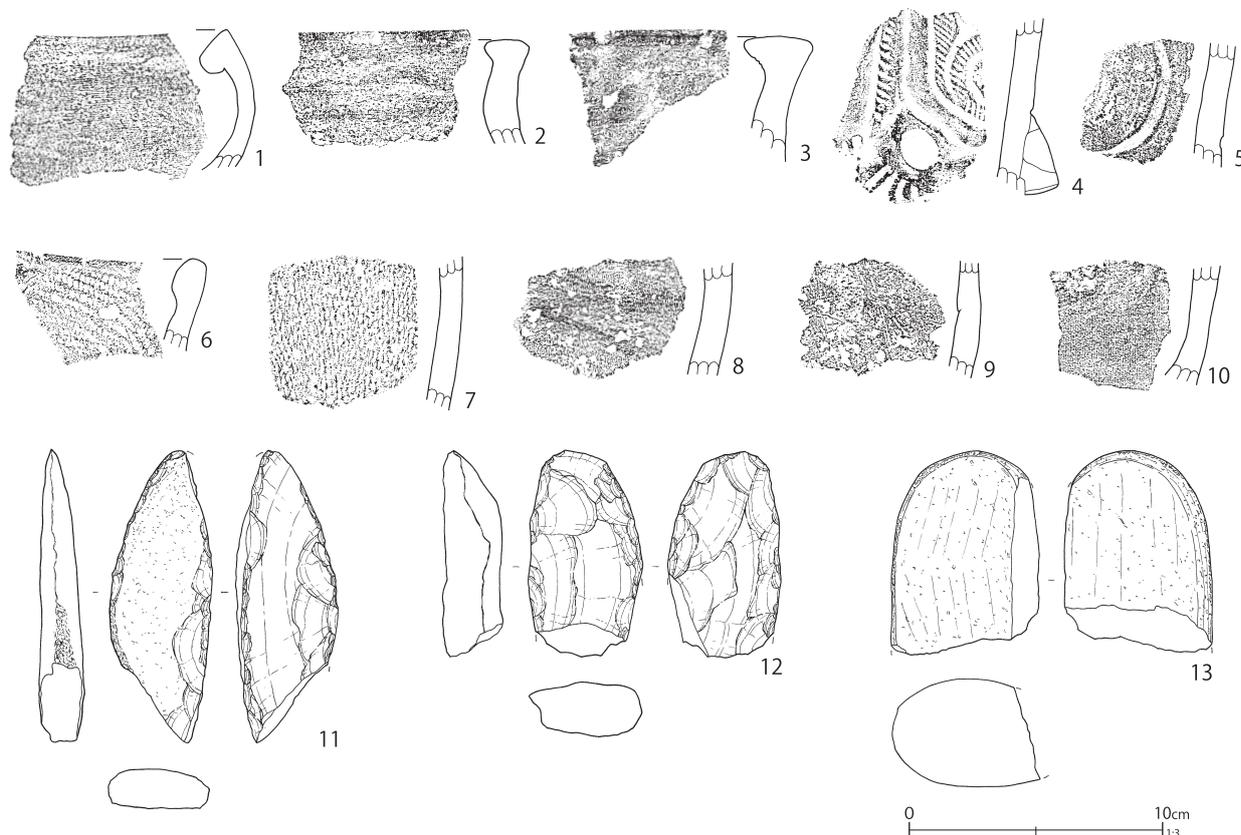
第309图 第42号住居跡出土遺物(8)



第310図 第42号住居跡出土遺物（9）



第311图 第42号住居跡出土遺物 (10)



第312図 第50号住居跡出土遺物

下する蛇体文を施文している。

5は頸部と胴部で2段に括れ、無文の口縁部が開く器形で、口唇部に耳状把手とそれに続く環状把手を配し、把手下の頸部に眼鏡状把手を付け、隆帯で連結している。反対側にも眼鏡状把手を付け、口唇上に把手の剥落した痕跡がある。胴部には撚糸文Lを施文する。

6～11は円筒形土器である。6は沈線のみでモチーフを描くものである。胴部を2本沈線で区画し、上半部の文様帯内を縦位沈線で、幅広と幅狭区画を合わせて5単位に分割しているようである。区画内は上側の口縁部に当たる部分に横位の渦巻文、下位には対応する「U」字文、逆「U」字文、渦巻文等を施文する。縦位の区画文にもそれぞれ変化を付けている。胴部の地文は0段多条RLの縦走縄文である。

7は大形の円筒土器で、口縁部から垂下する隆帯でモチーフを描き、中段と下位で横位連結する

構成をとる。交互刺突文、「ハ」字状刻みを施した隆帯で蛇状のモチーフを描き、口を開けた表現も見られる。また、連結文としての「十」字状文は幅広の低平な隆帯で描いている。胴部には0段多条RLの縦走縄文である。

8はやや幅広の口縁部無文帯を沈線で区画し、胴部を「ハ」字状刻みを施した隆帯で区画している。文様帯内は交互刺突を施した隆帯で、円形文化した渦巻文を鋸歯状隆帯の波底部に組み込むモチーフを展開している。モチーフの余白には、沈線の渦巻文や弧線文、三叉文等を施文する。胴部の地文は0段多条RLの縦位施文である。

9は無文の口縁部に、胴部を縦位区画する蛇体隆帯の頭部が上向きに配されている。また、口縁部の区画隆帯から渦巻文やクランク状モチーフが垂下して横位連結するモチーフ構成をとる。モチーフの余白には、上下交互の差し切り沈線文を施文しており、隆帯には交互刺突を施している。

第125表 第42号住居跡出土復元土器観察表（第302～306図）

番号	器高(cm)	口径(cm)	最大径(cm)	底径(cm)	備考
302-1	[26.3]	(30.2)	-	-	50%
2	[20.6]	-	(29.6)	-	20%
3	[48.3]	-	(29.2)	14.4	40%
303-4	[25.4]	(43.4)	(45.0)	-	20%
5	34.4	24.4	-	8.4	完形
6	30.4	19.6	-	9.6	80%
340-7	48.8	33.9	-	13.4	60%
8	[32.8]	(24.9)	-	-	70%
305-9	35.7	21.8	-	(10.2)	60%
10	28.0	17.9	-	(6.4)	80%

番号	器高(cm)	口径(cm)	最大径(cm)	底径(cm)	備考
305-11	[21.9]	15.3	-	-	70%
12	[27.8]	19.6	-	-	90%
306-13	35.8	(26.6)	-	11.4	50%
14	[12.4]	(24.2)	-	-	30%
15	[26.6]	-	(18.0)	-	40%
16	[5.9]	-	8.8	-	10%
17	[8.2]	-	11.3	6.6	20%
18	[17.6]	-	14.0	(9.8)	40%
19	[10.9]	-	18.6	10.6	20%

第126表 第42号住居跡出土土器観察表（第310・311図）

番号	器種	分類	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
310 - 86	石鏃	Ⅲ①	黒曜石	4.2	3.7	1.7	17.8	
87	打製石斧	Ⅱ2②イ	緑色岩	9.9	4.6	1.4	78.1	
88	打製石斧	Ⅱ2①イ	ホルンフェルス	9.6	3.8	1.9	90.4	
89	打製石斧	Ⅰ①イ	ホルンフェルス	14.0	5.0	2.6	212.4	
90	打製石斧	Ⅲ2②イ	ホルンフェルス	10.7	4.5	2.5	119.1	
91	打製石斧	Ⅲ2①イ	頁岩	9.8	5.2	2.0	96.6	
92	打製石斧	Ⅰ②イ	砂岩	10.1	4.3	1.4	69.1	
93	打製石斧	Ⅲ2②イ	ホルンフェルス	12.9	4.9	3.8	264.7	
94	打製石斧	Ⅲ1①ア	ホルンフェルス	12.2	7.0	2.6	227.9	
95	打製石斧	Ⅲ2②ア	ホルンフェルス	10.9	5.3	2.7	170.5	
96	打製石斧	Ⅲ2②イ	砂岩	[8.2]	6.0	2.0	98.1	
97	打製石斧	Ⅲ2②ア	ホルンフェルス	[8.1]	5.2	2.6	111.4	
311 - 98	敲石	Ⅳ1-3①イ	緑色岩	6.2	7.3	2.3	177.0	
99	磨石	Ⅰ1-3②イ	砂岩	8.6	[6.3]	5.4	370.3	
100	磨石	Ⅰ1-3②ア	安山岩	10.2	[9.2]	4.9	579.5	
101	磨石	Ⅱ1-3②ア	砂岩	[8.8]	6.7	3.8	321.6	
102	石皿	Ⅱ2②ア	安山岩	[35.4]	[14.8]	10.5	4857.8	表裏面一部黒色化

第127表 第50号住居跡出土土器観察表（第312図）

番号	器種	分類	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
312 - 11	打製石斧	Ⅰ②イ	ホルンフェルス	[11.7]	4.1	1.8	99.5	
12	打製石斧	Ⅱ2②イ	ホルンフェルス	[8.2]	4.5	[2.4]	110.5	
13	磨石	Ⅱ1②イ	砂岩	[8.0]	[5.8]	4.4	302.4	

地文は0段多条RLの縦走縄文である。

10は口縁部が若干開き、口縁部裏面に凹線状の沈線を巡らしている。口縁部の把手は剥落しているが、表裏側で隆帯を垂下して、文様帯を2分割している。隆帯は逆「J」字状を呈し、「X」字文と連結して、さらに「Y」字状隆帯と組になって1単位を構成している。2単位の各モチーフ内は良く類似した構成であるが、正面向かって右側の「X」字状文下には区画線を施文せず、地文を施文している。対称性を崩しているとするれば、この点であろうか。胴部の地文は、撚糸文Lである。

11は口縁部の無文部を幅広に設定し、胴部と段差を付けることで、口縁部を区画している。

12は緩い4単位の波状口縁が内湾気味に開き、上面形が四角形状を呈する。胴部で緩く括れる器形で、幅狭な口縁部文様帯のみで構成される深鉢である。口縁には刻み隆帯で幅狭な4単位の楕円区画を施し、区画の両端と中央部に交互刺突を施している。地文は0段多条RLの縦走縄文である。いわゆる中峠式系土器である。

13は加曾利E式キャリパー形深鉢形土器である。短い口唇部が立ち気味に開き、内湾する口縁

部が開き、頸部で括れる器形を呈する。口縁部には2本隆帯の横「S」字状文を4単位とクランク状連結文1単位の合計5単位のモチーフを施文する。横「S」字状文はそれぞれ独立しており、1箇所のみクランク状文と連結している。これも対称性を崩す効果を有するものと思われる。「S」字状文や頸部区画隆帯には交互刺突文を施文する。地文は撚糸文Lである。

14は4単位の波状口縁が開き、胴部で括れる器形と思われる。口唇部は幅広く内折し、上面に沈線を巡らす。口縁と胴部は半截竹管状工具による平行沈線で区画し、頸部に緩い波状文を施文する。地文は0段多条RLの縦走縄文である。

15は胴部で括れ、下半部が張る器形の深鉢で、地文に0段多条RLの縦走縄文を施文する。

16は底部文様帯に隆帯の鋸歯状文を施文する。

17は地文に0段多条RLの縦走縄文を施文し、3本沈線の懸垂文を垂下する。加曾利E式と思われるが、地文に0段多条の縦走縄文を施文する点が注目される。

18は太細の撚り合わせの単節RL縄文を縦位施文する。19は撚糸文Lを施文する底部である。

破片では、26、27は阿玉台Ⅱ式に比定されるもので、27は雲母を含む。

28～30は集合結節沈線、角押文、三角押文等を施文する勝坂式古段階の土器群で、31～33は中段階の土器群である。34～65は勝坂式新段階から終末段階にかけての土器群である。34～49はキャリパー形のものが多く、50～62は円筒形土器である。64、65は胴部が屈曲する浅鉢である。モチーフを施文する隆帯には交互刺突文や「ハ」字状刻みを施し、背割れ状を呈するものが多くなり、先端が巻く構成が多くなる。区画内には沈線を充填し、モチーフの余白を無文とするものが目立つ。

66～79は加曾利E式土器と思われる。65～70はキャリパー形深鉢の口縁部破片で、71、72

は口縁部が開く器形である。71は条線地文、72は撚糸文L地文である。

73～77は胴部破片で、73、74は半截竹管状工具の平行沈線で区画等を行うもので、地文に条線文を施文する。75は隆帯を垂下し、76は幅広の半截竹管状工具の内面施文の平行沈線文で区画やモチーフを描いている。78、79は撚糸文Lを施文する底部である。

80、81は胴部が内湾する浅鉢で、82は深鉢の底部、83は浅鉢の底部と思われる。

土製品として、土器片を利用した土製円盤である84、85が出土した。

石器類は第310図86～102が出土した。

86は石鏃の未成品である。器体中央の厚みを減じようと周縁部から中央に向けて剥離が施されていることから、未成品と判断した。

87～97は打製石斧である。87～89が短冊形を、90～97が撥形を呈する。刃部は87～89、91、93、95が両刃、94、96が片刃である。

98は敲石である。

99～101は磨石である。99は欠損した後、欠損面を使用面として再加工している。100は正面及び裏面の中央に集中して敲打痕が認められる。

102は石皿で、正面及び裏面に凹痕を有する。

第50号住居跡出土遺物（第312図1～13）

出土遺物は流れ込みのもので、住居跡の時期を示すようなものは出土していない。

1～3は無文の口縁部破片で、1は内湾し、2、3は内面に突出する幅広の口唇部が外反する器形である。4、5は勝坂式新段階の土器で、刻み隆帯のモチーフに沈線を沿わせている。

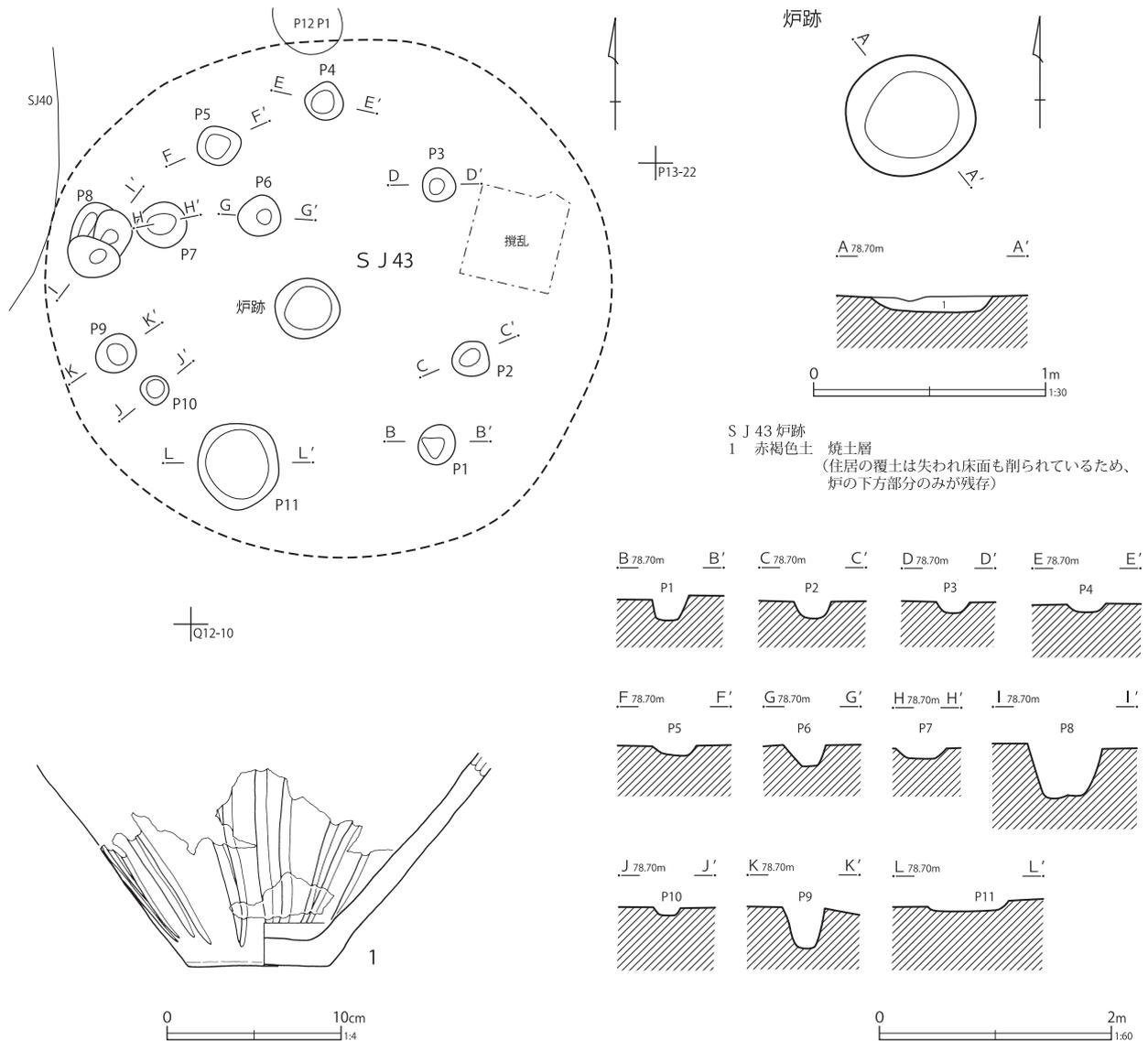
6は0段多条RLと思われる縄文を口縁部に横位施文する。7は撚糸文Lを施文する。

8～10は無文の土器片である。

石器は11～13が出土した。

11、12は打製石斧で、いずれも刃部を欠く。

13は磨石で、下半部が欠損している。



第313図 第43号住居跡・出土遺物

第128表 第43号住居跡柱穴計測表 (第313図)

ピットNo.	長径 (cm)	深さ (cm)												
P 1	35.0	20.0	P 2	33.0	15.0	P 3	29.0	11.0	P 4	32.0	8.0	P 5	38.0	8.0
P 6	37.0	18.0	P 7	43.0	18.0	P 8	64.0	46.0	P 9	37.0	36.0	P 10	24.0	7.0
P 11	75.0	7.0												

第129表 第43号住居跡出土復元土器観察表 (第313図)

番号	器高 (cm)	口径 (cm)	最大径 (cm)	底径 (cm)	備考
313-1	[11.4]	-	(26.0)	8.0	20%

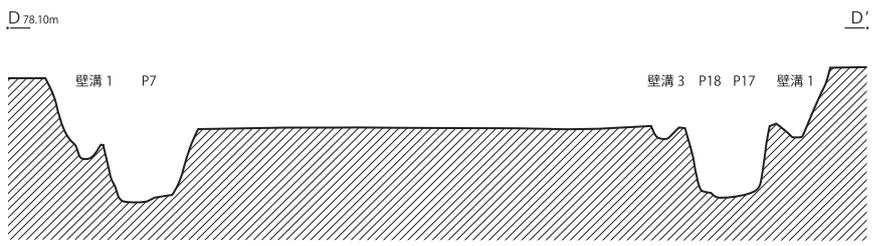
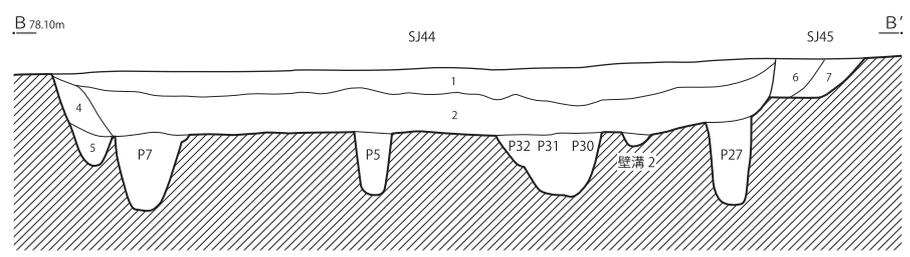
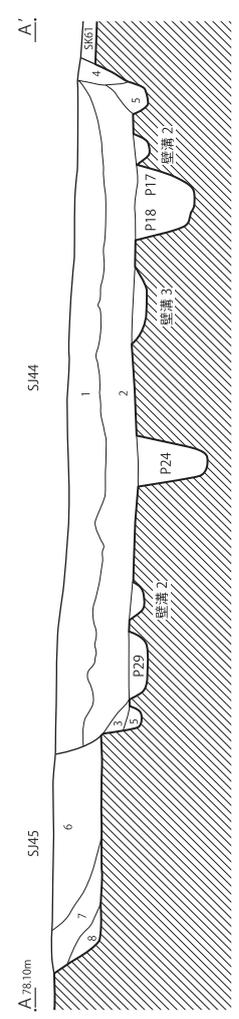
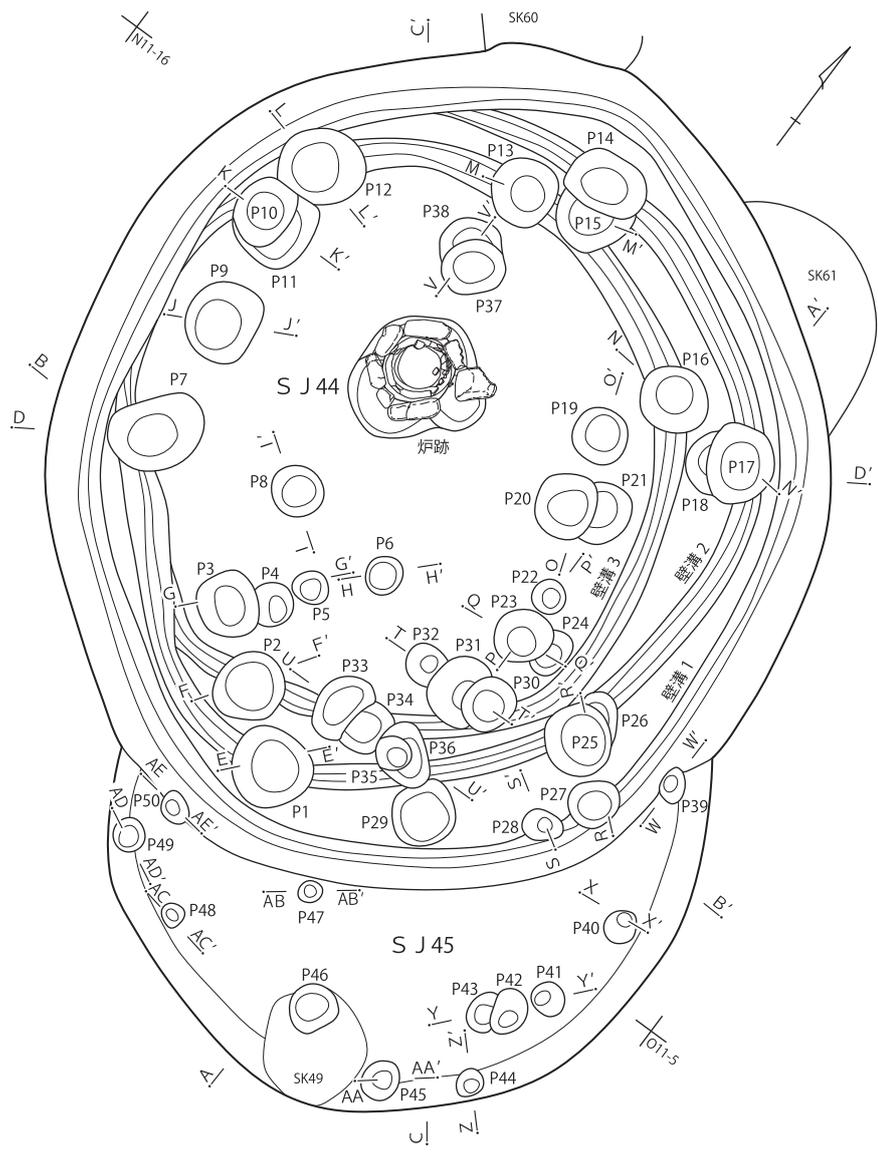
第43号住居跡 (第313図)

P・Q-12・13区に位置する。西側で第40号住居跡と一部重複するようであるが、詳細は不明である。床面まで削平されているため、住居跡の平面形は不明瞭であるが、検出された柱穴の配置

からは、径4m程の不整形円形を呈するものと思われる。

壁溝は検出されなかった。

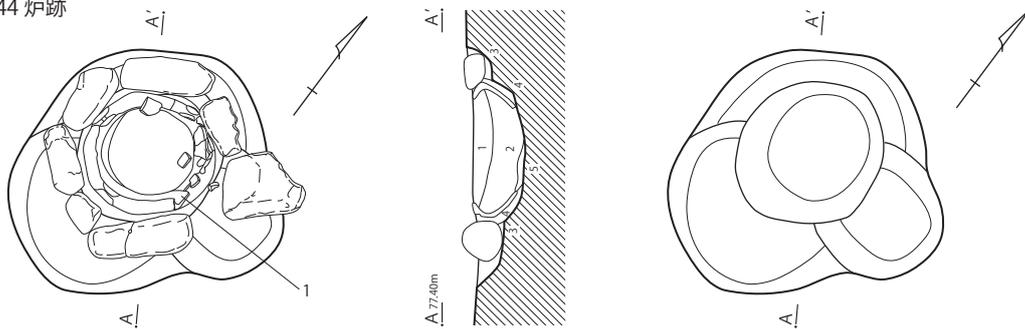
柱穴は炉跡を中心に11基検出されたが、いずれも浅く、主柱穴を特定することは難しい。



第314図 第44・45号住居跡 (1)



S J 44 炉跡

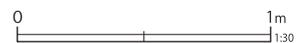


S J 44・45

- | | |
|--------|---------------------------------|
| 1 暗褐色土 | ローム粒子・炭化物少量 |
| 2 暗褐色土 | ローム粒子多量 炭化物少量 ローム小ブロック微量 |
| 3 暗褐色土 | ローム粒子多量 ソフトローム混入 |
| 4 褐色土 | ソフトローム多量 |
| 5 暗褐色土 | ローム粒子・ローム小ブロック少量 (壁溝) |
| 6 暗褐色土 | ローム粒子・炭化物少量 褐色土がブロック状に入る |
| 7 暗褐色土 | ローム粒子多量 炭化物・ソフトローム少量 |
| 8 暗褐色土 | ローム粒子・ソフトローム多量 ローム小ブロック少量 炭化物微量 |

S J 44 炉跡

- | | |
|---------|--------------------------------|
| 1 暗褐色土 | ローム粒子・焼土粒子少量 |
| 2 暗黄褐色土 | ローム粒子多量 ロームブロック少量 焼土粒子・炭化物粒子微量 |
| 3 暗褐色土 | ローム粒子多量 ローム小ブロック少量 |
| 4 暗褐色土 | ローム粒子少量 ローム小ブロック微量 |
| 5 暗黄褐色土 | ロームブロック多量 焼土ブロック微量 |



第315図 第44・45号住居跡 (2)

第130表 第44・45号住居跡柱穴計測表 (第314・315図)

ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)												
P 1	63.0	60.0	P 2	59.0	53.0	P 3	50.0	53.0	P 4	33.0	50.0	P 5	29.0	48.0
P 6	31.0	47.0	P 7	75.0	60.0	P 8	40.0	60.0	P 9	64.0	67.0	P 10	54.0	56.0
P 11	63.0	24.0	P 12	70.0	50.0	P 13	53.0	42.0	P 14	65.0	—	P 15	59.0	51.0
P 16	55.0	55.0	P 17	64.0	55.0	P 18	50.0	42.0	P 19	43.0	48.0	P 20	53.0	63.0
P 21	51.0	—	P 22	27.0	65.0	P 23	45.0	46.0	P 24	38.0	36.0	P 25	56.0	53.0
P 26	(16.0)	53.0	P 27	41.0	62.0	P 28	30.0	60.0	P 29	55.0	14.0	P 30	45.0	58.0
P 31	56.0	52.0	P 32	32.0	37.0	P 33	56.0	10.0	P 34	43.0	10.0	P 35	27.0	33.0
P 36	53.0	15.0	P 37	50.0	69.0	P 38	48.0	69.0	P 39	28.0	29.0	P 40	26.0	19.0
P 41	28.0	30.0	P 42	37.0	75.0	P 43	34.0	65.0	P 44	24.0	8.0	P 45	32.0	28.0
P 46	38.0	60.0	P 47	19.0	8.0	P 48	20.0	15.0	P 49	28.0	9.0	P 50	28.0	30.0

炉跡は地床炉で、径50cm程の不整円形の焼土範囲として検出された。炉は焼土範囲の広さと、炉床部が平坦であることから、地床炉であったと判断される。

埋甕は検出されなかった。

遺物は、P11からまとまって出土しており、第313図1として図化した。

1は加曾利EⅢ式キャリパー形深鉢形土器の底部で、無地文上に3本沈線の懸垂文を垂下している。

第44・45号住居跡 (第314図～第324図)

N・O-11区に位置する。両住居跡は南北に重複しており、第44号住居跡の方が新しい。北側の覆土内に第40号集石土壇が構築されていた。また、第49、60、61号土壇と重複するが、第44号住居跡と第60、61号土壇との新旧は不明、第45号住居跡と第49号土壇では住居跡の方が古い。

第44号住居跡

平面形は北西方向に細長い長径6.60m、短径6.10m程の楕円形を呈し、確認面から床までの掘り込みも0.53mと深い。

壁溝は3本検出された。一番外側の壁溝1は壁直下を全周し、緩やかな六角形状の台形を呈する。内側の壁溝2、壁溝3は、西壁の一部で重複しながら作られているが、壁溝3が最も古いようである。

柱穴は2軒で50基検出されたが、重複状況、深さ及び配置から主柱穴と思われるものは、およそ3種類に分けられる。

壁溝1に伴うものはP1、7、12、14、17、25の6基の6本柱と思われる。また、この6基と重複するか、隣接してP2、10、15、18、26が存在し、P7が兼ねているとするともう1軒分が組み合う。したがって、壁溝1の段階に1回建て替えが行われた可能性が高い。

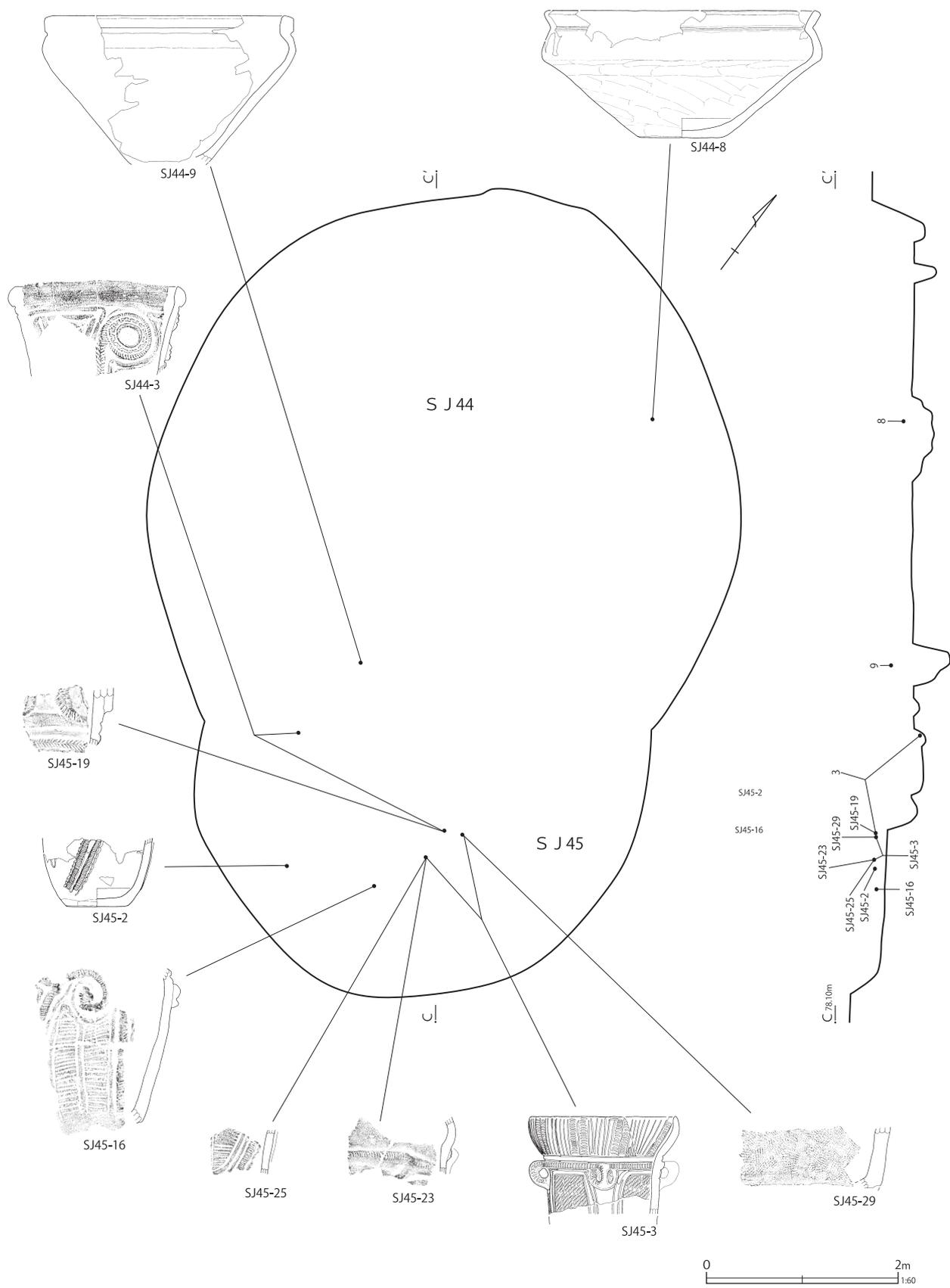
壁溝2に対応するのはP4、9、13、16、30の5基で、壁溝3を壊しているものが多い。

最も内側を巡る壁溝3に対応するのはP3、38、19、31でP9が兼ねているとすると、この5基が対応するものと思われる。

したがって、柱穴の配置から壁溝1に対応する6本主柱が2軒、壁溝2に対応する5本主柱が1軒、壁溝3に対応する5本主柱が1軒で、少なくともこの4軒分の建て替えが行われていたことが想定される。それでも、まだ組み合わせの整わないピットが多数あることから、実際には建て替えなどで4軒分以上の住居跡が重なっていたものと判断される。

主柱穴の深さは、P1=60cm、P2=53cm、P3=53cm、P7=60cm、P9=67cm、P10=56cm、P12=50cm、P13=42cm、P14=51cm、P15=51cm、P16=55cm、P17=55cm、P18=42cm、P19=48cm、P25=57cm、P26=53cm、P30=58cm、P31=52cm、P38=69cmである。

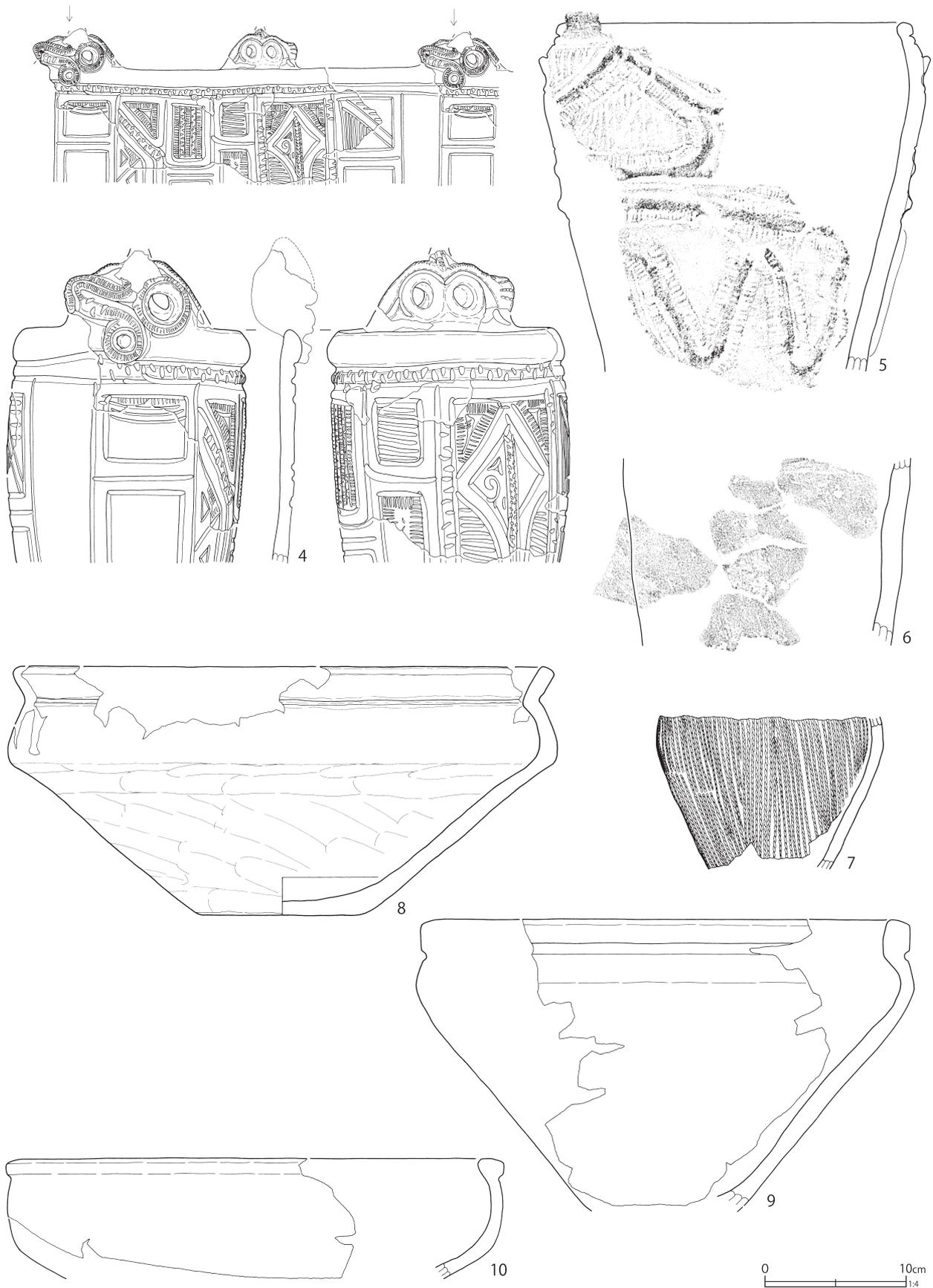
炉跡は石囲埋甕炉で中央部やや北西寄りに検出された。礫は埋設した土器に密着するように並べられており、東側の礫が少し移動していた。炉



第316图 第44・45号住居跡遺物出土状況



第317図 第44号住居跡出土遺物(1)



第318图 第44号住居跡出土遺物(2)

第131表 第44号住居跡出土復元土器観察表（第317・318図）

番号	器高(cm)	口径(cm)	最大径(cm)	底径(cm)	備考
317-1	[22.3]	48.7	(52.5)	-	20%
2	[19.1]	-	(43.2)	-	20%
3	[12.8]	(24.6)	-	-	10%
318-4	[22.2]	(15.2)	-	-	40%
5	[24.8]	(25.3)	-	-	30%

番号	器高(cm)	口径(cm)	最大径(cm)	底径(cm)	備考
318-6	[13.4]	-	20.2	-	20%
7	[10.7]	-	15.9	-	30%
8	17.7	(38.0)	-	11.2	50%
9	[20.4]	(34.4)	-	-	40%
10	[8.5]	(35.2)	-	-	20%

床面には被熱による焼土化が認められるが、その他には被熱の痕跡は顕著でない。なお、下部の掘り込みは三重に認められることから、炉は少なくとも3回作り替えられた可能性がある。

埋甕は検出されなかった。

住居跡は、最後の段階が炉体土器から勝坂式終末期の所産と判断される。

第45号住居跡

平面形は、北側半分を第44号住居跡によって壊されているため明瞭でないが、径4.62m程の不整円形を呈するようである。床面は第44号住居跡より20cm程高い。

壁溝は検出されなかった。柱穴は住居跡範囲内から11本検出されたが、いずれも浅く、壁際を巡っており、支柱穴を特定できない。

炉跡は第44号住居跡によって壊されていると思われる。

埋甕は検出されなかった。

住居跡は、住居跡の形態や出土遺物から、勝坂式中段階期の所産と推定される。

第44号住居跡出土遺物（第317図1～第322図101）

第319図11、12はP2、13はP5、14はP7、15はP11、16、17はP14、15、18はP16、19はP17、18、20、21はP20、21、22、23はP23、24、25はP25、26、26～28はP29、29、30はP37、38からの出土である。

1は炉体土器である。口縁部が大きく内湾する非常に大きなキャリパー形深鉢で、4単位の波状を呈する口唇部が肥厚して幅広となる。波頂下に垂下する隆帯で口縁部を4単度に区画し、垂下隆

帯から派生する隆帯渦巻文を連結するモチーフを描いている。大きくは渦巻文とそれを繋ぐ「十」字状文をモチーフとする構成で、余白に沈線の渦巻文や三叉文を施文し、区画内に沈線文を施文する。頸部の区画隆帯には交互刺突を施文している。

2はキャリパー形深鉢の口縁部で、幅広の低隆帯で大柄な渦巻文を横位に繋ぐモチーフを施文する。隆帯上には差し切り沈線状の刻みを施す。胴部地文には0段多条RLの縦走縄文を施文している。

3は円筒形土器で、口唇部が肥厚する。胴部には背割り隆帯に交互刺突文を施した隆帯で円形状の渦巻文を描き、「ハ」字状刻みを有する隆帯を伴って垂下するモチーフを描いている。また、渦巻文の隣には背割れ状の幅広低隆帯で玉抱き三叉文状のモチーフを描く。

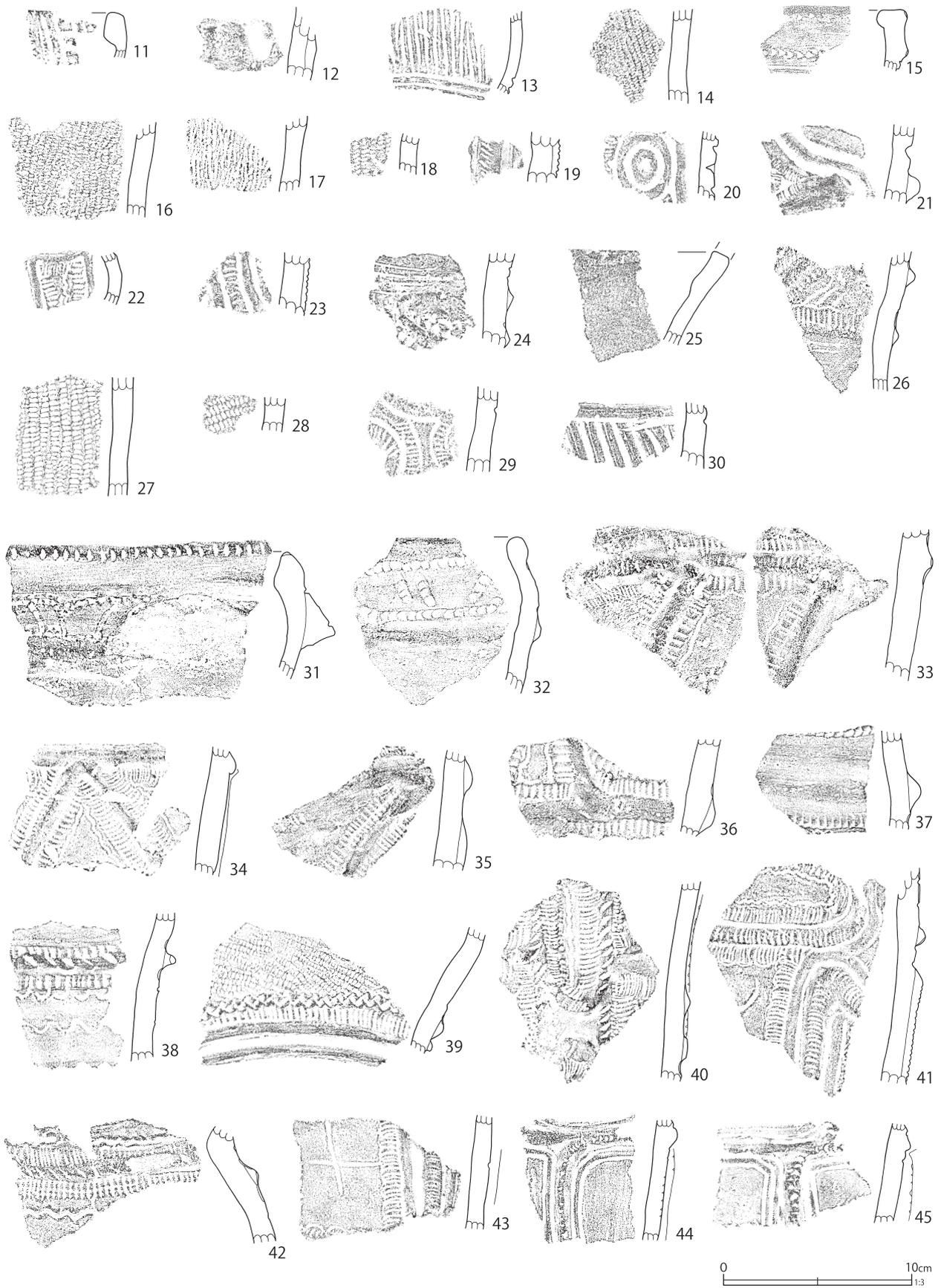
4は円筒形土器で、口縁部に眼鏡状把手を付け、蛇体状のモチーフを垂下する。胴部はパネル状区画文を施し、集合沈線や爪形文を伴う三叉文、渦巻文などを充填施文する。

5は内湾する口縁部が開く器形で、口縁部に半円状区画と楕円区画を組み合わせたモチーフを構成するものと思われ、胴部には大振りの鋸歯状文を描いている。モチーフは爪形文を伴う隆帯で施文するもので、口縁部の区画内には集合沈線文を施文する。4とともに、勝坂式中段階の藤内式の新しい段階に位置付けられよう。

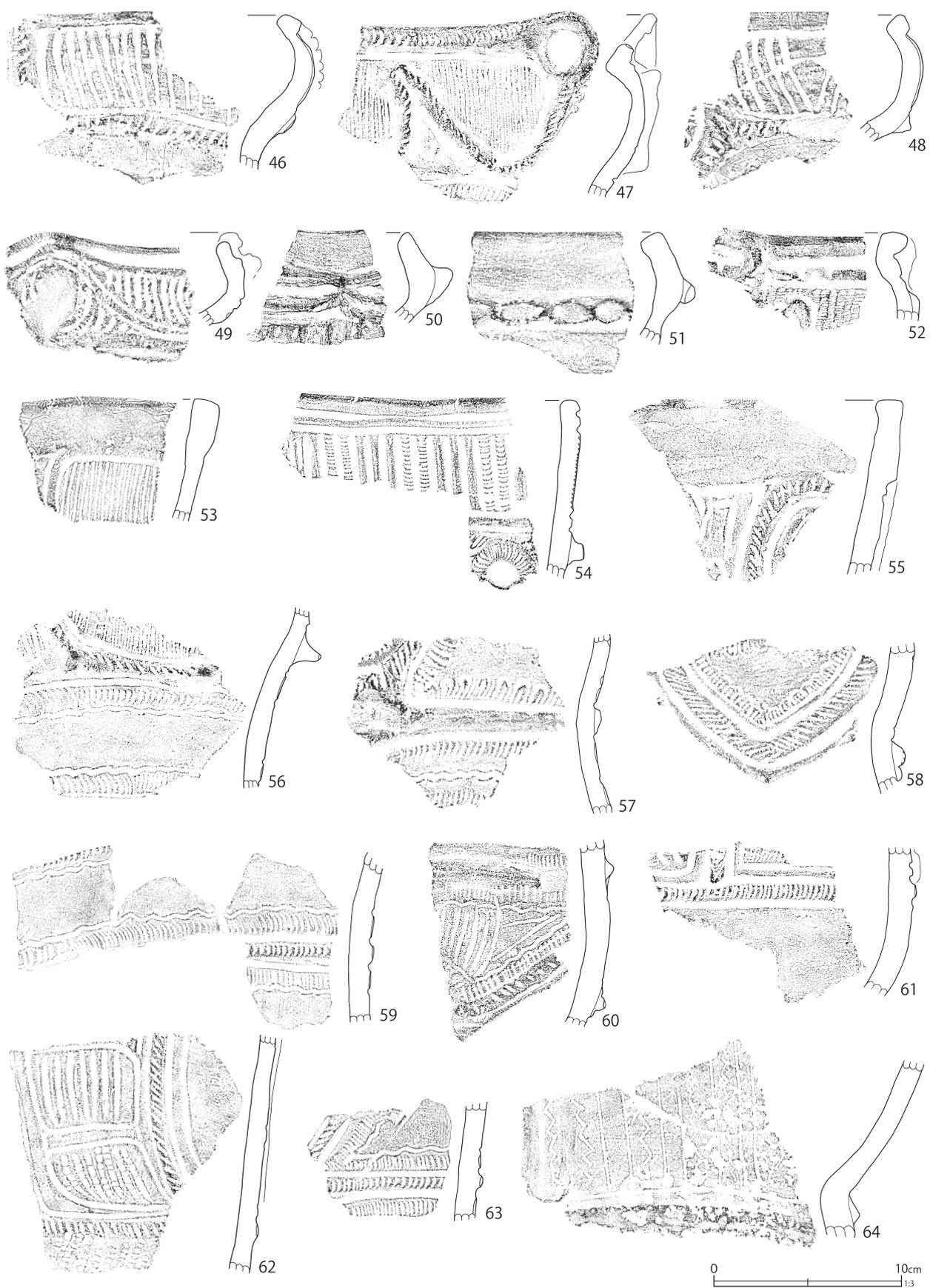
6は無文の深鉢の胴部、7は撚糸文Rを施文する胴部である。

8～10は無文の浅鉢で、8、9は胴部が「く」字状に屈曲する。9は鉢状の浅鉢である。

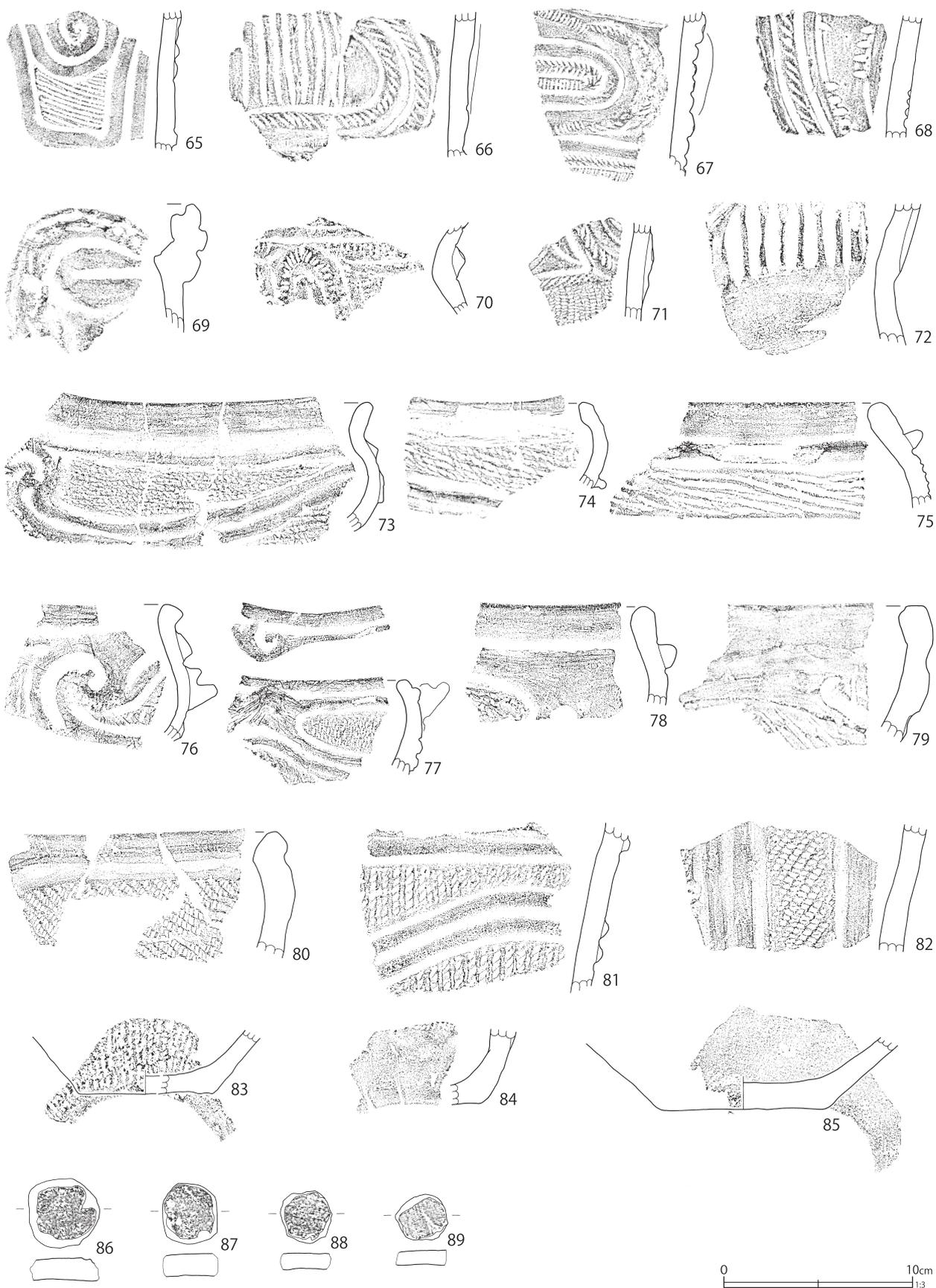
破片では、31、32は角押文や三角押文を施文



第319图 第44号住居跡出土遺物（3）



第320図 第44号住居跡出土遺物（4）



第321图 第44号住居跡出土遺物 (5)



第322図 第44号住居跡出土遺物(6)

第132表 第44号住居跡出土石器観察表 (第322図)

番号	器種	分類	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
322 - 90	石鏃	I 2②	黒曜石	2.2	[1.9]	0.4	1.0	
91	スクレイパー	IV②ア	ホルンフェルス	[8.2]	10.1	2.2	190.3	
92	スクレイパー	II 1②イ	ホルンフェルス	4.3	6.2	1.4	44.6	
93	磨製石斧	III①イ	頁岩	8.3	2.7	0.7	18.6	
94	磨製石斧	III1-3①ア	砂岩	8.8	5.0	4.3	310.7	敲石として再利用
95	打製石斧	III2②イ	頁岩	11.3	4.5	2.5	141.4	
96	打製石斧	III2②イ	頁岩	8.4	4.4	1.6	61.0	
97	打製石斧	III2①イ	頁岩	10.6	5.7	2.4	136.4	
98	打製石斧	III2①イ	砂岩	11.7	4.9	2.6	185.5	
99	打製石斧	III2②イ	ホルンフェルス	7.4	4.6	1.1	46.9	
100	スクレイパー	I 1①イ	ホルンフェルス	[6.9]	5.1	1.4	44.8	
101	打製石斧	I 1①イ	ホルンフェルス	7.5	5.4	1.2	35.8	敲石として再利用

する勝坂式古段階の土器群である。31は雲母を含む。

33～42は隆帯脇にキャタピラ文や幅広の連続爪形文を施文するもので、爪形文には小波状沈線文を沿わせている。勝坂式中段階の藤内式に比定されよう。43～45は半截竹管状工具の平行沈線や、重複施文の3本平行沈線文と隆帯で区画文を施すもので、やはり勝坂式中段階の藤内式並行の土器群である。

54、56～61、63は隆帯脇に小波状沈線を伴う爪形文を施文するが、隆帯脇に明瞭な沈線を施文しており、勝坂式中段階から新段階にかけての土器群であると思われる。

46～48、50～55、62、64～72は勝坂式新段階から終末段階にかけての土器群であり、刻み隆帯で区画文を施文して、沈線を施文するものである。69は左向きの蛇頭をモチーフ化した把手を有するもので、終末段階のものと思われる。他はおおよそ勝坂式新段階のものが多いと思われる。

73～82は加曾利E式土器で、73～75は加曾利E I式、76～77は加曾利E II式、78～80は加曾利E III式の口縁部破片であろう。81は加曾利E I式の胴部破片、82は磨消懸垂文を有する加曾利E III式である。

83は撚糸文Lを施文する底部、84は爪形文を施文する勝坂式の底部である。85は浅鉢の底部であろう。

土製品は、86～89の土器片を使用した土製円盤が4点出土した。

石器は90～101が出土した。

90は石鏃で、両側縁が鋸歯状である。正面左脚部が欠損している。

91は粗粒石材を用いた大形粗製石匙である。

92～94は粗粒の石材を素材に利用したスクレイパーである。

95は小型の局部磨製石斧である。

96～100は撥形を呈する打製石斧である。

101は磨製石斧が欠損した後、敲石に再利用されている。

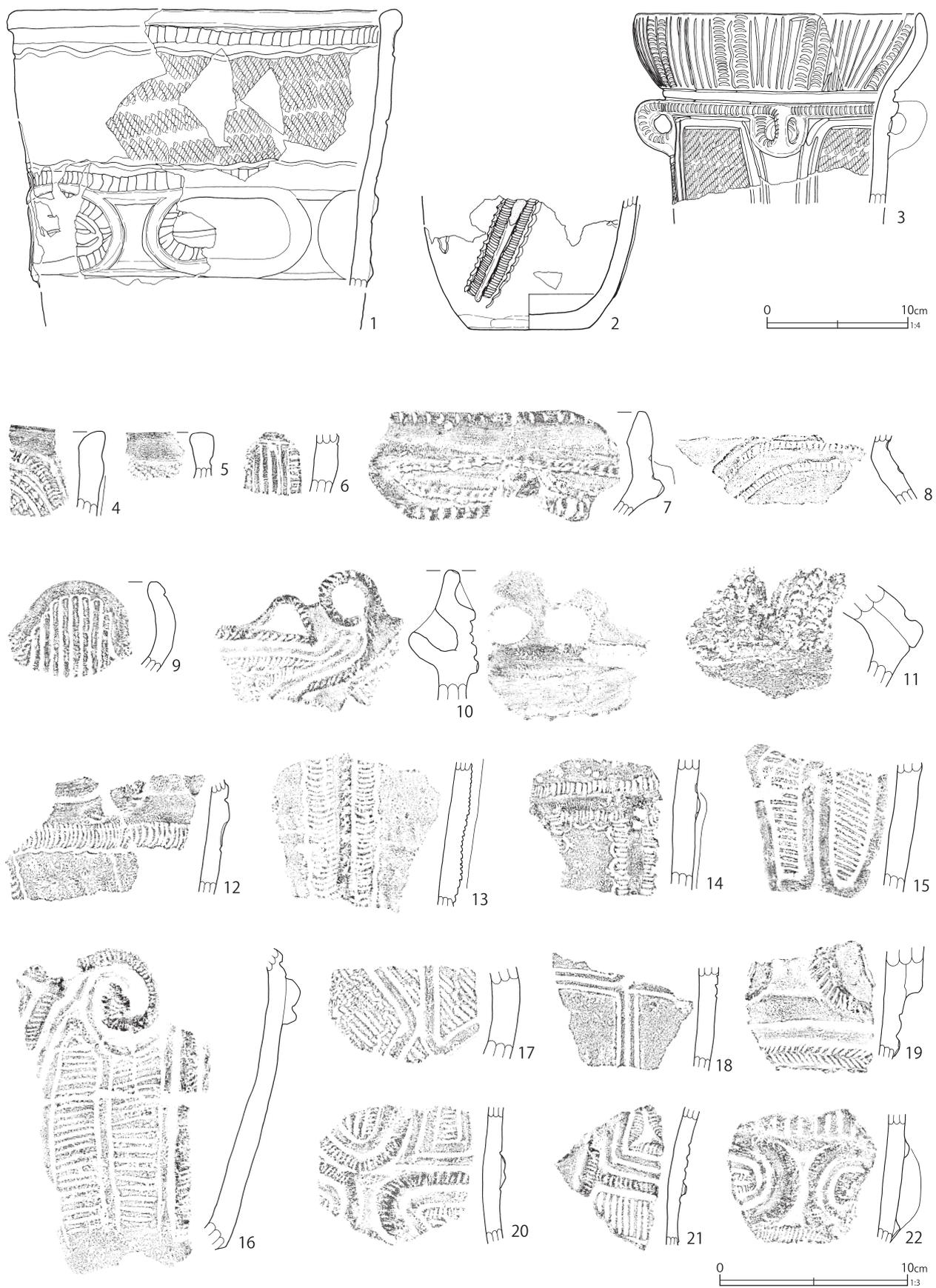
第45号住居跡出土遺物 (第323図1～324図33)

4はP32、5、6はP35から出土している。

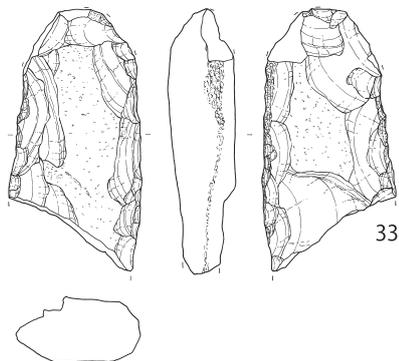
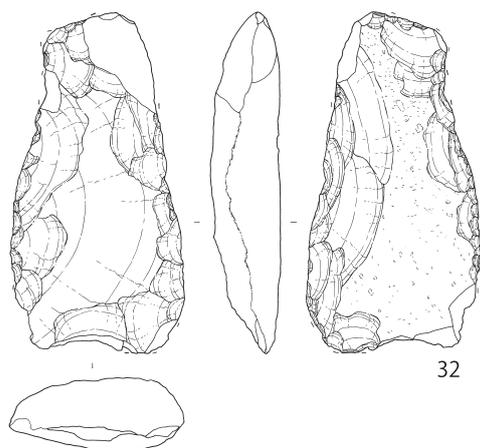
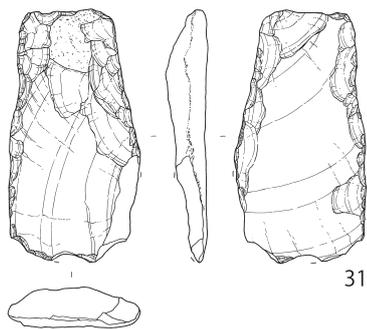
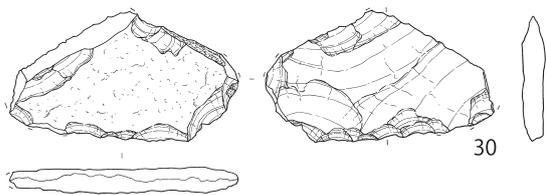
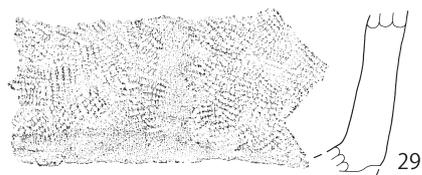
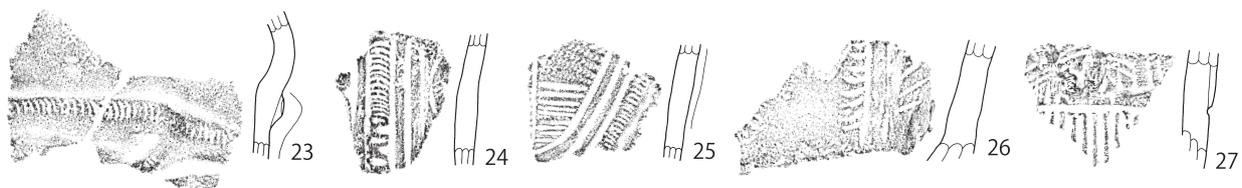
1は円筒形土器で、肥厚する口縁部下に幅広の押引文を巡らし、波状沈線を沿えて口縁部を区画している。胴部を同種の押引文で区画し、隆帯の楕円区画文を施すが、同種の押引文を区画内に沿わせ、横位の沈線文を施文している。胴上半部の地文には単節RL縄文を横位施文する。

2は隆帯脇にキャタピラ文状の連続爪形文を施文する隆帯を斜位に施文し、連続の小波状沈線文を施文する。

3は内湾する口縁部が開き、頸部で括れ、円筒形の胴部へと移行する器形を呈する。蛇行沈線を挟む2列の爪形文列を垂下して口縁部を等間隔に縦位区画し、区画の間に縦位の並行沈線を施文し



第323図 第45号住居跡出土遺物(1)



第324图 第45号住居跡出土遺物(2)

第133表 第45号住居跡出土復元土器観察表（第323図）

番号	器高(cm)	口径(cm)	最大径(cm)	底径(cm)	備考
323-1	[19.8]	(26.9)	-	-	40%
2	[9.5]	-	15.2	8.4	20%

第134表 第45号住居跡出土石器観察表（第324図）

番号	器種	分類	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
324 - 30	打製石斧	II1㊸イ	頁岩	9.0	5.1	1.0	52.6	
31	打製石斧	III2㊸イ	砂岩	10.0	5.2	1.7	91.7	
32	打製石斧	III2㊸イ	砂岩	[13.5]	6.9	2.8	271.3	
33	打製石斧	V㊸ア	砂岩	[10.4]	5.3	2.7	172.7	

ている。頸部には眼鏡状把手を4単位に配するものと思われ、この把手を起点にして胴部に3本沈線の箱状区画を施し、区画内に単節LR縄文を横位施文する。いずれも勝坂式中段階の藤内式段階に比定されよう。

7～11は口縁部周辺の破片で、7は短く内折する口縁部に横長の楕円区画文を配し、幅広の押し刺突文を施文する。8は頸部に2列の角押文状の押し刺突文を施文する。9は山形の丸い波状口縁を呈し、波状部に蓮華文の足の長い平行沈線を施文している。10は非対称の把手を口縁部に付け、環状把手から蛇体状の隆帯文を垂下する。隆帯脇は半截竹管状工具の平行沈線を施文し、爪形文を沿わせている。11も内屈する口縁部に爪形文の沿う隆帯でモチーフを構成している。

12～23は胴部破片である。12、13は隆帯脇に爪形文と蛇行沈線文を沿わせており、13の隆帯上には細かな刻みを施している。12の区画隆帯は低隆帯で、刻みがない。14は隆帯の脇に蓮華文を沿わせるもので、隆帯上に刻みはない。15～17は半截竹管状工具による平行沈線でパネル状区画文を施文するもので、16は刻み隆帯の渦巻文の余白にパネル状区画文を配している。18は半截竹管状工具の重ね施文による3本沈線で区画文を施している。

以上は勝坂式中段階でもやや新しい傾向を有するが、藤内式の新しい段階に並行するものであろう。

19～27は勝坂式新段階の土器群で、刻み隆帯

でモチーフを描き、集合沈線を充填施文するのを特徴とする。19は隆帯上に「ハ」字状刻みを施しており、24の並行沈線間には交互刺突文を施している。20、25は若干古くなる可能性がある。

28は無地文の上に、隆帯文だけでモチーフを描いている。29は底部破片であるが、細かな単節LRを異方向ランダムに施文している。

石器では30～33が出土した。

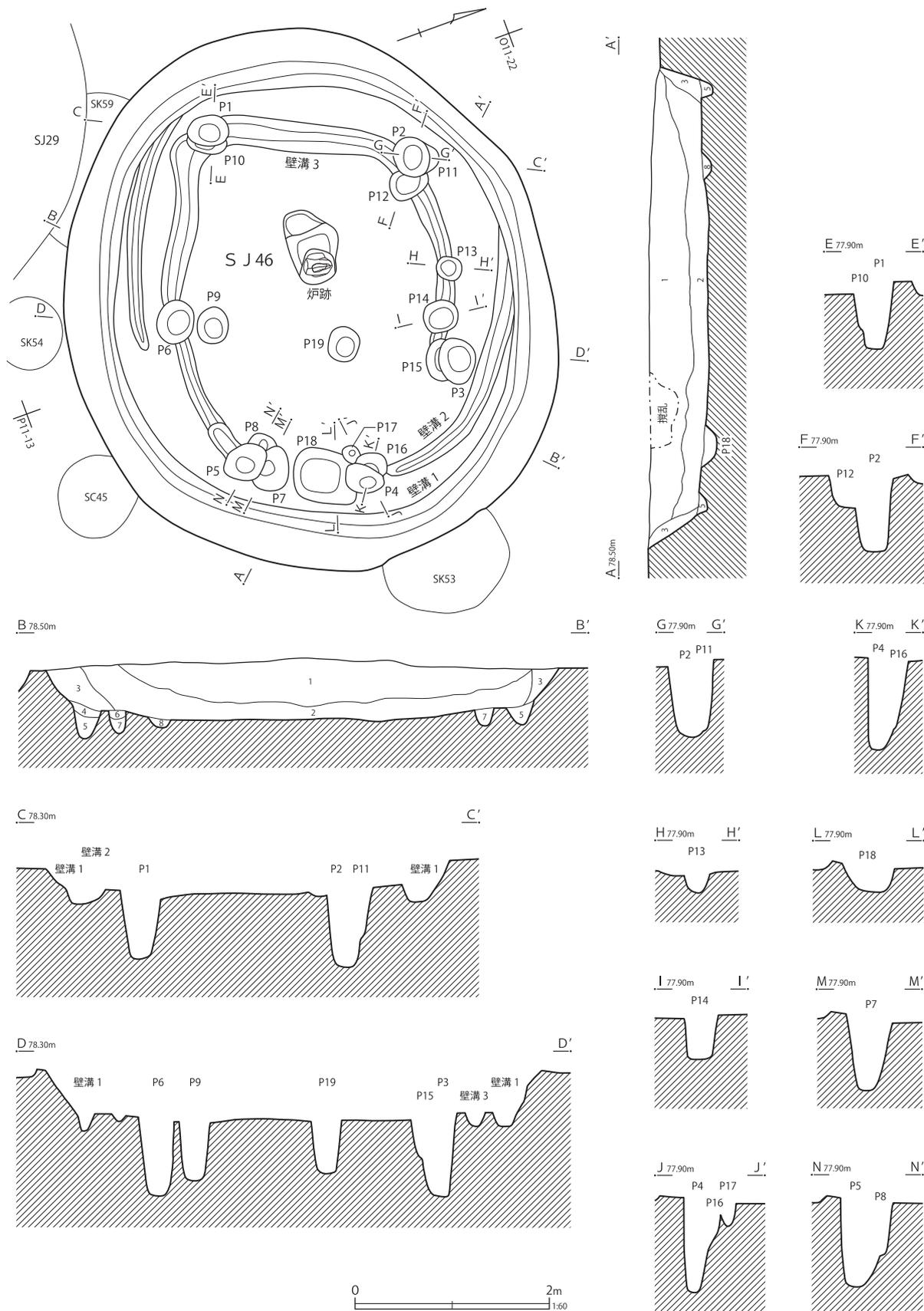
30～33はいずれも打製石斧である。31は短冊形を呈し、刃部が片刃である。32が撥形を呈し、刃部は両刃であると思われる。33は短冊形を呈する打製石斧の基部片である。

第46号住居跡（第325図～第341図）

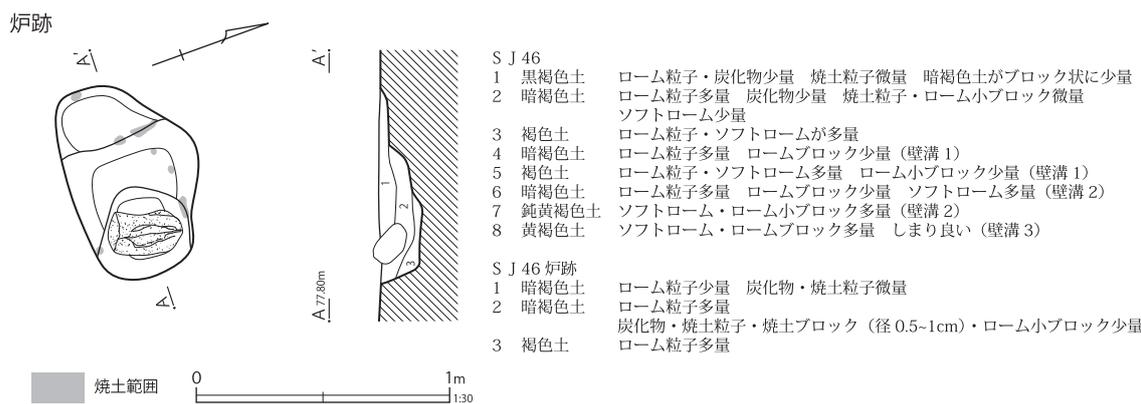
O・P-11区に位置する。第45号集石土壇、第53号土壇、第59号土壇と重複するが、第45号集石土壇、第53号土壇は本住居跡より新しい。第59号土壇との関係は不明である。平面形は長径5.57m、短径4.95m程の、東西方向にやや長い不整楕円形を呈する。確認面から床面までの掘り込みは約0.60mでやや深く、壁は比較的緩やかに立ち上がる。

壁溝は三重に検出された。壁に沿って全周する一番外側の壁溝1が本住居跡の最終段階のもので、一番内側の壁溝3が最も古いものと思われる。

柱穴は19基検出されたが、重複状況、深さ及び配置から主柱穴と思われるものは2種類に分けられる。壁溝1に伴うと思われるものはP5、6、1、2、3、4である。その一回り内側に配置さ



第325图 第46号住居迹 (1)



第326図 第46号住居跡（2）

第135表 第46号住居跡柱穴計測表（第325図）

ピットNo.	長径 (cm)	深さ (cm)												
P 1	40.0	69.0	P 2	46.0	76.0	P 3	44.0	85.0	P 4	45.0	98.0	P 5	40.0	91.0
P 6	45.0	82.0	P 7	47.0	78.0	P 8	27.0	54.0	P 9	38.0	56.0	P 10	40.0	46.0
P 11	46.0	73.0	P 12	42.0	32.0	P 13	25.0	20.0	P 14	35.0	45.0	P 15	42.0	40.0
P 16	45.0	71.0	P 17	(18.0)	23.0	P 18	(54.0)	31.0	P 19	37.0	54.0			

第136表 第46号住居跡出土復元土器観察表（第329～335図）

番号	器高 (cm)	口径 (cm)	最大径 (cm)	底径 (cm)	備考	番号	器高 (cm)	口径 (cm)	最大径 (cm)	底径 (cm)	備考
329-1	27.9	(17.5)	-	9.6	60%	332-24	[17.9]	-	20.4	9.8	30%
2	[10.2]	-	-	-	10%	25	[13.6]	-	(21.4)	-	30%
3	[27.8]	-	(23.4)	8.7	70%	26	[5.4]	(17.6)	-	11.7	10%
4	[12.5]	-	-	-	10%	27	[13.0]	(12.7)	-	-	30%
5	[13.8]	-	-	-	10%	28	[21.9]	18.2	19.2	-	60%
6	[25.4]	-	-	-	20%	29	[9.8]	(16.1)	-	-	20%
330-7	[22.4]	-	(26.6)	-	50%	30	[12.8]	10.9	-	-	80%
8	[20.2]	-	(27.4)	-	20%	333-31	[18.3]	(19.6)	-	-	20%
9	[7.5]	-	23.4	-	10%	32	[7.2]	(22.5)	-	-	20%
10	[24.5]	(15.9)	-	-	60%	33	[9.8]	(12.0)	-	-	20%
11	31.3	(24.0)	-	10.8	70%	34	26.2	14.0	-	7.4	完形
12	[10.6]	16.8	-	-	20%	35	[20.5]	13.9	-	-	60%
13	[14.7]	-	(16.9)	(10.2)	20%	36	28.0	17.4	-	7.8	完形
331-14	30.0	(19.2)	-	8.5	60%	37	17.2	(12.4)	-	5.7	70%
15	[11.4]	(24.8)	-	-	30%	38	[15.1]	(14.4)	-	-	20%
16	[15.9]	(17.1)	-	-	50%	39	21.3	13.3	-	8.4	80%
17	[15.3]	(17.8)	-	-	20%	334-40	21.5	(12.8)	-	9.2	80%
18	[12.8]	(17.2)	-	-	40%	41	[6.6]	(12.7)	-	-	20%
19	[22.8]	15.6	-	-	50%	42	[8.6]	(13.2)	-	9.4	20%
20	[12.5]	(12.8)	-	-	30%	43	28.0	16.8	-	9.1	80%
332-21	[38.5]	(31.0)	-	-	50%	44	20.1	(42.2)	51.2	-	40%
22	[6.4]	(24.0)	-	-	20%	335-45	[16.9]	(44.2)	46.7	-	40%
23	[24.9]	-	(20.0)	-	30%	46	[15.9]	(17.1)	-	-	30%

れるP 8、9、10、11、14、16は壁溝3を壊して造られていることから壁溝2に対応すると思われる。いずれも6本主柱である。ただし、壁溝3に対応する柱穴は明らかにし得なかった。

主柱穴の深さは、P 1 = 69cm、P 2 = 76cm、

P 3 = 85cm、P 4 = 98cm、P 5 = 91cm、P 6 = 82cm、P 8 = 54cm、P 9 = 56cm、P 10 = (46)cm、P 11 = (73)cm、P 14 = 45cm、P 16 = (71)cmである。

炉跡は住居跡中央北西寄りに検出された。深さ15cm程の掘り込みを有する地床炉と思われる

が、東側から30cm×15cm程の大形の礫が出土している。礫の下の炉床が窪むことから、埋設土器が抜き去られた可能性もある。また、炉の形状から、3回の作り替えが想定される。

埋甕は検出されなかった。

炉の形状や壁溝から2回の建て替えて、合計3軒の住居跡が重なっているものと判断される。

住居跡は出土土器から、勝坂式新段階期の所産であると思われる。

遺物は第329図1～第341図136の土器類、石器類が出土した。

土器は1～108である。1は4単位の山形把手を有する波状口縁で、口縁部文様帯を有するキャリパー形深鉢である。把手は1個が大きな山形状で、3個が扇状の山形を呈するものと思われ、大きな山形把手下の口縁部に刻み隆帯の渦巻文を施文する。扇状の把手下には爪形文列を1本もしくは2本垂下して区画し、縦位の集合沈線文を充填施文する。頸部は幅狭な無文帯とし、胴部に刻み隆帯の鋸歯状文を区画する。区画内は縦横の並行沈線や、刻みを施した並行沈線、爪形文を伴う三叉文等を、同じ構成にならないように施文している。

2は把手部の口縁部破片であるが、三日月状の把手下部に眼鏡状把手を付け、押引文で口縁部の区画文を施文している。口縁部文様帯を有するものであろう。4～6は口縁部の把手部であるが、口縁部文様帯を無文にするものと思われる。いずれも眼鏡状把手を有し、4、6とも正面右側に蛇体状の蛇行隆帯を垂下している。

3、7、10、12は無文の口縁部が開き、胴部で括れ、底部が張り出すキャリパー形深鉢である。3は刻み隆帯を垂下して胴部を3単位の区画している。区画は大区画2単位、小区画1単位の3単位で構成し、いずれの区画も渦巻文と三角区画、円形区画を組み合わせた類似するモチーフを構成しているが、小区画へは隆帯の渦巻文を施文していない。区画及び余白への充填文を相違させ

て、対称性を崩している。

7は口縁部が2段に括れる器形で、外反する無文の口縁部に隆帯が垂下し、頸部の眼鏡状へと繋がる。膨らむ頸部には隆帯のクランク状文を施文しており、口縁部は無文になるものと思われる。胴部は垂下隆帯で方形状に区画し、沈線文を施文する。

10は胴部に刻みを有する垂下隆帯で大区画2、小区画1の合計3区画を分割し、大区画内には入り組みの渦巻文をそれぞれ施文している。小区画は欠損するため、モチーフは不明である。対称性を崩す3単位構成である。

12は10と同様な器形で、口縁部の区画に爪形文と波状沈線文を沿わせている。胴部には隆帯の円形モチーフを配し、余白に縦位沈線を施文している。

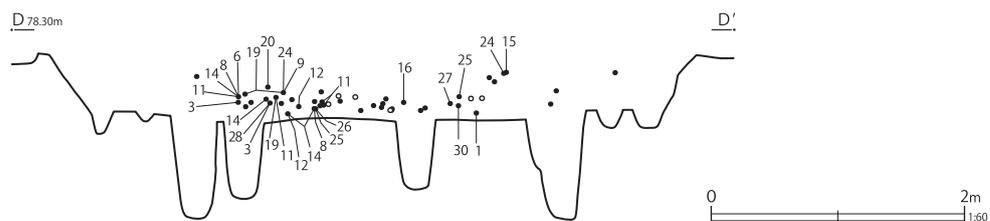
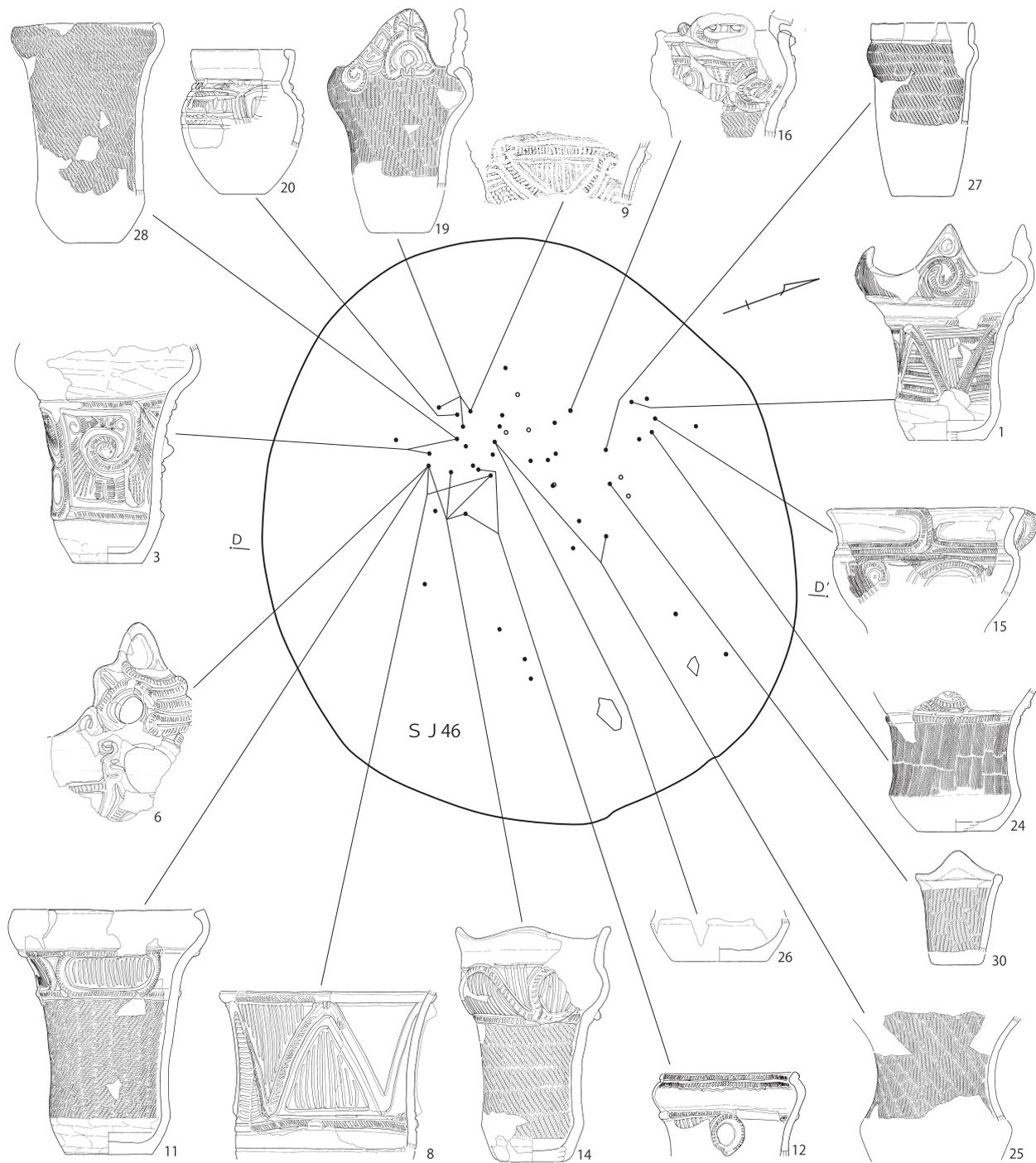
8、9、13は胴部のみ現存するもので、口縁部は不明であるが、8、9は三角区画文を基本にしたモチーフを施文し、13はパネル状区画に近い縦位区画文を施している。

11は10などと同じキャリパー形の器形で、口縁部を無文にするが、頸部に刻み隆帯で楕円区画文を1段配置し、胴部に縄文を施文する土器である。楕円区画内には縦位の集合沈線を施文し、胴部地文には0段多条RLを縦位施文する。

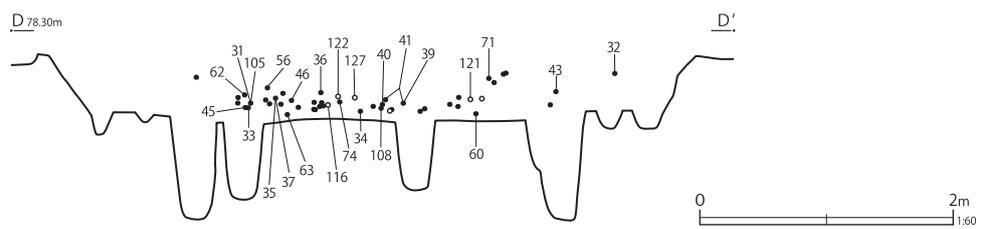
14は緩い4単位の無文の波状口縁が開き、膨らむ頸部に文様を施文するキャリパー形の深鉢で、胴部に縄文のみ施文する構成である。頸部の文様帯には、刻み隆帯で波状文と円形文を繋ぐモチーフを描き、区画内に縦位の集合沈線を施文する。胴部の地文は単節RLの横位施文である。

15は胴部が不明であるが、7と類似する器形となろうか。口縁部が開き、頸部が張る器形の深鉢で、口縁部には隆帯で楕円状の区画を施している。

16は口唇部に眼鏡状把手が付き、幅狭の口縁部を経て膨らむ頸部にモチーフを施文する土器である。胴部の地文は単節RL縄文の横位施文である。



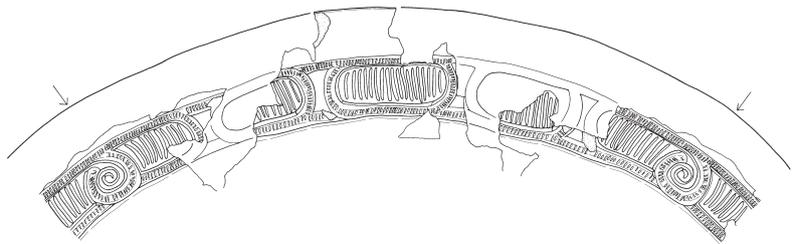
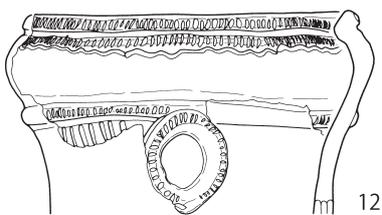
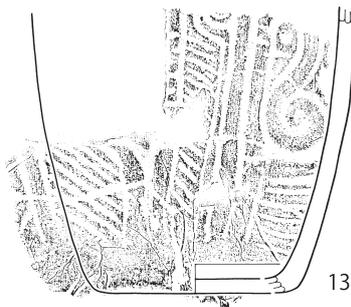
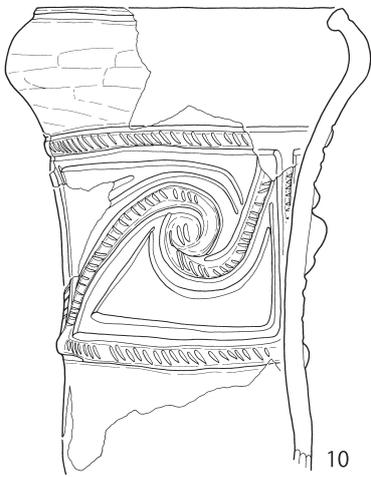
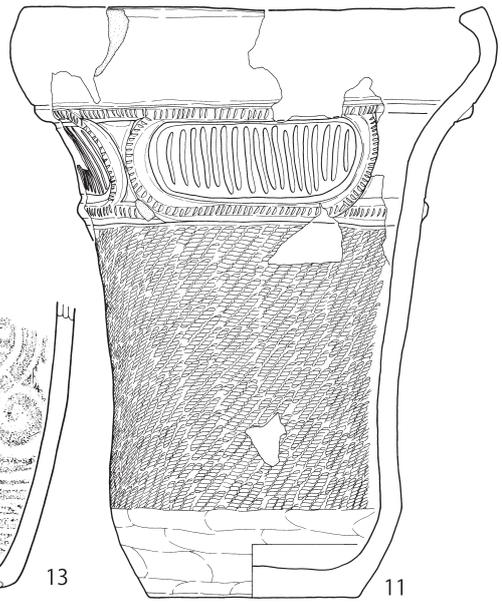
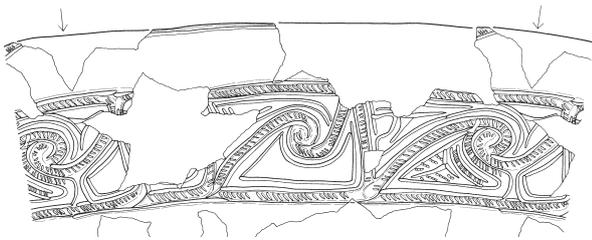
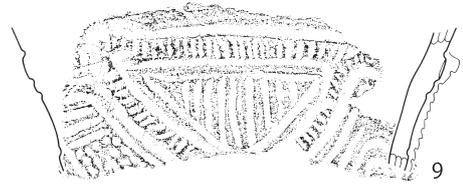
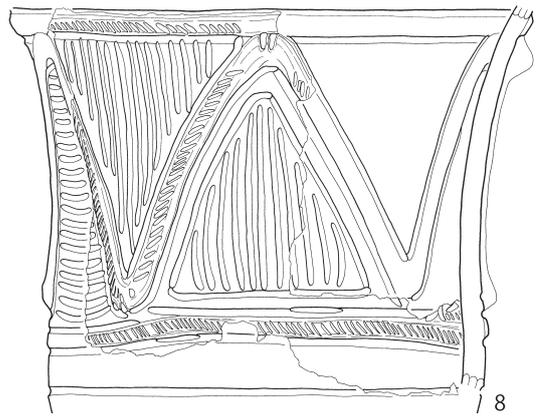
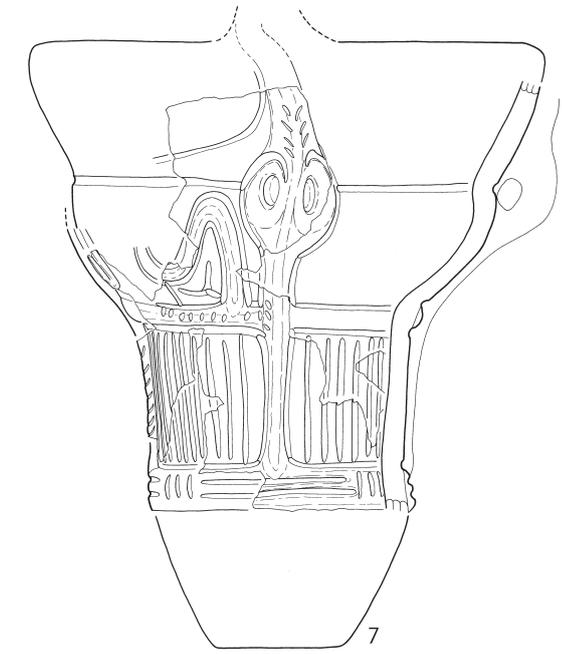
第327図 第46号住居跡遺物出土状況 (1)



第328图 第46号住居跡遺物出土状況(2)

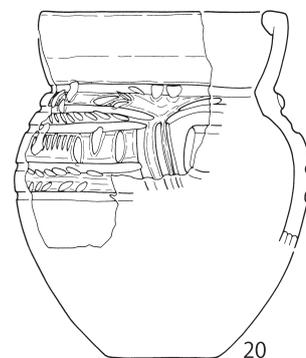
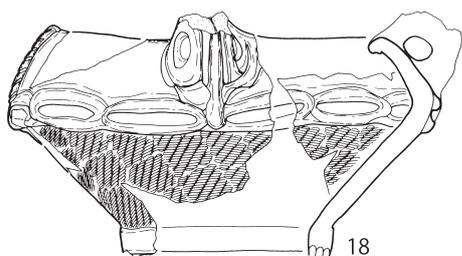
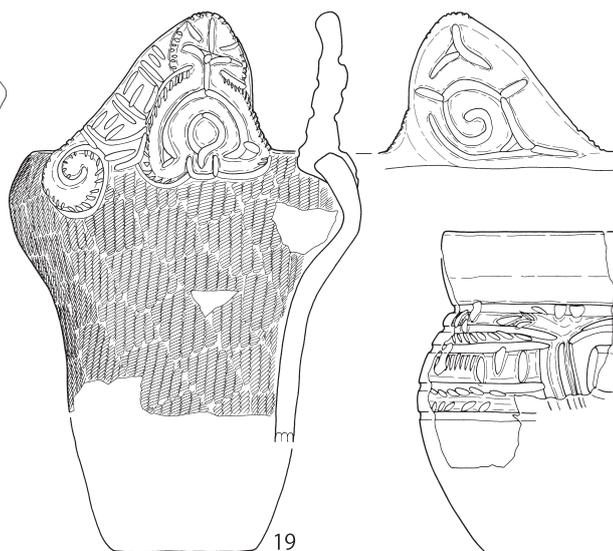
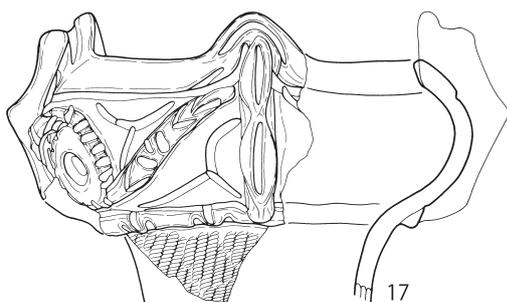
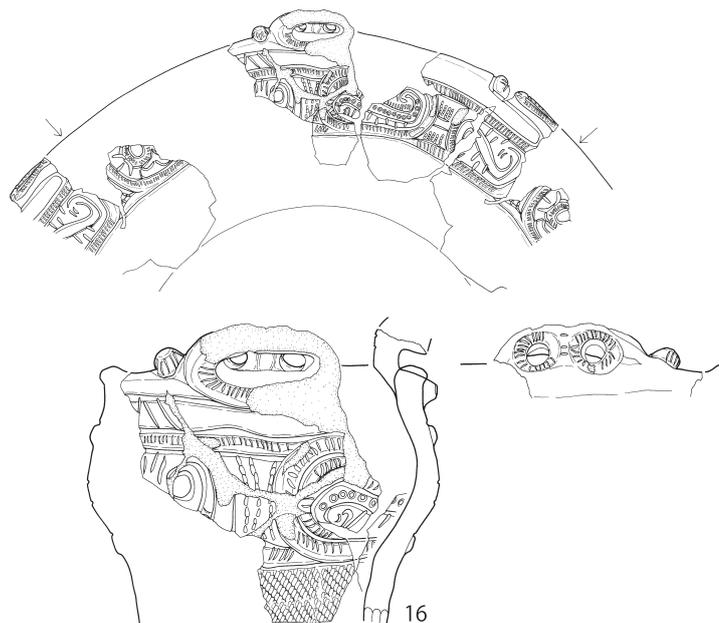
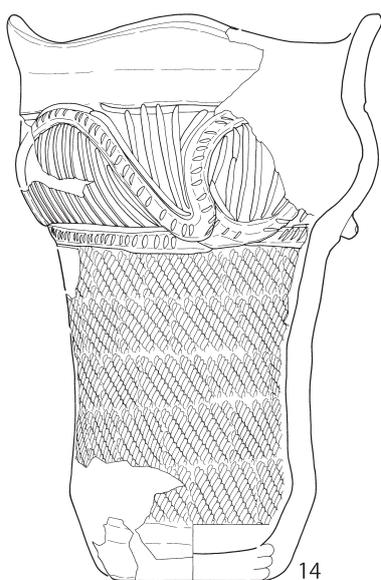
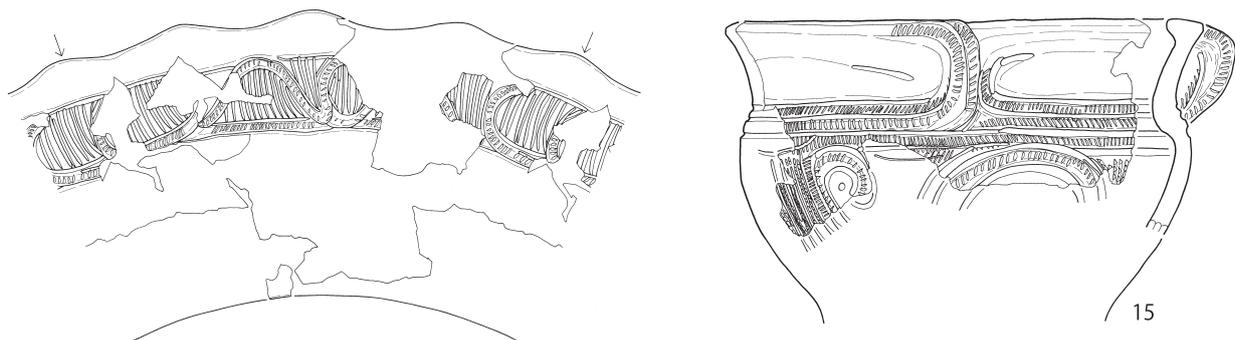


第329図 第46号住居跡出土遺物(1)



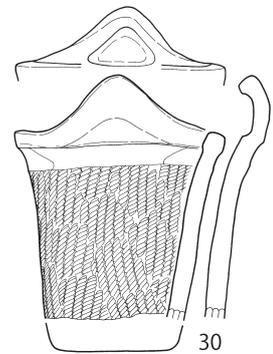
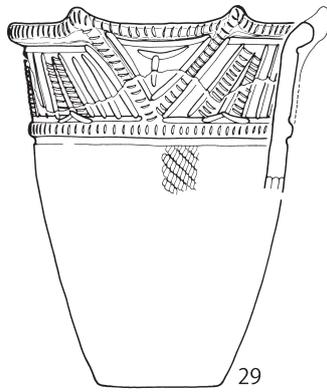
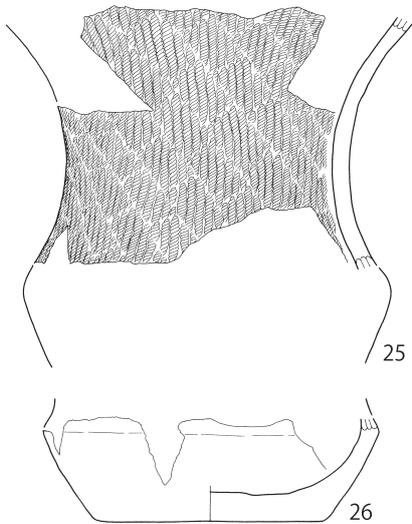
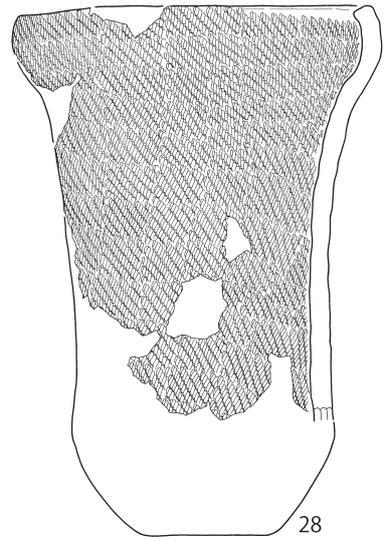
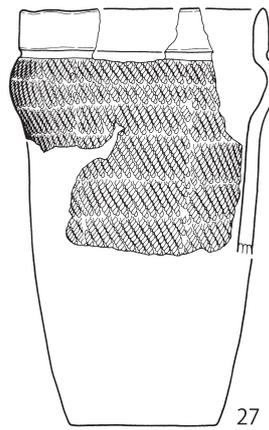
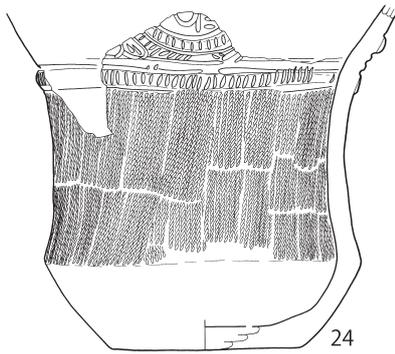
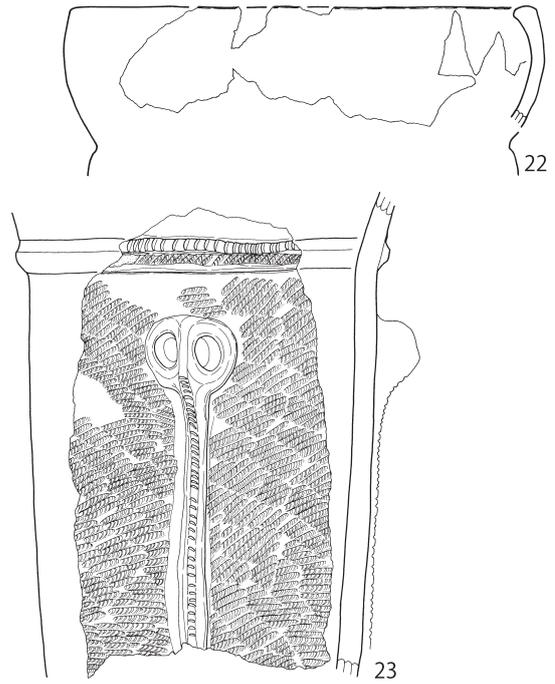
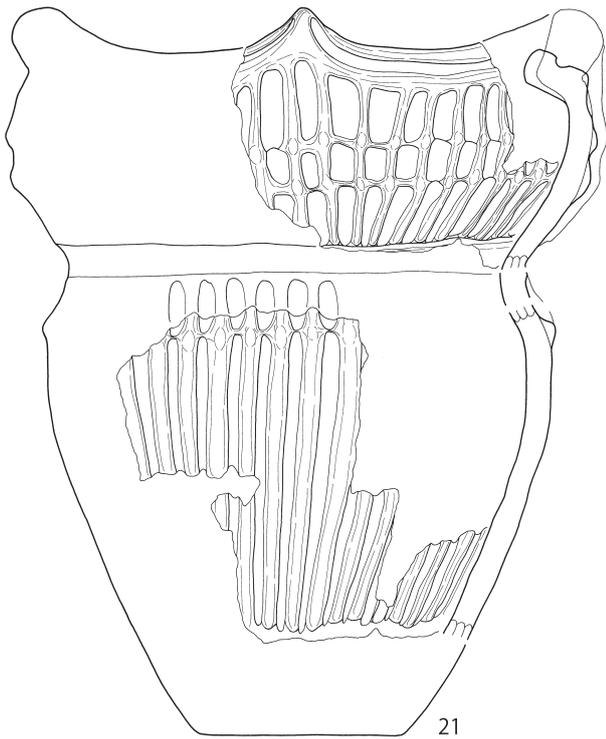
0 10cm
1:4

第330图 第46号住居跡出土遺物(2)



0 10cm
1:4

第331図 第46号住居跡出土遺物(3)

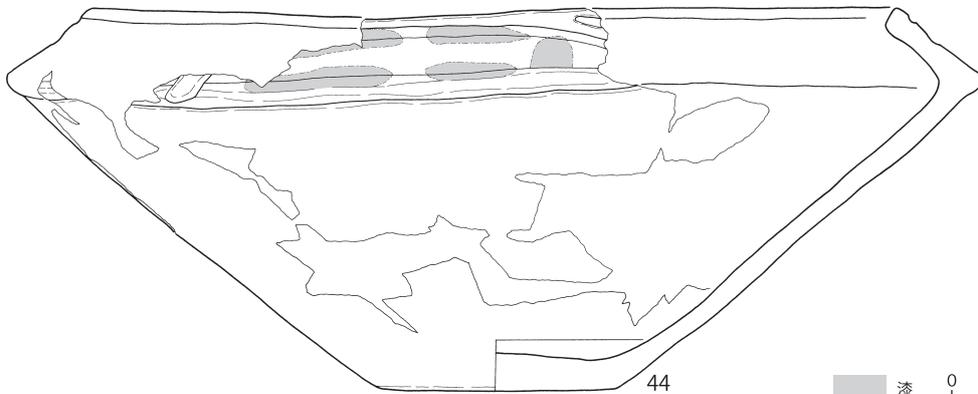
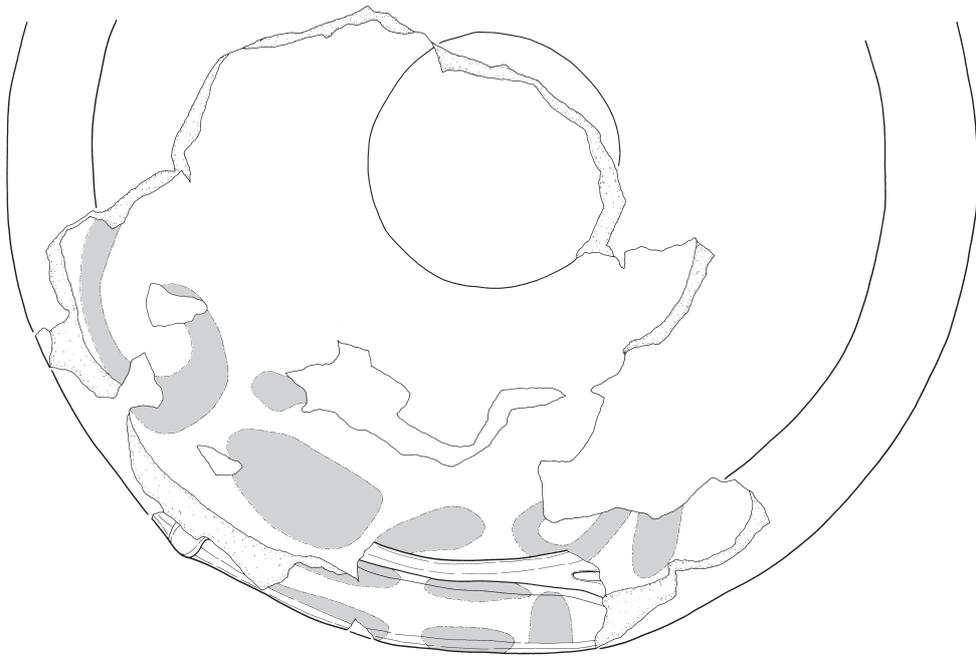
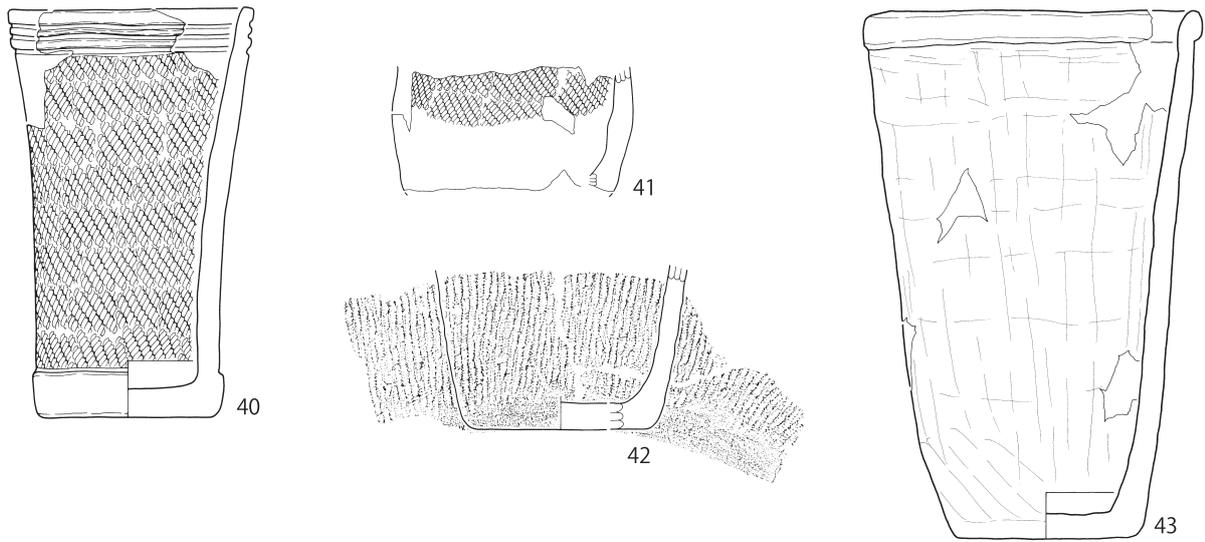


0 10cm
1:4

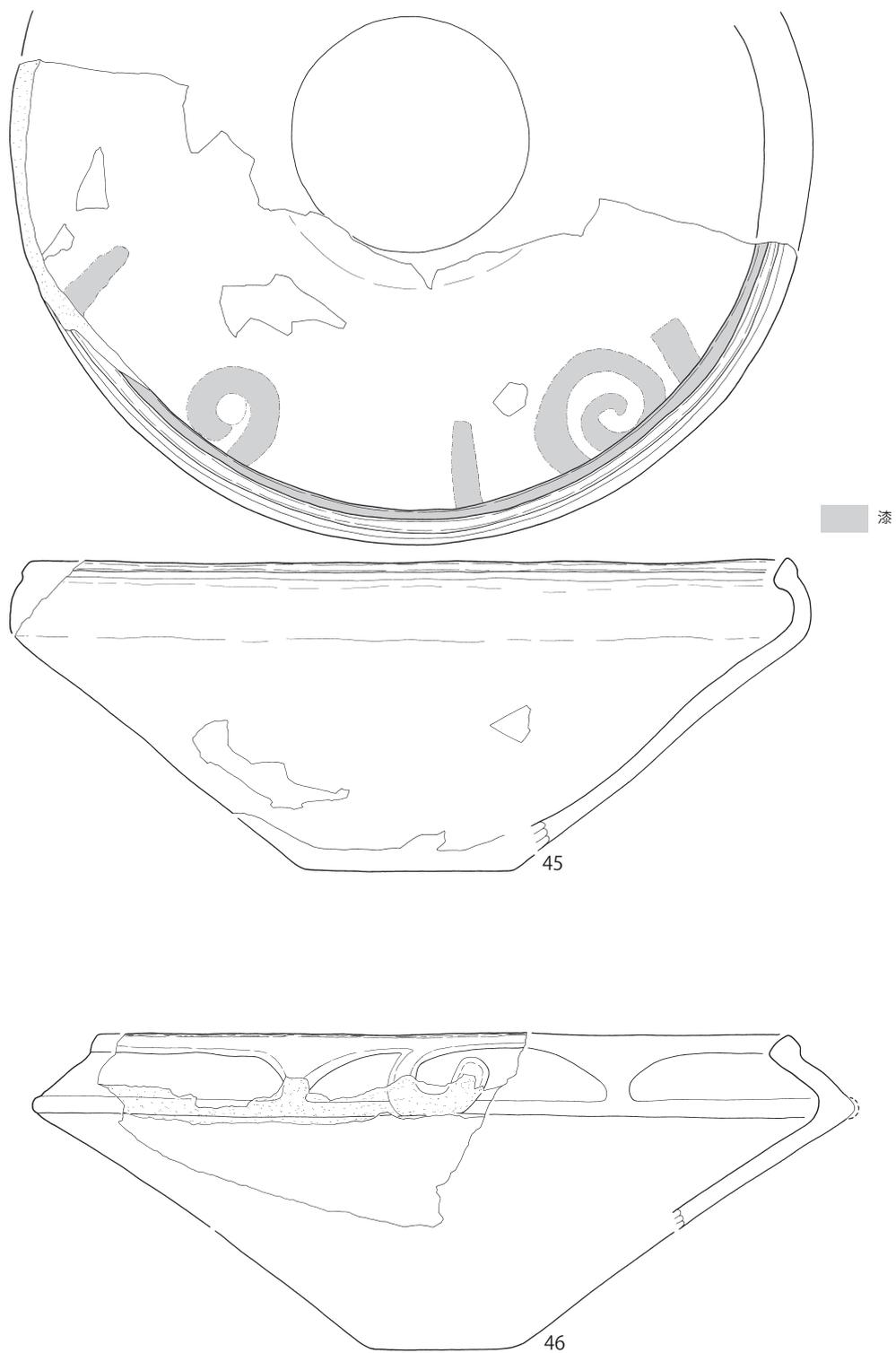
第332图 第46号住居跡出土遺物(4)



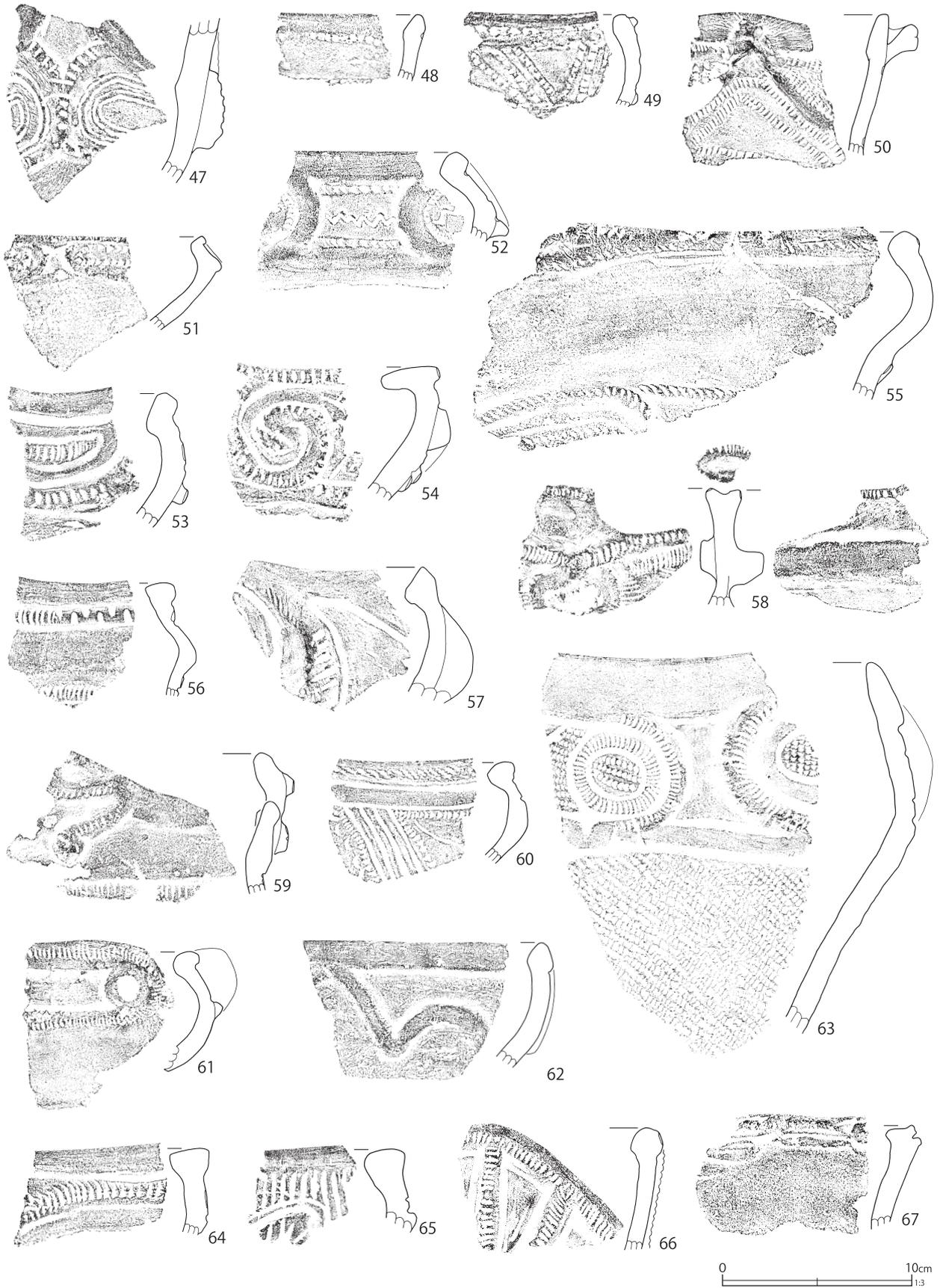
第333図 第46号住居跡出土遺物(5)



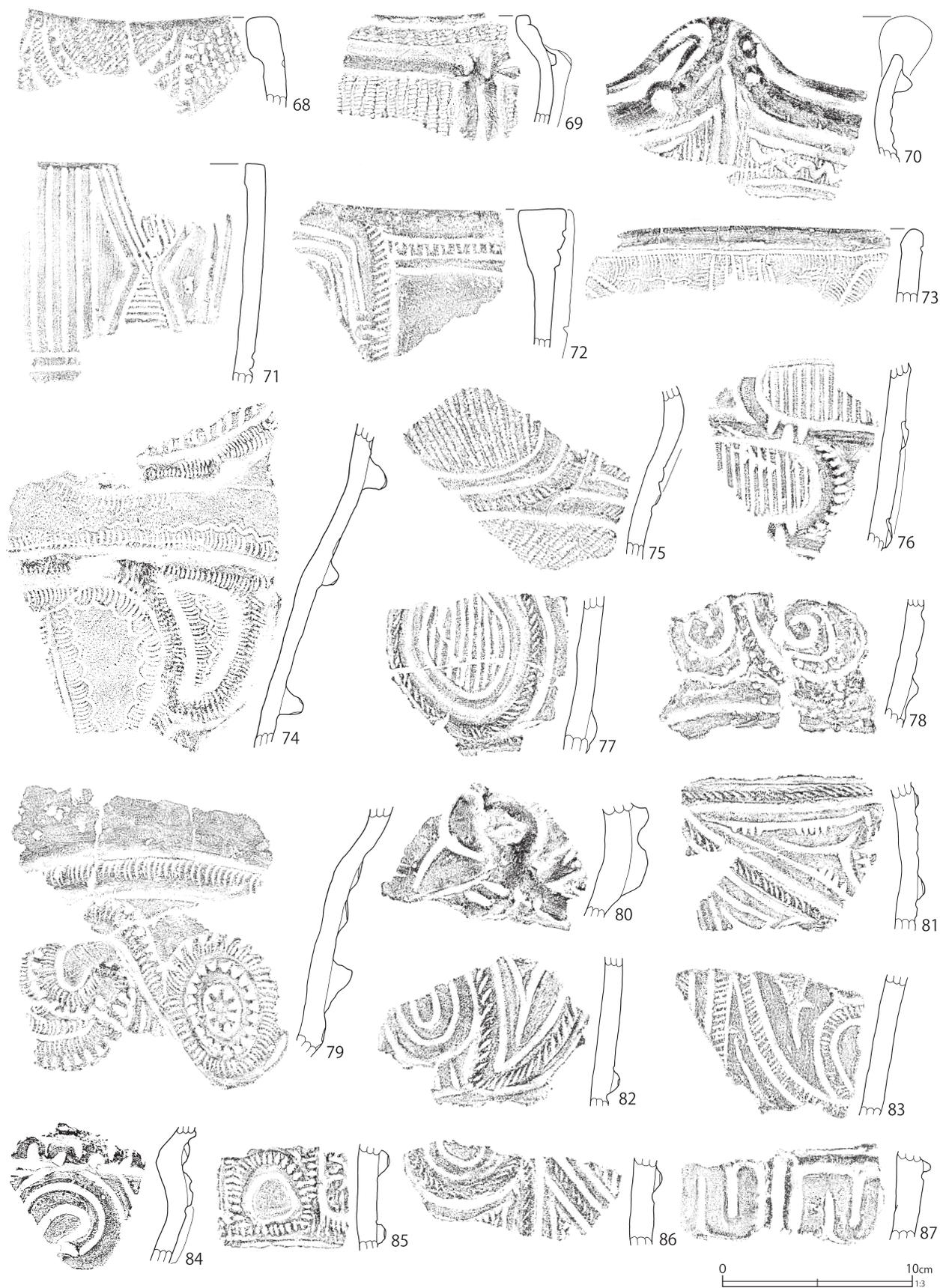
第334图 第46号住居跡出土遺物(6)



第335図 第46号住居跡出土遺物（7）



第336图 第46号住居跡出土遺物(8)



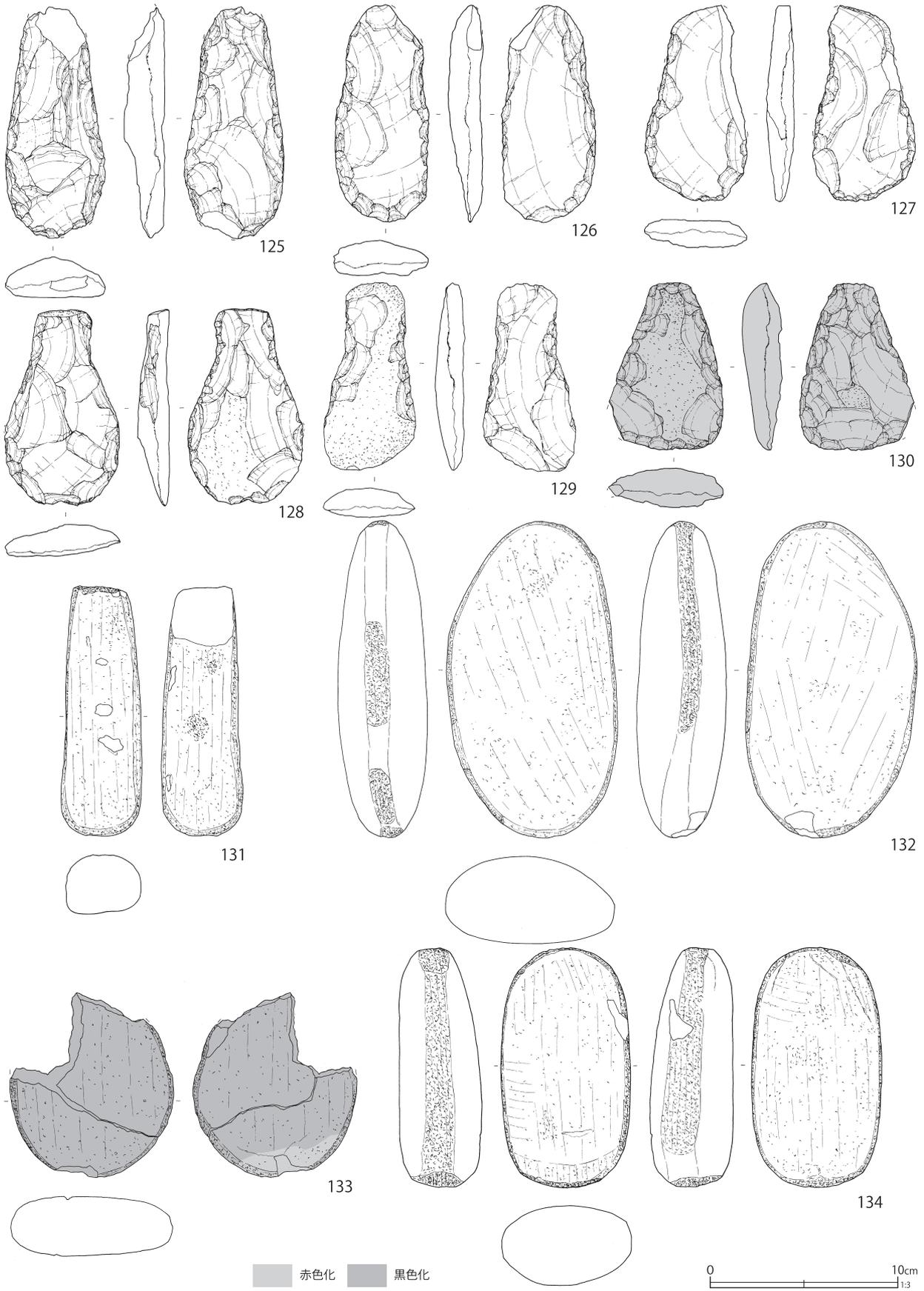
第337図 第46号住居跡出土遺物(9)



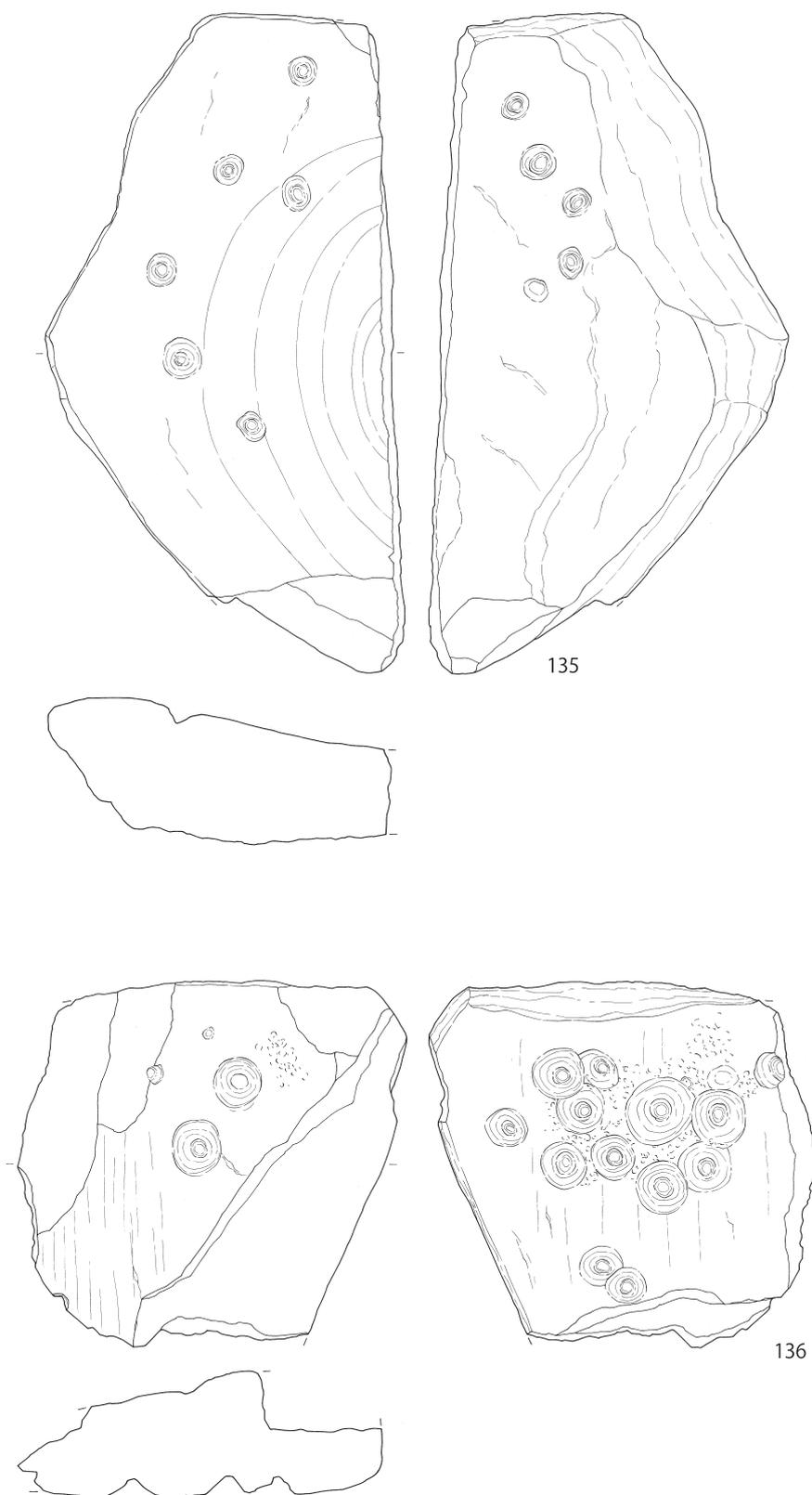
第338图 第46号住居跡出土遺物 (10)



第339図 第46号住居跡出土遺物 (11)



第340图 第46号住居跡出土遺物 (12)



第341図 第46号住居跡出土遺物 (13)

第137表 第46号住居跡出土石器観察表 (第339～341図)

番号	器種	分類	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
339 - 113	石鏃	I 2②	チャート	[2.6]	1.7	0.5	1.6	
114	大形粗製石匙	I 1①イ	ホルンフェルス	4.1	6.6	0.8	18.1	
115	スクレイパー	I 1①イ	砂岩	7.2	5.1	1.0	30.6	
116	スクレイパー	II 1①イ	頁岩	7.8	6.5	1.9	96.2	
117	磨製石斧	I ②イ	緑色岩	14.8	4.9	3.9	450.8	
118	磨製石斧	I ②ア	砂岩	10.1	4.4	3.2	217.5	
119	打製石斧	I ②イ	緑色岩	15.0	4.2	1.7	136.5	
120	打製石斧	I ①イ	ホルンフェルス	10.2	2.9	1.5	52.8	
121	打製石斧	II 2①ア	ホルンフェルス	11.7	4.5	2.1	125.7	
122	打製石斧	II 2①ア	頁岩	9.3	5.4	1.7	92.5	
123	打製石斧	II 2①ア	砂岩	10.2	6.0	2.0	156.4	
124	打製石斧	II 2②イ	砂岩	[12.7]	4.6	1.9	144.9	
340 - 125	打製石斧	III 2①イ	頁岩	12.4	5.4	2.2	153.1	
126	打製石斧	III 2①イ	ホルンフェルス	11.7	5.0	1.9	124.4	
127	打製石斧	III 2①イ	緑泥片岩	10.6	5.5	1.5	88.5	
128	打製石斧	III 1①ア	ホルンフェルス	10.5	6.1	1.7	109.4	
129	打製石斧	III 1①イ	ホルンフェルス	10.0	4.9	1.6	78.8	
130	打製石斧	III 2②ア	砂岩	9.0	[6.1]	2.1	115.0	表裏面全部赤色化
131	磨石	III 1-3②ア	安山岩	[13.4]	4.4	3.7	370.5	
132	磨石	II 1-3①イ	砂岩	17.0	9.2	4.8	995.6	
133	磨石	I 1-3②ア	安山岩	[9.9]	8.8	3.8	372.6	表裏面被熱黒色化
134	磨石	II 1-3①イ	砂岩	12.9	6.9	4.5	643.2	
341 - 135	石皿	II 2②ア	結晶片岩	[28.3]	[15.4]	6.9	3636.9	
136	石皿	IV ②イ	緑泥片岩	[15.7]	[16.5]	5.7	1848.9	

17、18は多喜窪タイプの口縁部が開き胴部で括れ、底部が張り出す器形である。17は口縁部に4単位の肥厚する山形把手が付き、把手から連鎖状の隆帯を垂下して文様帯を縦位区画する。口縁部には垂下隆帯から派生する隆帯で円形文を組みながら連結するモチーフを構成する。円形区画文は低平な幅広隆帯で区画し、隆帯の縁に押圧状の刻みを施す。胴部地文は0段多条RLの縦走縄文である。

18は口縁部の内折が強くなり、頸部との境に蛙口状の杵状文を施文している。口縁部には眼鏡状把手を付け、頸部に0段多条RLの縦走縄文を施文する。

19はキャリパー形の器形で、口縁部に大形把手を1個のみ付ける土器である。把手は内外面に渦巻文を施文し、正面左側に把手から続く隆帯が渦を巻く。口縁部の地文は0段多条RLの縦走縄文である。

20は頸部が括れ、胴部が張る壺状の器形である。胴部に横位隆帯や縦位隆帯で区画文を施すもので、隆帯には交互刺突や「ハ」字状刻みを施している。

21は胴部で強く括れ、口縁部と胴部が張る器形を呈する。器形の変化に応じて節を作る隆帯を密に全面施文する。隆帯は部分的に横位連結して、ワッフル状を呈する。

22は無文の口縁部で、23は筒状の胴部に眼鏡状把手から、蛇体文を表す隆帯が垂下する土器で、地文に無節Lを横位施文する。

24～26はキャリパー形土器の胴部と底部で、24は撚糸文Lを、25は0段多条RLの縦走縄文を施文する。26は無文となる底部である。

27、28は地文縄文のみ施文する深鉢で、27は短く立つ口縁部を沈線で区画し、胴部に単節RL縄文を横位施文する。28は口縁部が短く内湾する器形で、胴部に単節RL縄文を横位施文する。

29～43は円筒形深鉢土器である。29は刻み隆帯で口縁部を区画し、三角形の区画文を施文する。胴部には単節RL縄文を施文する。

30は小形の土器で、口縁部に大きな山形把手が1箇所につくのみの土器である。地文は0段多条RLの縦走縄文である。

31、32は口縁部がやや開く器形で、口縁部に幅狭な無文部を設けて、それぞれ楕円区画文を1段に配している。31は地文に単節RL縄文を横位施文する。32は区画内に縦位沈線を施文する。

33は刻みを施す低隆帯で垂下する渦巻文や「X」字状文を構成する。余白には三叉文や縦横の沈線文を施文する。

34は半隆起線で胴部を2分割し、上半部に「M」字状と「X」字状の区画文を交互の4単位に施文している。下半部は半円区画と波頭状文を2単位に組み合わせている。上半部の「X」字状区画の下部に波頭状文を、「M」字状区画の下部に半円区画文を配置する構成になっている。上半部の縦位の区切り文は長楕円と楕円文を縦位に組み合わせているが、3箇所は1列のみで区画しているが、1箇所だけ2列で区画する部分がある。縦位区画文は口縁部で縦位の楕円区画文と両脇に円形区画文を配して目と鼻状を表す顔状の表現となっているが、2列垂下する箇所のみ、目の片方を閉じてウインクをしているような表現となっている。胴部には0段多条RLの縦走縄文を施文する。

35は胴部を垂下隆帯で4単位に区画し、それぞれの区画に隆帯から派生する大巻の渦巻文を配する構成であるが、1箇所のみ反対巻きの渦巻文を施文する。ここでも3対1の構成をとる。胴部は単節LRの縦位施文である。

36は胴部に背割隆帯による横「S」字状入組渦巻文を3単位に連繋するモチーフを構成している。隆帯には細かな刻みと、部分的に交互刻みを施している。モチーフの余白には三叉文を施文している。

37は逆「U」字状隆帯を垂下して口縁部を区画し、

区画内には並行沈線の対弧状文や鋸歯状文を施文する。胴部は0段多条RLの縦走縄文を施文する。

38は胴部を欠損し、文様構成は不明であるが、胴部の地文に、0段多条RLの縦走縄文を施文する。

39、40は口縁部を区画するのみの土器で、39は段帯整形で口縁部の無文帯を区画する。胴部は単節RL縄文の横位施文である。

40は3本の沈線で口縁部を区画し、胴部に単節RL縄文を横位施文する。底部が若干突出する。

41はキャリパー形深鉢の底部で、単節RL縄文を横位施文する。42は円筒形土器の底部と思われる、0段多条RLの縦走縄文を施文している。

43は無文の円筒形土器、口唇部が肥厚して段帯状となる。

44～46は浅鉢である。44は口縁部が強く内折する浅鉢で、口縁部の外面、内面文様構成は不明であるが渦巻文を中心とするモチーフを漆で描いている。45も同様に内面に漆文を描く浅鉢で、より明らかな渦巻文を描いている。器形は口縁部がやや丸く内湾する。46は44と同様に口縁部が強く内折する器形で、口縁部に半彫状の楕円文や渦巻文を施文する。

破片では、47～52は複列の押引文や角押文を施文する勝坂式古段階の土器期群である。47、48には雲母が含まれる。阿玉台Ⅱ式並行の土器群である。49～51は新道式から藤内式段階に比定されよう。

53～105は勝坂式土器で、大半は新段階の土器群であろう。53、54、60～66は口縁部文様帯を有するキャリパー形土器で、55、56、59は口縁部を無文帯とする土器である。把手を有する土器では58、59のように把手から隆帯が垂下するものが多く、口縁部を抜けて頸部にまで垂下するものが多い。

63は内湾する口縁部に刻み隆帯で楕円区画文を配し、区画内に爪形文や沈線文で円形文を施文し、集合結節沈線を充填施文する。胴部には単節

R Lを横位施文する。

67は口唇部外端に蛙口状の区画文を巡らせ、口縁部を無文にしている。

68は樽形の器形で、縦位区画に対弧状のモチーフを施文し、集合結節沈線を充填施文するものと思われる。

69は口縁部が内湾して開くキャリパー形土器の口縁部で、地文に0段多条R Lの縦走縄文を施文し、2本隆帯を垂下して口縁部を区画するものと思われる。70は胴部で括れ口縁部が開く4単位の波状口縁で、胴部が張る器形である。頸部を並行沈線で区画し、口縁部との余白に蛇行沈線を施文する。口縁部は四角形状に肥厚するものと思われる。69とともに勝坂式終末段階の土器群で、加曾利E I式初頭期の土器群との関係で、問題となる土器群であると思われる。

71～73は円筒形土器の口縁部である。71は半隆帯でモチーフを描くもので、72は刻みを施す隆帯を垂下させて、文様帯を縦位区画するものであろう。73は沈線と爪形文で対向の三角形文を描くもので、やや古い様相を有する。

74～104は各種器形の胴部破片である。74は口縁部及び胴部の隆帯区画に蓮華文を沿わせて施文するものであるが、隆帯には「ハ」字状刻みを施している。

79は隆帯で円形文と渦巻文を繋いでいるが、隆帯状には細かな押引による爪形文状の刻みを施文している。

104は地文縦走縄文上に横位の波状文を複列に施文するもので、70と同様な土器と思われる。

106、107は加曾利E III式キャリパー形土器の口縁部破片である。

108は波状口縁の浅鉢で、波状は双頭状を呈するものと思われる。

土製品は、109～112の土器片を利用した土製円盤が出土した。

石器は第339図113～第341図136が出土した。

113は両側縁が鋸歯状の石鏃で、先端を欠く。

114は粗粒の石材を素材として用いた横型の石匙で、いわゆる大形粗製石匙である。

115、116は粗粒の石材を利用したスクレイパーである。

117、118は乳棒状の磨製石斧である。ともに刃部が欠損した後、欠損面を使用面として敲石に再利用されている。

119～130は打製石斧である。119～124は短冊形を呈し、いずれも刃部が両刃である。125～130は撥形を呈する。125、128が片刃で、その他は両刃である。

131は自然礫を用いた敲石である。

132～134は磨石で、いずれも周縁に整形が施されている。

135、136は石皿で、ともに正面及び裏面に凹痕を有する。特に、136の裏面には凹痕が密集している。

第47号住居跡（第342図～第343図）

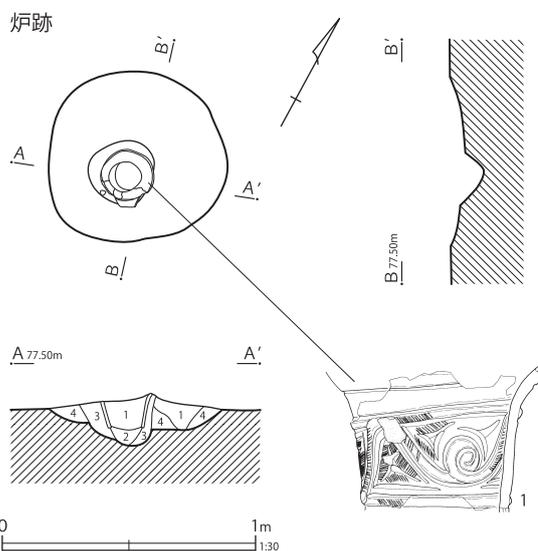
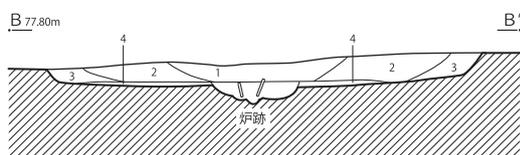
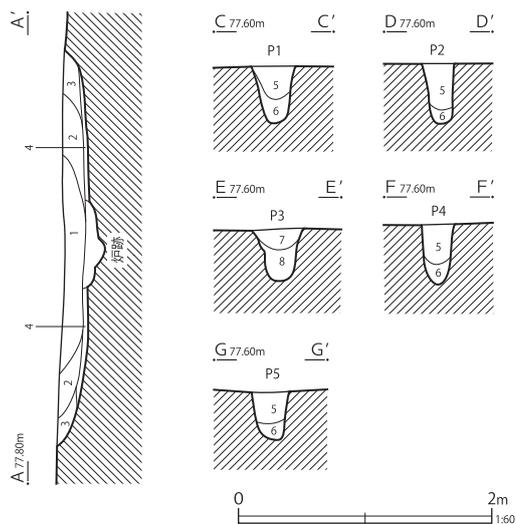
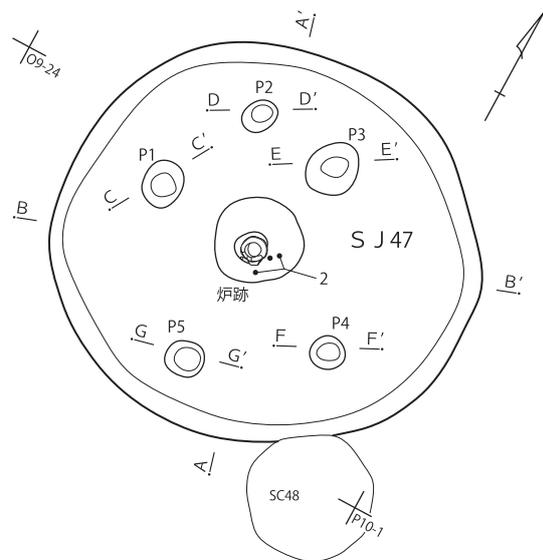
O-9区に位置する。北側で第36号住居跡、南側で第48号集石土壇と重複するが、いずれも本住居跡より新しい。平面形は径3.36m程の小形の住居跡で、ほぼ円形を呈する。深さは約0.25mで、壁は緩やかに立ち上がる。

壁溝は検出されなかった。柱穴は5基検出されたが、覆土、深さ及び配置から主柱穴と思われるものはP5、1、2、3、4の5基と思われる。主柱穴の深さは、P1=45cm、P2=47cm、P3=41cm、P4=48cm、P5=48cmである。

炉は埋甕炉で、住居跡中央で検出された。炉床面や土器周囲にも焼土は殆ど見られず、被熱による影響は顕著でない。使用頻度は少なく、使用時には土器部分のみが開口していたものと思われる。

埋甕は検出されなかった。

覆土中の4層としたものは、いわゆる貼り床と思われる。



S J 47

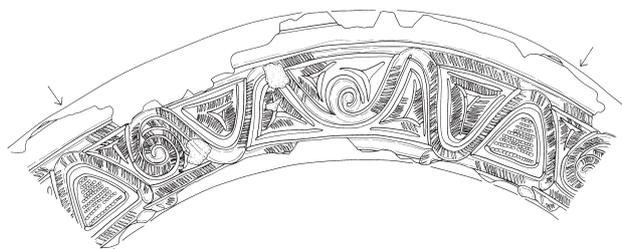
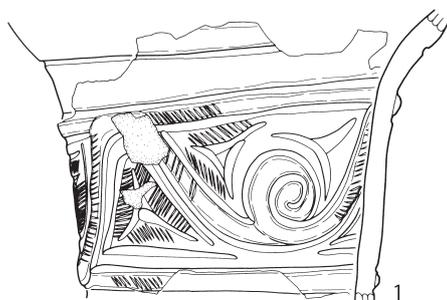
- 1 暗褐色土 黒味強め ローム粒子・炭化物粒子少量
- 2 暗茶褐色土 ローム粒子・炭化物粒子多量
- 3 暗茶褐色土 2層よりソフトローム土の混入多い
- 4 暗黄褐色土 ローム粒子少量 しまり良い 炭化物・焼土粒子少量

S J 47 ピット

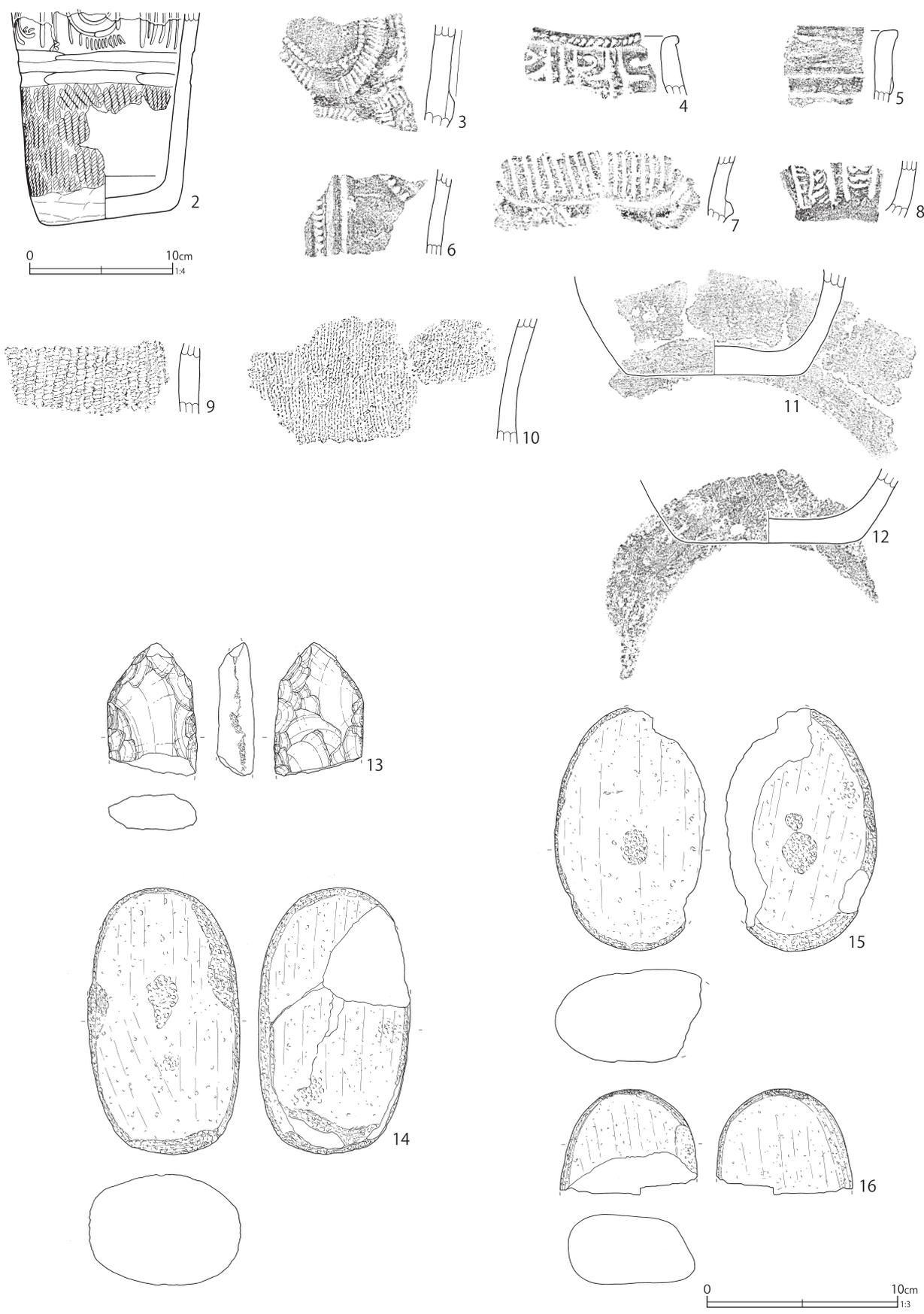
- 5 暗灰褐色土 ローム粒子・炭化物粒少量 しまり悪い
- 6 暗灰褐色土 5層に近似するが、ソフトローム土の混入多く黄色みを帯びる
- 7 暗黄褐色土 暗灰褐色土少量 炭化物粒子微量
- 8 暗黄褐色土 7層に近似するが、ローム土の混入多く黄色みを帯びる

S J 47 炉跡

- 1 暗褐色土 2層に近似するが、ローム土を小ブロック状に含む炭化物粒子微量
- 2 暗褐色土 ソフトローム混入 しまり悪い 粘性弱い
- 3 暗灰褐色土 ローム土多量 粘性やや強い
- 4 黄褐色土 ローム土主体 しまり良い 粘性強い



第342図 第47号住居跡・出土遺物（1）



第343图 第47号住居跡出土遺物(2)

第138表 第47号住居跡柱穴計測表 (第342図)

ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)												
P 1	38.0	45.0	P 2	29.0	47.0	P 3	45.0	41.0	P 4	28.0	48.0	P 5	30.0	48.0

第139表 第47号住居跡出土復元土器観察表 (第342図)

番号	器高(cm)	口径(cm)	最大径(cm)	底径(cm)	備考	番号	器高(cm)	口径(cm)	最大径(cm)	底径(cm)	備考
342-1	[14.8]	-	23.0	-	40%	342-2	[15.0]	-	(13.1)	9.2	40%

第140表 第47号住居跡出土石器観察表 (第343図)

番号	器種	分類	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
343 - 13	打製石斧	V②イ	砂岩	[7.0]	4.7	2.0	84.4	
14	磨石	II 1-3②イ	安山岩	14.1	8.0	5.9	918.1	
15	磨石	II 1-3②イ	安山岩	[12.8]	[8.0]	5.0	693.7	
16	磨石	I 1-3②ア	砂岩	[5.6]	7.2	4.0	203.0	

住居跡は、炉体土器から勝坂式新段階期の所産と思われる。

遺物は第342図1～343図16の土器類、石器類が出土した。

1～12は土器である。1は炉体土器である。口縁部と底部を欠損するが、胴部に刻み隆帯で渦巻文を波状文で連結するモチーフを施文する。単位性が不明瞭であるが、渦巻文と波状文、波状文と波底部の渦巻文、波状文のみの大きくは3単位構成になるものと思われる。区画内には爪形文を有する三叉文を施文するが、1箇所のみ横位の集合結節沈線文を施文する。

2は胴下半部のみ現存するもので、胴部を2本沈線で区画し、胴部に0段多条RLの縦走縄文を施文する。

破片では、3はキャタピラ文と三角押文を施文する勝坂式古段階の土器で、新道式に比定されよう。

4～8は勝坂式新段階の土器群である。4はやや内湾する口縁部に平行沈線を垂下して区画するもので、5は口縁部を低隆帯で区画する。6は半截竹管状工具の合わせ施文による3本沈線を施文するもので、3本目に連続刺突文を施文している。やや古い様相を有する。7は楕円区画内に集合沈線を充填施文する。8は垂下する並行沈線間に爪形文や蛇行沈線を挟んでいる。

9は胴部に0段多条RLの縦走縄文を施文し、

10は撚糸文Lを施文する。

11、12は無文の底部である。

石器は13～16が出土した。

13は打製石斧の基部片である。

14～16は磨石で、14、16は周縁に整形が施されている。

第48号住居跡 (第344図～第345図)

Q・R-13区に位置する。南側で第20、30号住居跡と重複するが、新旧関係は不明である。掘り込みがないため、住居跡の規模、形状とも不明である。

壁溝は検出されなかった。

柱穴は6基検出されたが、いずれも浅く、支柱穴を特定できない。

炉跡、埋甕とも検出されなかった。

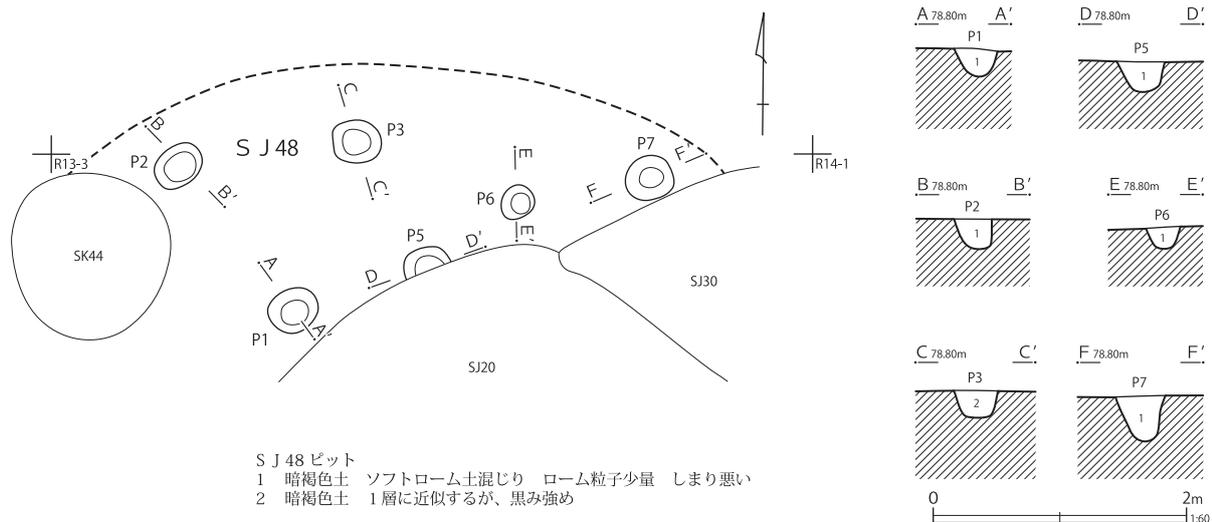
住居跡の多くの部分が第20・30号住居跡と重複しており、柱穴等調査時には検出できなかった。

住居跡の時期は不明である。

遺物は第345図1～22が出土した。

土器は1～15である。1、2は角押文を施文する勝坂式古段階の土器群、3～8は連続爪形文に波状沈線文を沿わせるものや、蓮華文を施文するものなどの、勝坂式中段階から新段階にかけての土器群である。

9は加曾利E I式キャリパー形土器の胴部破片で、撚糸文R地文上に隆帯懸垂文を垂下させる。



第344図 第48号住居跡

第141表 第48号住居跡柱穴計測表 (第344図)

ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)												
P 1	40.0	22.0	P 2	40.0	24.0	P 3	40.0	20.0	P 4	欠番		P 5	37.0	24.0
P 6	30.0	17.0	P 7	38.0	35.0									

第142表 第48号住居跡出土石器観察表 (第345図)

番号	器種	分類	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
345 - 16	大形粗製石匙	I 2①イ	ホルンフェルス	7.9	6.3	0.8	35.5	
17	打製石斧	II 2②イ	緑色岩	[10.8]	4.3	1.5	90.2	
18	打製石斧	III 2①イ	ホルンフェルス	10.2	4.1	1.9	104.2	
19	打製石斧	III 1①イ	ホルンフェルス	8.3	4.7	1.4	64.7	
20	打製石斧	III 2②イ	ホルンフェルス	9.6	6.4	1.8	77.9	
21	打製石斧	III 2①イ	ホルンフェルス	10.9	5.2	1.6	94.7	
22	石皿	IV ②ア	安山岩	[5.9]	[5.1]	[6.7]	162.7	表面一部黒色化

垂下隆帯の一部に梯子状の短隆帯を施文している。

10は加曾利EⅢ式の口縁部破片、11は磨消懸垂文を有するEⅢ式の胴部破片である。13は膨らむ胴部に沈線渦巻文と懸垂文を施文する加曾利EⅢ式土器である。地文に単節LR縄文を施文する。

12は細かな撚糸文Lを施文する胴部破片で、14、15は無文の底部であり、浅鉢の底部であろうか。

石器は16～22が出土した。

16は粗粒の石材を素材に用いた縦型の石匙で、大形粗製石匙の一種だと思われる。

17～21は打製石斧である。17のみが短冊形を呈し、その他は撥形を呈する。刃部は、17、20、21が片刃、18、19が両刃である。

22は石皿の破片である。

第49号住居跡 (第346図～第347図)

Q・R-11・12区に位置する。第25号住居跡、第26号住居跡及び第42号土壌、第43号土壌と重複するが、新旧関係は不明である。

掘り込みがないため、住居跡の規模、形状とも不明であるが、検出された柱穴の配置等から炉跡を中心にして、径7m程の規模が推定される。

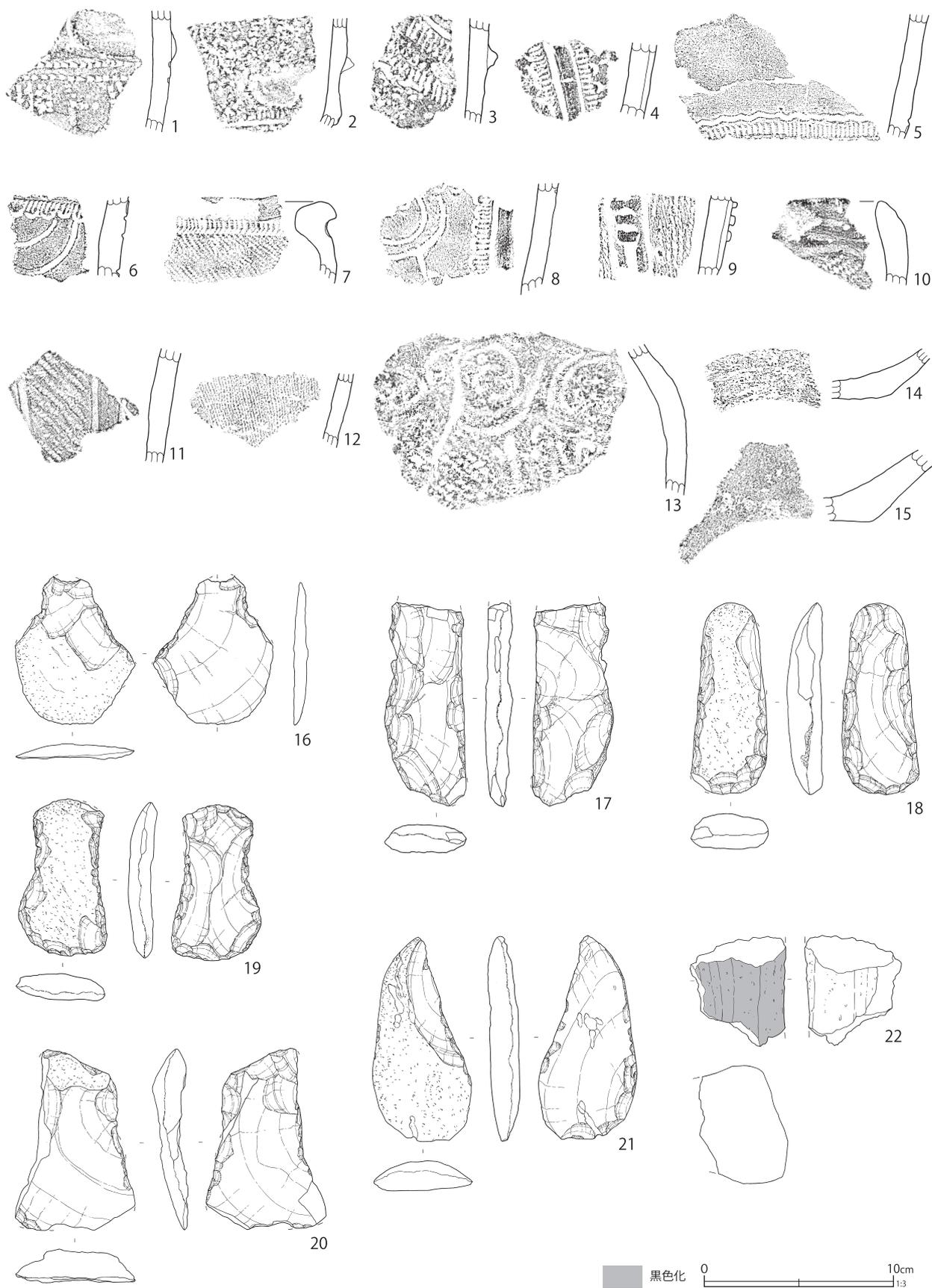
壁溝は検出されていない。

柱穴は12本検出されたが、いずれも浅く、支柱穴を特定できない。

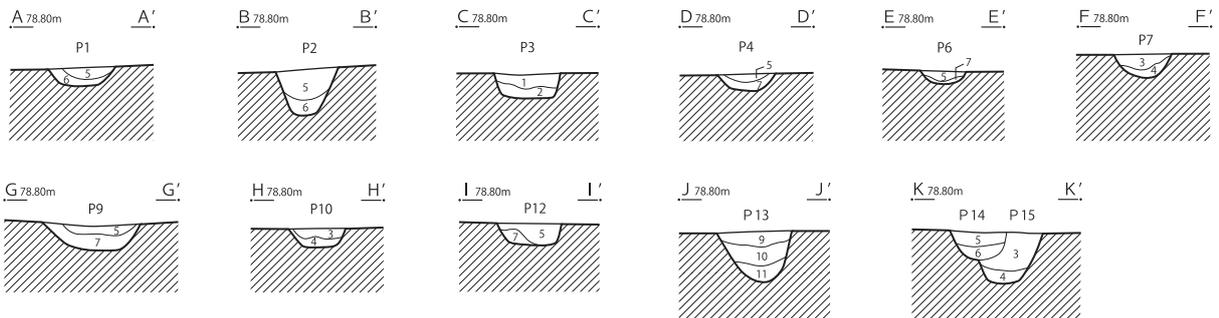
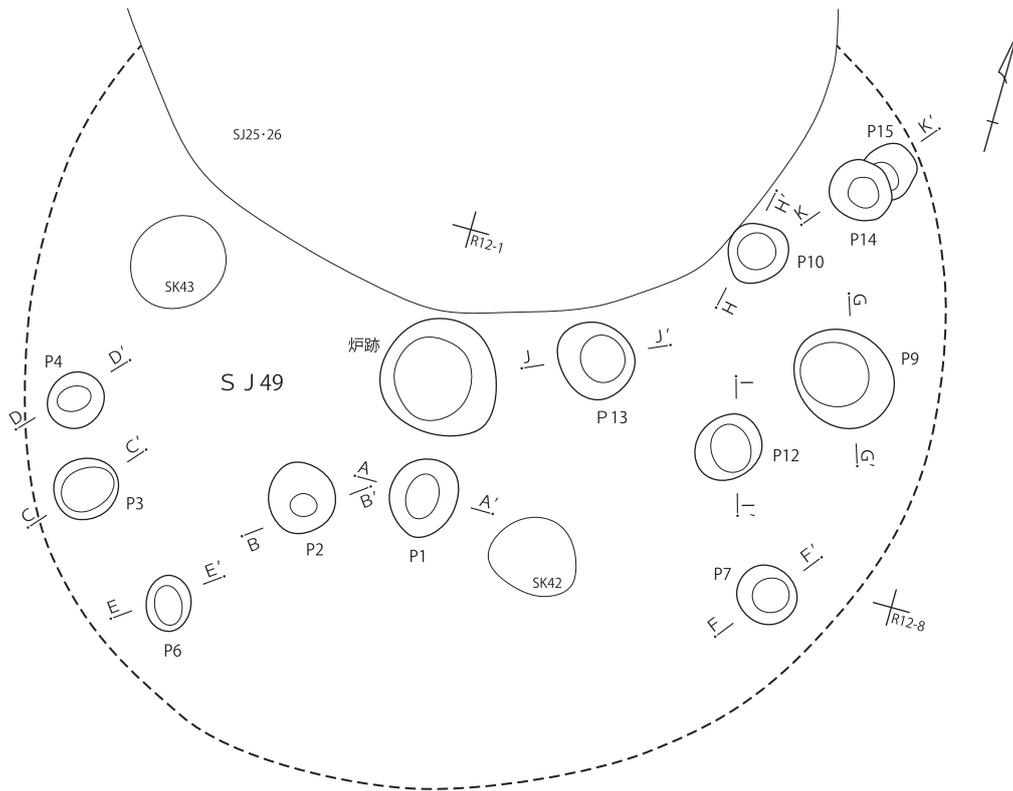
炉は地床炉で、ピット群の中央付近で、径90cm程の不整円形の焼土範囲として検出された。深さ20cm程の掘り込みを有する。

埋甕は検出されなかった。

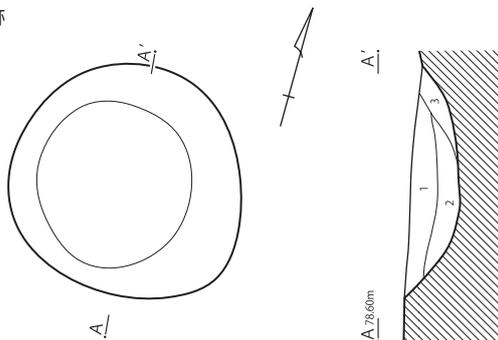
住居跡の時期を判定できる遺物が出土してい



第345図 第48号住居跡出土遺物



炉跡



S J 49 ビット

- 1 暗灰褐色土 炭微粒子をわずかに含む
- 2 灰褐色土 1層をベースに多量のローム土を混入
- 3 黒褐色土 炭微粒子少量
- 4 黄褐色土 3層をベースに多量のローム土を混入
粘性非常に強い
- 5 暗茶褐色土 粒子類少なく非常に均質
- 6 暗黄褐色土 ローム小ブロック含む
- 7 黄茶褐色土 5層をベースに多量のローム土を混入
- 8 黄褐色土 ローム土主体
しまり悪い 粘性非常に強い
- 9 暗茶褐色土 炭微粒子をわずかに含むのみで
比較的均質
- 10 暗灰褐色土 粒子類は殆ど含まれず非常に均質
粘性非常に強い
- 11 黄褐色土 10層をベースに多量のローム土を混入
しまり悪い 粘性非常に強い

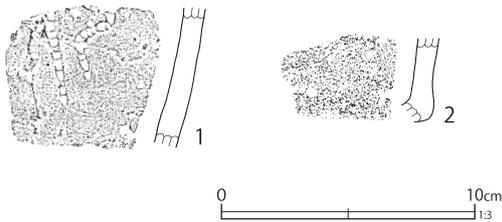
S J 49 炉跡

- 1 暗灰褐色土 炭微粒子・焼土微粒子多量
比較的均質
- 2 橙灰褐色土 炭微粒子・ローム小ブロック少量
- 3 黄褐色土 2層をベースに多量のローム土を混入
粘性強い

第346図 第49号住居跡

第143表 第49号住居跡柱穴計測表 (第346図)

ピットNo.	長径 (cm)	深さ (cm)												
P 1	63.0	14.0	P 2	70.0	36.0	P 3	51.0	18.0	P 4	47.0	13.0	P 5	欠番	
P 6	43.0	11.0	P 7	48.0	19.0	P 8	欠番		P 9	85.0	19.0	P 10	50.0	15.0
P 11	欠番		P 12	55.0	16.0	P 13	64.0	38.0	P 14	(50.0)	22.0	P 15	52.0	40.0



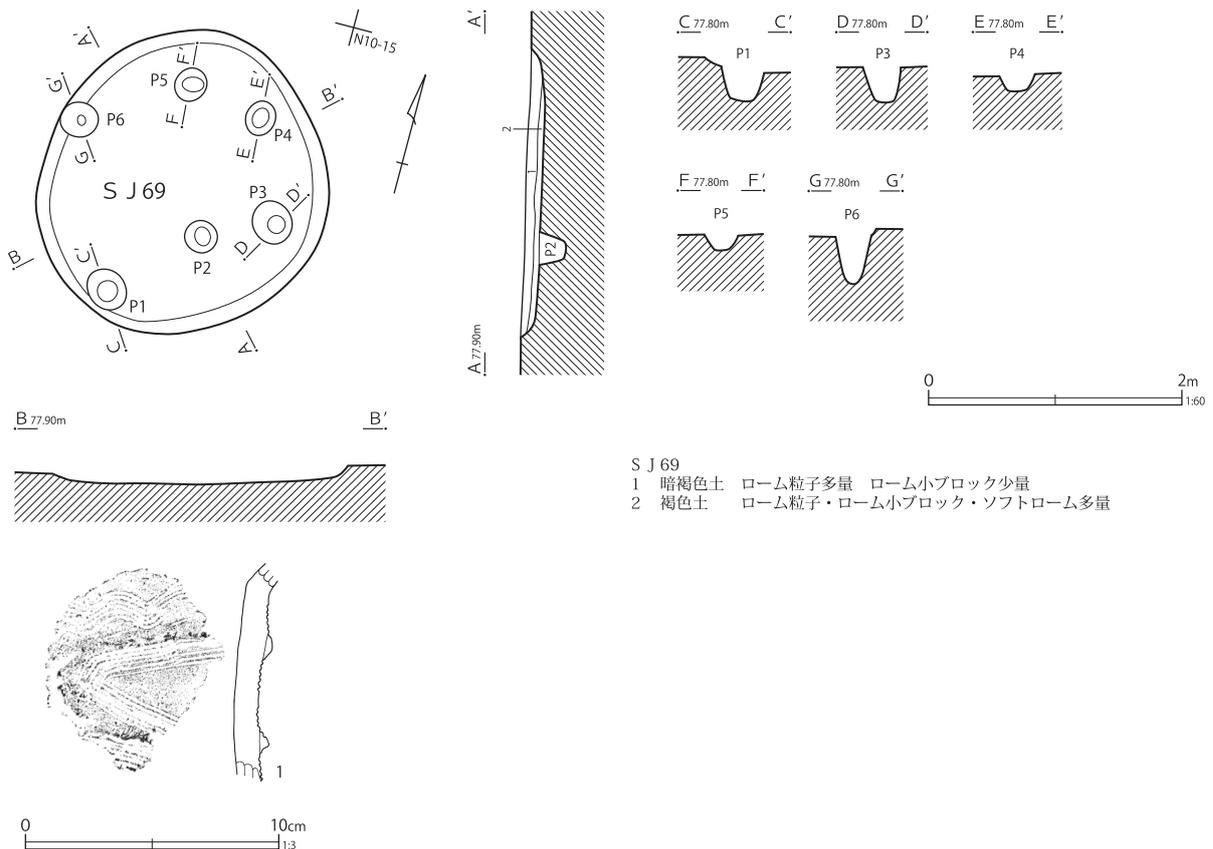
第347図 第49号住居跡出土遺物

ないため、住居跡の時期は不詳である。

第347図 1はP 1、2はP12からの出土である。1は角押文でモチーフを描く勝坂式古段階の土器である。2は底部破片である。この2点では住居跡の時期を決め難い。

第69号住居跡 (第348図)

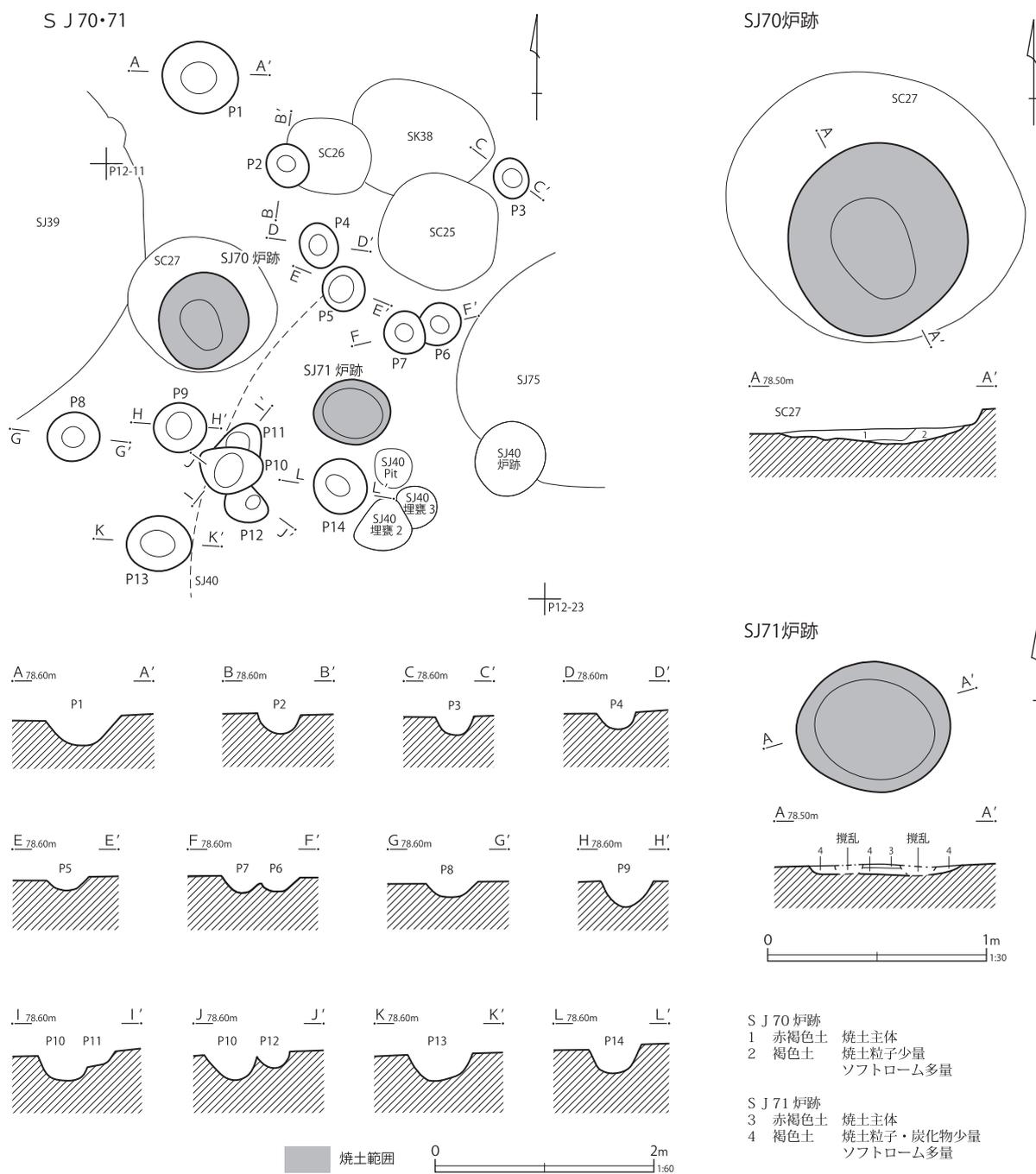
N-10区に位置する。平面形は長径2.33m、短径2.27mの不整楕円形を呈する。掘り込みは



第348図 第69号住居跡・出土遺物

第144表 第69号住居跡柱穴計測表 (第348図)

ピットNo.	長径 (cm)	深さ (cm)												
P 1	33.0	22.0	P 2	26.0	12.0	P 3	34.0	31.0	P 4	28.0	13.0	P 5	27.0	11.0
P 6	30.0	37.0												



第349図 第70・71号住居跡

0.12mと浅い。

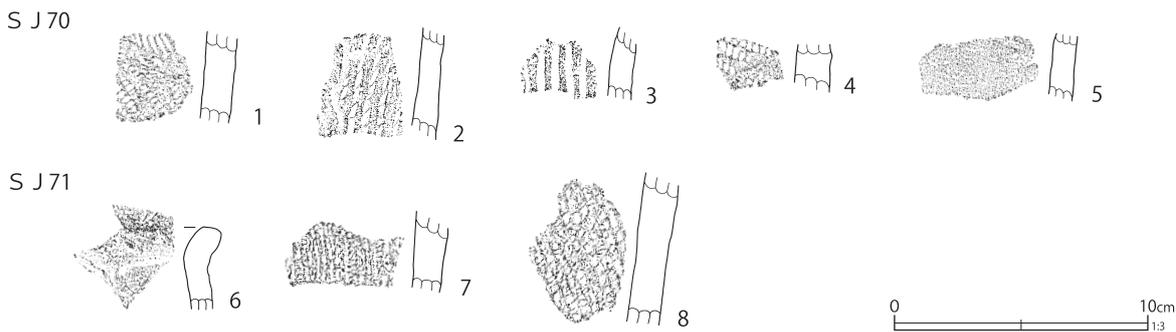
壁溝は検出されなかった。柱穴は6本検出されたが、いずれも浅く、配置的にも支柱穴を特定できない。非常に小形の遺構であることから、P3、P6の2本柱穴等も考えられよう。支柱穴の深さは、P3=31cm、P6=37cmである。

炉跡、埋甕はともに検出されなかった。

住居跡としたが小竪穴遺構の可能性もある。住居跡の時期判定は難しいが、出土した土器片から勝坂式中段階の所産と推定される。

出土遺物は1であるが、胴部の隆帯区画に沿って波状条線文を施文する。阿玉台Ⅲ式に比定されよう。

石器は出土していない。



第350図 第70・71号住居跡出土遺物

第145表 第70・71号住居跡柱穴計測表（第349図）

ピットNo.	長径 (cm)	深さ (cm)												
P 1	70.0	25.0	P 2	40.0	20.0	P 3	36.0	18.0	P 4	42.0	15.0	P 5	40.0	13.0
P 6	40.0	13.0	P 7	38.0	13.0	P 8	47.0	13.0	P 9	48.0	23.0	P 10	57.0	22.0
P 11	(40.0)	12.0	P 12	(40.0)	15.0	P 13	57.0	24.0	P 14	50.0	25.0			

第70・71号住居跡（第349図～第350図）

P-11・12区に位置する。第39号住居跡、第40号住居跡、第75号住居跡と重複するが、新旧関係は不明である。掘り込みがないため、住居跡の規模や形状とも不明である。

壁溝は検出されなかった。柱穴は2軒合わせて14基を想定したが、いずれも浅く、配置的にも支柱穴を特定できない。

第70号住居跡の炉跡は、径80cm程の地床炉で、焼土を主体とする炉床のみが検出された。

第71号住居跡の炉跡は、60cm×70cmの不整形の焼土範囲を検出したが、炉床のみが現存していた。

埋甕は検出されなかった。

時期を決定する遺物が出土していないことから、住居跡の時期は不詳である。

遺物は第350図1～8が柱穴の中から出土した。

第70号住居跡では、1がP2、2がP14、3がP13、4、5がP8から出土している。1は爪形文を、3は沈線文を施文する勝坂式で、2は捺糸文L、4は単節RL縄文を施文し、5は無文での深鉢胴部破片である。

第71号住居跡では、6、7がP4、8がP9から出土した。6は口縁部破片で、7は捺糸文、

8は0段多条RLの縦走縄文を施文する深鉢の胴部破片である。

石器は出土していない。

第72・73号住居跡（第351図）

P-12・13区に位置する。2軒は重複するが、掘り込み等がないため、住居跡の規模や形状とも不明である。

壁溝は検出されなかった。柱穴は2軒合わせて17基を想定したが、浅いものが多く、配置的にも支柱穴を特定できない。

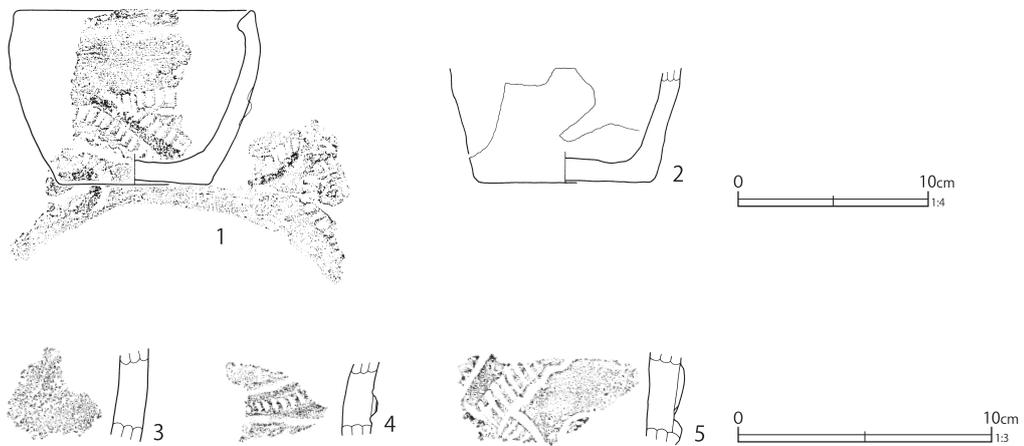
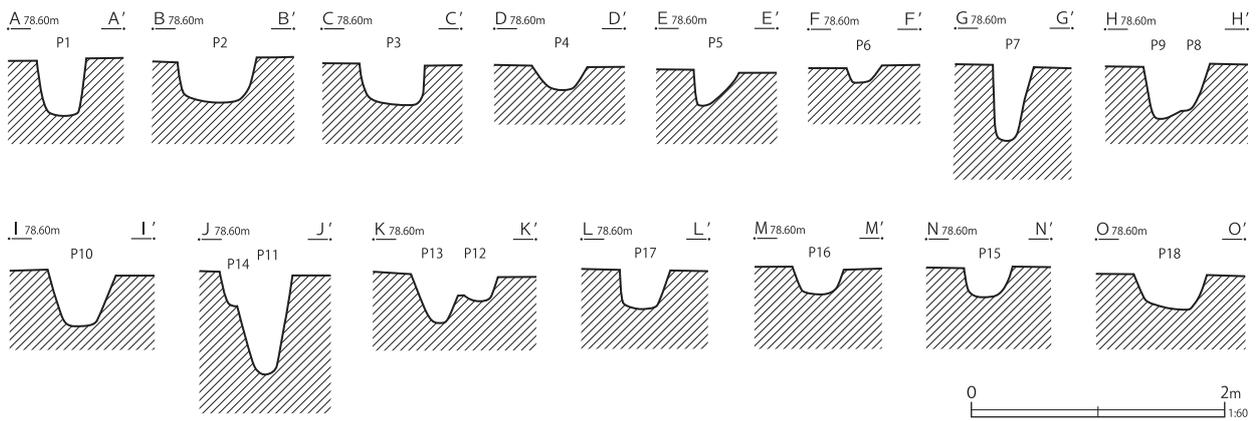
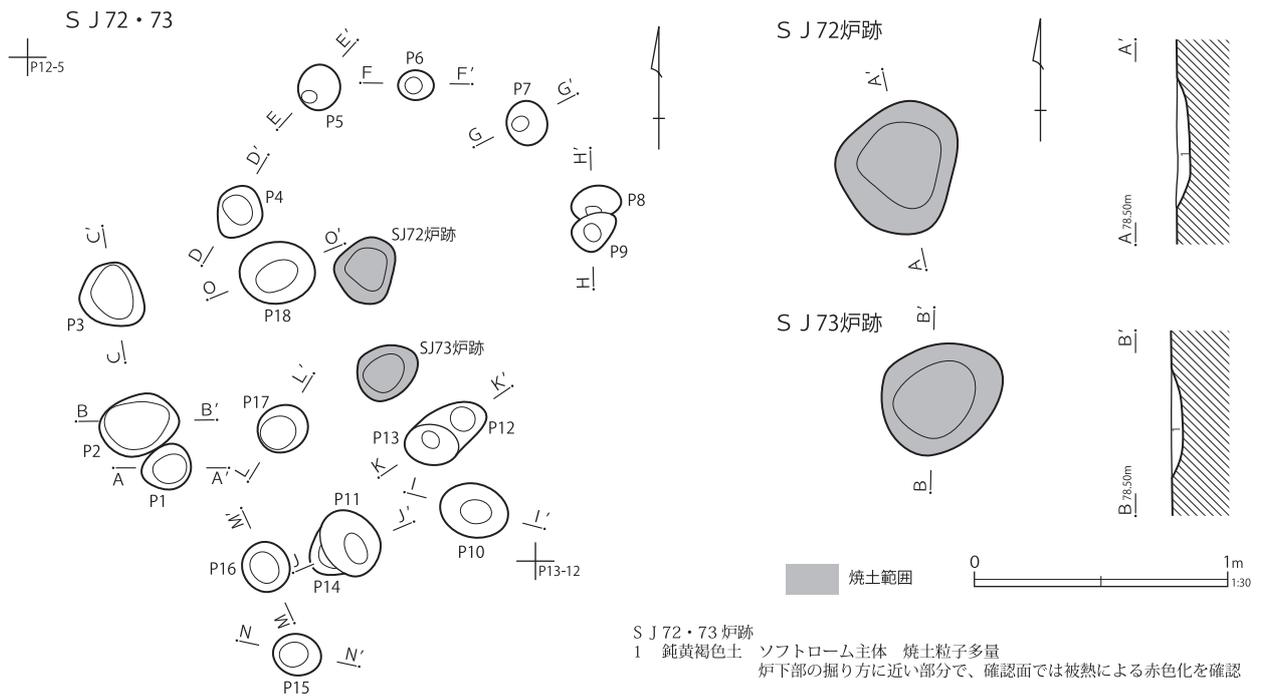
両住居跡の炉跡とも地床炉と思われるが、確認時には径50cm程の被熱した炉床部のみが現存していた状況であった。

両住居跡とも、埋甕は検出されなかった。

両住居跡とも時期不詳であるが、柱穴から藤内式土器が出土していることから、当該期所産の可能性も残されている。

出土遺物は、1がP11、2がP12、3がP2、4がP10、5がP11からの出土である。

1は小形の鉢形土器で、口唇部が内削状に突出し、胴部下半部に爪形文を伴う隆帯文を施文する。モチーフ構成は不明であるが、勝坂式中段階の藤内式に比定されよう。



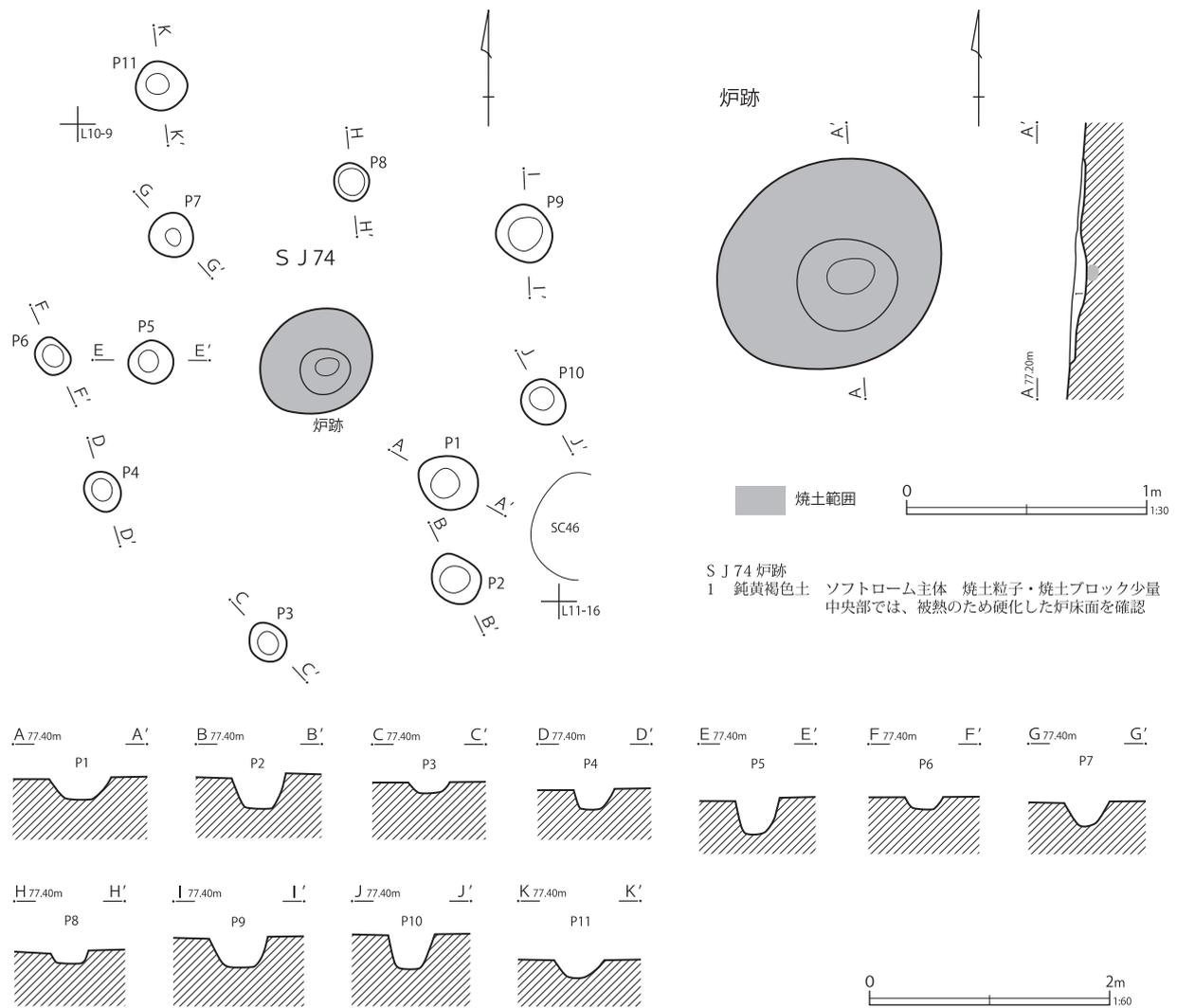
第351図 第72・73号住居跡・出土遺物

第146表 第72・73号住居跡柱穴計測表 (第351図)

ピットNo.	長径 (cm)	深さ (cm)												
P 1	38.0	45.0	P 2	63.0	33.0	P 3	53.0	33.0	P 4	43.0	18.0	P 5	34.0	27.0
P 6	28.0	12.0	P 7	35.0	59.0	P 8	39.0	37.0	P 9	35.0	42.0	P 10	55.0	43.0
P 11	54.0	80.0	P 12	(32.0)	20.0	P 13	41.0	39.0	P 14	(14.0)	27.0	P 15	38.0	23.0
P 16	39.0	21.0	P 17	41.0	31.0	P 18	58.0	28.0						

第147表 第72・73号住居跡出土復元土器観察表 (第351図)

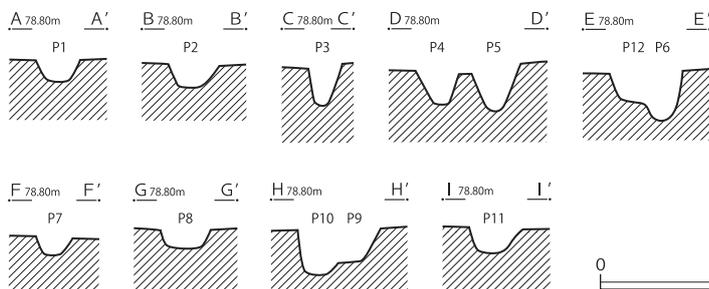
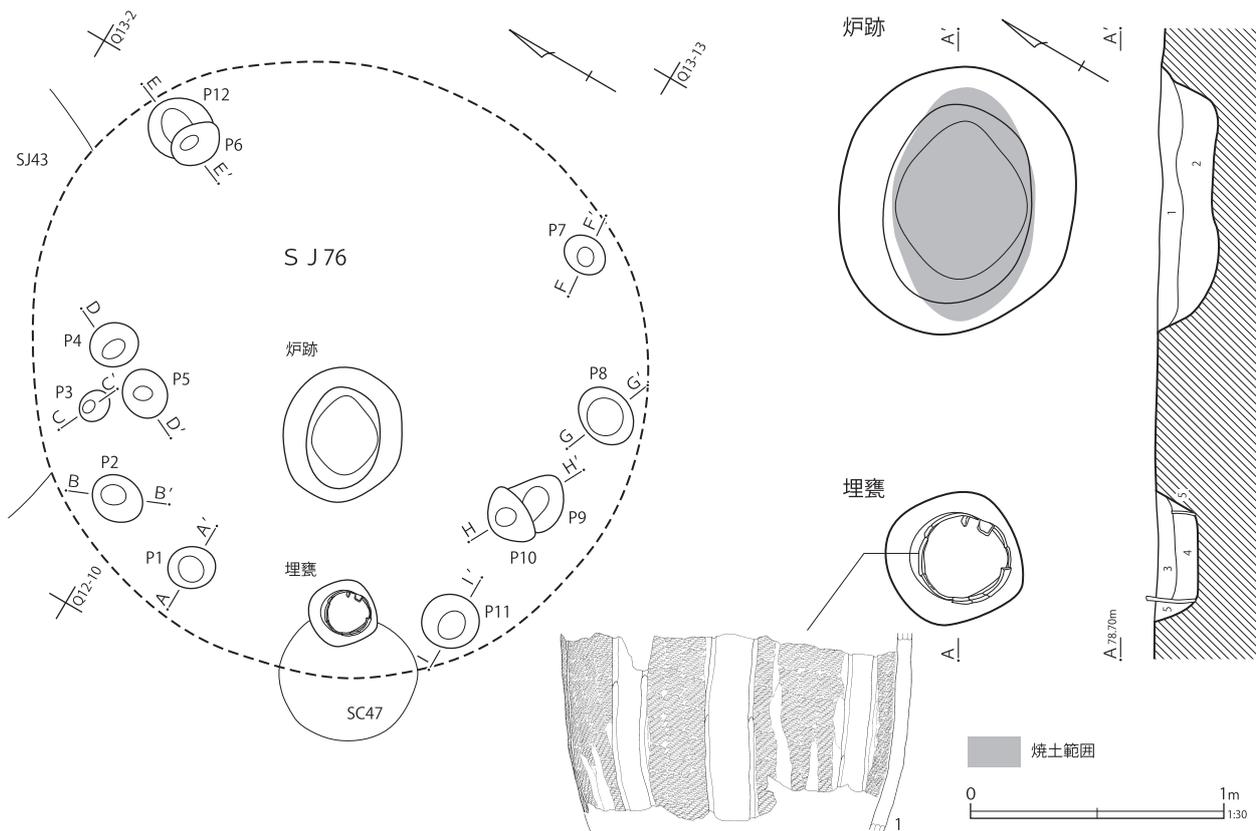
番号	器高 (cm)	口径 (cm)	最大径 (cm)	底 (cm)	備考	番号	器高 (cm)	口径 (cm)	最大径 (cm)	底径 (cm)	備考
351-1	[9.2]	(12.2)	-	(7.8)	50%	351-2	[6.0]	(12.1)	-	(9.0)	20%



第352図 第74号住居跡

第148表 第74号住居跡柱穴計測表 (第352図)

ピットNo.	長径 (cm)	深さ (cm)												
P 1	52.0	18.0	P 2	45.0	28.0	P 3	35.0	9.0	P 4	35.0	16.0	P 5	37.0	30.0
P 6	31.0	10.0	P 7	37.0	22.0	P 8	32.0	10.0	P 9	49.0	25.0	P 10	39.0	29.0
P 11	43.0	15.0												



- S J 76 炉跡
- 1 赤褐色土 焼土主体 炭化物少量
ローム小ブロック微量
 - 2 赤褐色土 焼土ブロック及び焼土主体
最終的な火床面は本層上面
- S J 76 埋葬
- 3 暗褐色土 ローム粒子・炭化物少量
 - 4 暗褐色土 ローム粒子多量 炭化物少量
ローム小ブロック微量
 - 5 暗褐色土 ローム粒子・ソフトロームを多量

第353図 第76号住居跡

第149表 第76号住居跡柱穴計測表 (第313図)

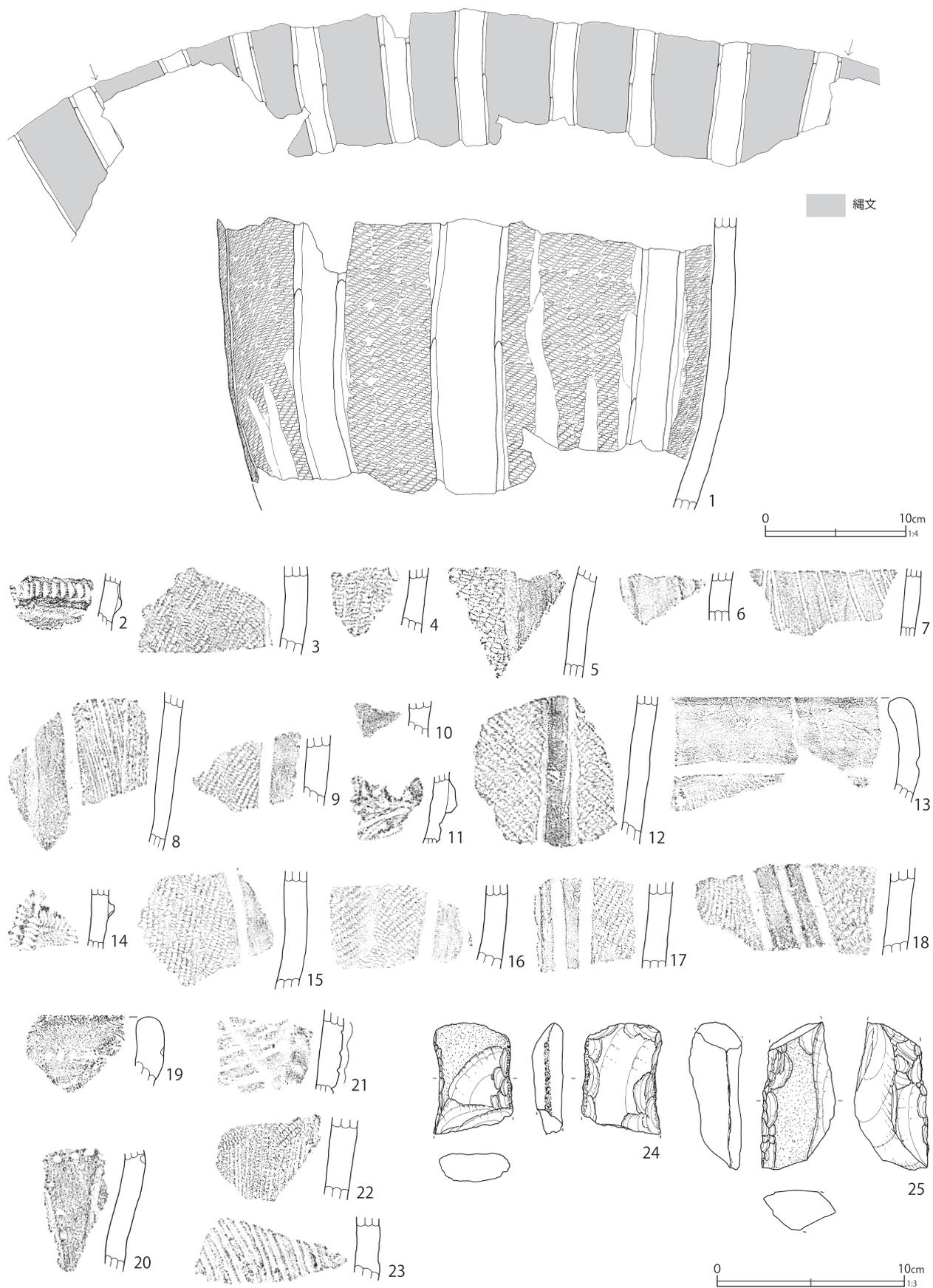
ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)												
P 1	37.0	15.0	P 2	42.0	15.0	P 3	26.0	30.0	P 4	39.0	25.0	P 5	40.0	40.0
P 6	59.0	38.0	P 7	35.0	15.0	P 8	49.0	15.0	P 9	45.0	25.0	P 10	50.0	35.0
P 11	45.0	20.0												

第150表 第76号住居跡出土復元土器観察表 (第354図)

番号	器高(cm)	口径(cm)	最大径(cm)	底径(cm)	備考
354-1	[19.8]	-	36.8	-	30%

2は無文の底部である。3は無文土器、4は隆帯に刻みを施し、5は隆帯脇に爪形文を施文し、波状に沈線を沿わせている。藤内式に比定されよう。本遺跡では、勝坂式古段階や中段階の住居跡は

小形が多く、ローム面への掘り込みの浅いものが目立つ。地床炉のみで、壁溝がないことを考慮すると、この時期の住居跡である可能性もある。また、古い住居跡では4本主柱が多い。地床炉のみ



第354図 第76号住居跡出土遺物

第151表 第76号住居跡出土石器観察表 (第354図)

番号	器種	分類	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
354 - 24	打製石斧	Ⅲ2②イ	頁岩	[5.9]	[4.2]	1.6	56.0	
- 25	打製石斧	V2②イ	ホルンフェルス	[7.9]	4.0	2.8	87.9	

の住居跡であることから、加曾利EⅢ式期を想定して柱穴を見つけており、配置関係を見誤っている可能性もある。

第74号住居跡 (第352図)

L-10区に位置する。ローム面への掘り込みがないため、住居跡の規模、形状とも不明である。

壁溝は検出されなかった。柱穴は11基検出されたが、いずれも浅く、主柱穴を特定できない。

炉跡は地床炉で、1.0m×0.8m程の範囲に炉床を検出した。掘り込みは浅く遺存状態は良くなかった。

埋甕は検出されなかった。

住居跡は時期を決定できる遺物が出土していないため、時期不詳である。

第76号住居跡 (第353図～第354図)

Q-12・13グリッドに位置する。西側で第43号住居跡と重複するが、新旧関係は不明である。また、埋甕としたものは第47号集石を壊して作られている。

掘り込みがないため、住居跡の規模、形状とも不明であるが、炉を中心とした柱穴の配置からは直径5m程の不整円形のプランが想定される。

壁溝検出されなかった。

柱穴は12基を検出したが、東側部分は攪乱が著しく検出できなかった。いずれも浅いものが多く、配置的にも主柱穴を特定できない。

炉跡は1.06m×0.92mの楕円形を呈する大きな地床炉で、深さは10cm程である。炉床部全体に被熱による焼土化が見られる。なお、2層とし

たものはいわゆる掘方の部分で、焼土化が著しいことから、長期間の使用が想定される。

埋甕は炉跡の南西側で検出された。径50cm程の掘り込みに土器が埋設されるものであるが、大形の土器が逆位に埋設されていたことから、本遺構に伴わない可能性もある。

遺物は第354図1～25が出土した。

土器は1～23である。1は埋甕である。2～7は炉内から、8、9は埋甕内から、10はP3、11～13はP5、14はP10、15はP11からの出土である。

1は大形の加曾利EⅢ式キャリパー形土器で、胴部が埋設されていたものである。胴部には9本の幅広磨消懸垂文を施文するもので、地文に単節RL縄文を充填施文する。

2、11、14は流れ込みの勝坂式土器である。

3～6、9、12、15～18は磨消懸垂文を有する破片で、17、18は3本沈線間の磨り消しである。7、8は条線文を施文する曾利式系の土器と思われる。13は無文の口縁部が内湾して開く浅鉢で、無文の口縁部を沈線で区画する。胴部には条線文を施文する。

19は口縁部に、20は胴部に刺突文を施文するものである。

21は押圧を施した隆帯を垂下し、地文に斜行する沈線文を施文する曾利式系の土器である。

22は破片の上部に単節LR縄文を施文し、その下部に縦位の条線文を施文している。

23は条線文を施文する浅鉢の胴部であろう。

石器は24、25である。ともに打製石斧で、24は基部を、25は基部と刃部を欠損する。

報告書抄録

ふりがな	むかいほらえー/あしかりば								
書名	向原A/芦荊場								
副書名	株式会社秀拓飯能地区開発事業予定地に係る埋蔵文化財発掘調査報告								
シリーズ名	埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書								
シリーズ番号	第465集								
編著者名	金子直行 宮井英一 入江直毅 吉留頌平								
編集機関	公益財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団								
所在地	〒369-0108 埼玉県熊谷市船木台4丁目4番地1 TEL 0493-39-3955								
発行年月日	西暦2020（令和2）年12月23日								
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° / ' / ''	東経 ° / ' / ''	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因	
		市町村	遺跡番号						
むかいほらえーいせき 向原A遺跡 (第4次)	さいたまけんほんのうし 埼玉県飯能市 おおあざあしかりばあざ 大字芦荊場字 くぼ 久保57-1他	11209	004	35° 52' 06"	139° 22' 13"	20180101 ～ 20180331	1,250	土地造成	
あしかりばいせき 芦荊場遺跡 (第2・3・4次)	さいたまけんほんのうし 埼玉県飯能市 おおあざあしかりばあざ 大字芦荊場字 くぼ 久保12-1他	11209	003	35° 52' 08"	139° 22' 16"	20180101 ～ 20181109	14,750	土地造成	
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項		
向原A遺跡 (第4次)	集落跡	縄文時代	住居跡	9軒	土器・土製品・石				
		中・近世	集石土壇	5基	器・石製品				
芦荊場遺跡 (第2・3・4次)	集落跡	縄文時代	地下式坑	3基	陶磁器・在地産土				
		中・近世	土壇	6基	器・石製品				
		縄文時代	ピット	9基					
		中・近世	住居跡	80軒	土器・土製品・石				
		縄文時代	集石土壇	88基	器・石製品				
		中・近世	土壇	61基					
		縄文時代	特殊遺構	2基					
		中・近世	地下式坑	3基	陶磁器・在地産土				
		縄文時代	土壇	37基	器・銭貨・石製品・				
		中・近世	井戸跡	1基	鉄製品				
		縄文時代	溝跡	3条					
		中・近世	ピット	109基					
要約	<p>向原A遺跡と芦荊場遺跡は、南小畔川右岸の台地上で東西に並ぶ遺跡である。向原A遺跡は縄文時代中期の後葉である加曽利E式期の連弧文土器を主体にする時期の集落で、芦荊場遺跡の西側に寄った地区でも同時期の住居跡が検出されている。両遺跡を明確に区分するのは難しく、一体となって集落を構成していた可能性が高い。また、芦荊場遺跡は外径約180m、中央部に径約100mの広場を有する縄文時代中期の環状集落で、中期中葉の勝坂式期から加曽利EⅢ式期にかけての住居跡80軒が、いくつかのブロックに分かれて検出された。勝坂式期の住居跡は、覆土からいわゆる吹上パターン状態に多量の土器、石器が出土しており、同時期の信州系の土器や東北系、東関東系の土器群も出土している。勝坂式期から加曽利EⅠ式期への移行期の住居跡が存在する点は注目される。他に、焼礫を利用した蒸し焼き料理の屋外調理施設と考えられている集石土壇も88基検出されており、土掘り具である打製石斧が多量に出土していることとの関連も注目される。</p>								

埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第465集

向原 A / 芦荻場

株式会社秀拓飯能地区開発事業予定地に係る

埋蔵文化財発掘調査報告

(第1分冊)

令和2年12月13日 印刷

令和2年12月23日 発行

発行／公益財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

〒369-0108 熊谷市船木台4丁目4番地1

0493 (39) 3955

<https://www.saimaibun.or.jp>

印刷／山進社印刷株式会社